

アクセル・ワールド1

—黒雪姫の帰還—

どんなに時代が進んでも、この世から「いじめられっ子」は無くならない。アブな中学生・ハルユキもその一人だった。

彼が唯一心を安らげる時間は、学内ローカルネットに設置されたスカッシュゲームをプレイしているときだけ。仮想の自分を使って〈速さ〉を競うその地味なゲームが、ハルユキは好きだった。

季節は秋。相変わらずの日常を過ごしていたハルユキだが、校内一の美貌と気品を持つ少女〈黒雪姫〉との出会いによって、彼の人生は一変する。

少女が運送してきた謎のソフトウェアを介し、ハルユキは〈加速世界〉の存在を知る。それは、中学内格差の最底辺である彼が、敵を誅する騎士〈バーストリンカー〉となった瞬間だった。

ウェブ上でカリスマ的人気を誇る作家が、ついに電撃大賞・大賞・受賞デビュー！ 実力派が強く未来系青春エンタテイメント登場！



か-16-1



アクセル・ワールド1

川原 礫

電撃文庫 ① 570



ISBN978-4-04-867517-8  
CD193 ¥570E



ASCII  
MEDIA  
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価：本体 570 円

※消費税が別に加算されます



かわはら りき  
川原 礫

群馬県原町市出身、東京都練馬区在住。ストーリーはほぼ全て、荒川を自転車で行きながら考えているので、真冬と梅雨の季節には執筆スピードがガタ落ちする。好物はチーズ系のもの全般とアルミ系のもの全般。苦手はネ平の臭いことと向かい風と上り坂。

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1—黒雪姫の帰還—

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵は今回が初のイラストレーター。「電撃文庫」小荷子への依頼を見た文庫編集者が、今回の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業は夢の仕事を離れて、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

# アクセル・ワールド 01

## 黒雪姫の帰還



川原 礫  
イラスト/HIMA  
デザイン/ピル

「もっと先へ……加速したくはないか、少年」

黒雪姫

梅郷中学  
副生徒会長の  
アバター



「あの人は……」

# ピンクの ブタ

スカーレット・スミ  
中学内格差  
最底辺の少年  
ハルユキのアバター

二二年の黒雪姫さんと、  
直結してたって、ホント？

「えっ!? な、なん——」

チュリ

ハルユキの幼馴染



「……なんだこれ」

# シルバー クロウ

ハルユキの  
デュエルアバター



「……………」

# シナン・ パイル

謎の襲撃者

「中々、悪態では、あなたを苦しめます」



# HARUYUKI

is the...

"Pink Pig"  
in the  
Umesato Junior  
High School's  
Local Area  
Network.



**ハルユキ@**  
《学内ローカルネット》の  
『ピンクのブタ』

"Haruaki Arino"  
in the  
Real World.



**ハルユキ@**  
《現実世界》の  
有田春雪

"Silver Crow"  
in the  
Accelerated  
World.



**ハルユキ@**  
《加速世界》の  
『シルバー・クロウ』

# アクセル・ワールド 01

## 黒雪姫の帰還

川原 礫  
イラスト/HIMA  
デザイン/ビィビィ



■岡田聡(タロユキとメ)＝梅郷中学の副生徒会長。得意科目はお物理。学内アバターは自作プログラムの「男様お嬢」。

■ハルユキ＝有田春雪(アリタ・ハルユキ)。梅郷中学一年。いじめられっ子でより強味。ゲームは得意だが、内向的。学内アバターは「ピンクのブタ」。

■チユリ＝白崎千百合(クラシヤ・チユリ)。ハルユキの幼馴染。お茶会好きな元姫様。学内アバターは「紺色の猫」。

■タカム＝堂嶋武(マエヅミ・タカム)。ハルユキ、チユリとは幼少期からの知り合い。現在はハルユキたちとは異なる中学に通っている。剣道部所属の実験少年。

■荒谷(アラヤ)＝梅郷中のヤンキー。ハルユキいじめの主犯格。

■ニューロリンカー＝脳と量子無線接続し、映像や音声など、あらゆる五感をサポートする仮想現実。

■ブレイン・バースト＝国営機関からハルユキに転送されたニューロリンカー内のアプリケーション。

■学内ローカルネット＝梅郷中学内に構築されたローカルエリアネットワーク。出席確認や授業などに利用され、梅郷中の生徒は常時接続が義務となっている。

■グローバル接続＝世界中のネットと接続する行為。梅郷中学内ではグローバル接続は禁止されており、その代わりに学内ローカルネットが提供されている。

acc el World

「加速世界」  
 加速世界  
 加速世界

1

仮想黒板の右上に、黄色い手紙マークが点滅した。

授業中にばんやりしていたハルユキは、思わず首を縮めながら、同級生の顔点を移動させた。

途端、視界いっぱい広がる深緑色の黒板がスッと半透明に薄れ、整然と並ぶ生徒たちの背中と、その向こうに立つ教師の姿が鮮明化する。

教師、同級生、そして教師は現実の存在だが、透過する黒板とそこにびっしり板書された数式はそうではない。教師が空中に書きつけた数字と記号を、ハルユキの目の後ろに装着された「ニューロリンカー」が脳内で直接映像化しているのだ。

初老の数学教師は、どこかやり難そうに、何も持たない指先を被にだけ見える黒板に走らせながらぼそぼそと公式の解説を続けている。その声も、現実の音としてはとてもハルユキの耳に届くボリュームではないが、教師の首に巻きつくニューロリンカーが増幅・鮮明化し、ハルユキに送り込んでくる。

視線を近くに戻すと、先ほどよりも数式の増えた黒板が再び実体化した。どうやら受信したメールは、教師が宿題の詰まった圧縮ファイルを配布したものではなさそうだ。となれば、グローバルネットから隔離されている現在、送り主は同じ学校の生徒ということになる。

女子の課<sup>か</sup>が、校則を破<sup>やぶ</sup>って好意的メッセージを送ってきたのかも、などという期待は、中学校に入学してからのこの半年間でとうに捨てた、メールをそのまま、視界左下すみのゴミ箱にドロップしてしまいたいとハルユキは心底思ったが、そんなことをすれば後でどんな目に遭<sup>あ</sup>うか知れない。

嫌々ながら、教師が背中を向けたスキを覗<sup>のぞ</sup>き、右手を宙に上げて（この動作は仮想ではなく現実のものだ）メールアイコンを指先でクリックする。

瞬間、ぶびばばるぶびる！ という品性の欠片もないサウンドと、原色の洪水のようなグラフィックがハルユキの聴<sup>きこ</sup>覚と視覚にぶちまけられた。続いて、文字ではなく音声でメッセージ本文が再生される。

「アタくんは今日のコマンドを命令する！（バツクにぎやははという複数の笑い声）焼きそばパン二個と、タリームメロンパン一個と、いちごコーダルト三個を昼休み開始から五分以内に屋上まで持ってきて来い！ 遅刻したら肉まんの刑！ チタったらチャーンシューの刑だかんな！（再び爆笑）」

——左頬に感じる粘つくような視線の方向を見ろまい、とハルユキは意志力を振り絞って首を固定した。見れば間違<sup>まちが</sup>いなく覚悟<sup>かくご</sup>とその手下A、Bの嘲<sup>あざわら</sup>笑にさらなる屈辱<sup>くつじやく</sup>を与えられるからだ。

授業中にこんなメールを録音したり視聴覚エフエクトを掛けたりすることは勿論<sup>もちろん</sup>できないの

で、これは事前に作成しておいたものだろう。何という暇な連中か、おまけに何だよ「コマンドを命令」って、意味ダブってんだよバーカバーカ!!

と、脳内では罵れるものの、それを声に出すことは勿論、メールで返信することすらハルユキにはできない。荒谷が、いかに時代が進もうと絶滅しないゴキブリ級のバカだとすれば、そいつにイジメられるままになっている自分は輪を掛けた愚か者だからだ。

実際、ほんの少しの度胸と行動力さえあれば、このメールを含めて保存しておいた数十件の《証拠品》を学校に提出して、連中を処罰させることは容易いだろう。

しかし、ハルユキはどうしてもその先を想像してしまふ。

いかにニューロリンカーが国民一人に一台と言われるまでに普及し、生活の半分が仮想ネットワークで行われるようになったと言っても、所詮人間は《生身の肉体》という枷によってローレバルに規定され続ける存在でしかない。三度三度お腹も空くしトイレにも行く、そして蹴られれば痛いし、痛くて泣くのは死ぬほど惨めだ。

リンカースキルが進学や出世を決める、なんていうのは巨大ネットワーク企業のイメージ戦略に過ぎない。人間の価値を決めるのは結局、外見や腕力といった原始的なパラメータだけだ。それが、小学五年生のときに体重六十キロを超え、五十メートル走で十秒を切ったことのないハルユキが十三歳にして行き着いた結論だった。

朝、母親にニューロリンカーへチャージしてもらった昼食代の五百円は、寛谷たちにパンとジュースを奢らされて完全に足が出てしまった。小遣いを貯めた全財産の七千円ちよつとが残つてはいるが、これを使つてしまうと今月出るリンカー用ゲームソフトが買えない。

ハルユキの巨体は養費が異常に高く、一食でも抜こうものなら空腹で授業がしてくるほどだが、今日ばかりは耐えるしかない。それに、少なくとも《完全ダイブ》できる昼休み中だけならしのぐ術も残されている。

丸い体を限界まで縮め、ハルユキが向かったのは専門教室ばかり並ぶ第二校舎だった。現在では、理科の実験から家庭料の調理実習までが假想授業で行われているためこの棟は用無しになりつつあり、近寄る者は少ない。とくに、昼休みには生徒の姿はまったくない。

埃っぽい廊下の隅にある男子トイレが、ハルユキの専用隠れ家だ。とぼとぼと逃げ込んだ先で、ため息とともに足を止め、ハルユキは洗面台の上の鏡を見やった。

曇ったガラスの向こうから見返すのは、もしこれがテレビドラマなら、あまりにもベタすぎるだろうと突っ込みたくなるような《太ったいじめられっ子》。

癖の強い髪はあちこちに跳ねあがり、両頬の曲線にシャープさは欠片もない。だぶついた首回りに、制服のネクタイと銀色のニューロリンカーが食い込む様はまるで絞首刑だ。

この外見を何とかしようと、ほぼ絶食及び無茶な走り込みにまい進した時期もある。しかしその結果、昼休み中に貧血で倒れ、女子生徒数人の奔走を巻き添えにするという最悪な伝説を

作ってしまった。

以来、ハルユキは現実の自分を捨てて――少なくとも学生をあいだは――ことに決めたのだ。鏡からはコンマ一秒で目を離し、トイレのさらに奥へ進むと、端っこの個室に入る。しっかりと鍵をかけ、蓋を下ろしたままの便器に腰を下ろす。体の下でプラスチックがみしみし軋むのにももう慣れた。背中を水流タンクに預け、力を抜くと、目をつぶる。

唱えるのは、重苦しい体から魂の目を解き放つ魔法の呪文――。

「ダイレタト・リント」

音波コマンドを受け取ったニューロリンカーが、量子接続レベルを複感覚モードから全感覚モードへと引き上げ、ハルユキの体から重さと胃を絞るような虚感が増えた。

便座の硬さ、制座の解屈さも消失する。涼々の校庭から響いてくる生徒たちの歓声、トイレに満ちる洗浄剤の匂い、そして目の前ののっぺりとしたドアまでも、黒い闇に溶けてなくなる。  
 〈完全ダイブ〉。

重力感覚すらも切断され、ハルユキは暗闇のなかを落下した。

しかしすぐに、柔らかな浮遊感と紅色の光が全身を包んだ。両手と両足の先端から、フルダイブ時に用いられる〈仮想体〉が生成されていく。

黒いひびぬめ状の手足、ぶつくりした四肢と、ボールのような胴体は鮮やかな桃色。見ることはできないが、顔の中央には平らな鼻が突き出し、大きな耳が垂れ下がっているはずだ。つま



り、ひと言で形容すれば、ピンクのブタである。

コミカルなアバターまで、すん、と降り立った先は、いかにも文部科学省推薦といったデザインデザインのメルヘンチックな森の中だった。

巨大な青がそこかしこに生え、ひときわぬ緑がさす四形の草地の中央には、水晶のような泉が湧き出ている。外周には、内部が空洞となった巨大な樹木が輪をつくってそびえ立ち、その内側は教誨やレタリエーションに使えるよう、何層にも分かれて階段で繋がっている。

この仮想空間が、ハルユキの通う杉並区立梅郷中学校の学内ローカルネットだ。

森を行き交ったり三々五々固まって笑い声を上げているのは、これもほとんどが人間ではなかった。二足歩行するコミカルな動物が半数、あとは羽を生やした（と言っても飛べはしないが）妖精あり、ブリキのロボットあり、ロボの魔法使いあり、全て、ローカルネットにダイブしている梅郷中の生徒・教師のアバターである。

生徒のアバターは、教多用意された素体から自由に選択・カスタマイズできる。根気さえあれば、用意されたエディタを駆使して完全オリジナルの姿を一から組むことも可能だ。所詮は中学生の技術及びセンスなのではあるが、それでも四月にハルユキが披露した自作の黒い騎士アバターは大きな注目を浴びた。

——のも刺戟の策案だった。ハルユキはため息まじりに、現在の己の姿を見下ろした。ブラッタナイトのアバターは瞬く間に荒谷が巻き上げていき、ハルユキにはこのデフォルメのブタ

の使用を強制したのだ。

もっとも、独自性という点では模倣、真も負けてはいない。こんな自由的なボディを選択する者はいないからだ。現実すイドと同様、丸っこい体を懸命に縮めたハルユキは、小走りで一本の樹を自衛した。

と、中央の泉のほとりに、一際大きな人ばかりができてゐるのに気付いた。走りながら視線を送ったハルユキは、思わず足の速みを緩めた。生徒の輪の中央に、なかなか目撃することのできないレアなアバターが見えたのだ。

デフォルムセットにあるものではない。透明な宝石がもりばめられた、漆黒のドレス。手には畳んだ黒い日傘。背中には、虹色のラインが走る黒揚羽蝶の翅。

長いストレートの髪に繰取られた、雪のように白い顔は、これが自作だとは信じられない完璧な美しさだ。ハルユキも到底かなわない、プロとしても通用しそうなデザインスキルである。華やかな体をしどけなく巨大耳にもたれさせ、物憂げな表情で周囲のアバターたちの言葉を聴いている彼女が、生徒会副会長を務める二年生の女子生徒であることをハルユキは知っていた。驚くべきことにその美貌は、現実の容姿をほぼ完璧に再現したものであり、ゆえに隠せられた通り名が――。

（スノー・ブラッタ）、（黒雪姫）。

あのような存在と自分が、梅郷中の生徒であるという共通項をひとつにせよ持っていること

すらハルエキには嘘っぽく思える。こうして假想の視線を向けているだけで、自意識を苛む虚小感がいや増す気がして、無理やりに首を正面に戻す。

全力ダッシュで駆け込んだ先は、レクリエーションルームが設置されている大樹の一本だった。簡単に言えばゲームコーナーだが、もちろん市販ソフトのようなRPGや戦争ゲームなどは一切ない。タイズやバズルなどの知育系、または健全なスポーツゲームばかりだが、それでも多くの生徒たちが各コーナーに群がり、歓声を上げている。

彼らは皆、教室の自分の机や学食から完全ダイブしている。その間、生身の体は無防備に放置されているわけだが、ダイブ中の人間に憑依するのは明らかなマナー違反なので、気にする者はハルエキ以外にはいない。教室からロケットネットにダイブし、戻ってきたら、制服のズボンが脱がされていたのは入学して一ヶ月も経たない頃だったか。

現実の肉体をトイレに隠し、そして仮想空間ですら人の目から逃れるべく、樹の幹に刻まれた階段を駆け上がる。上に行けばいくほど、設置されたゲームは人気のないものになっていく。野球、バスケ、ゴルフ、テニスと通り過ぎ、卓球のフロアも無視してたどり着いたのは、(バーチャル・スカッシュ・ゲーム)のコーナーだった。

生徒は一人も居ない。人気がない理由は明らかだ。スカッシュというのは、テニスに似ているが、ラケットでボールを打ち込む先は上下左右正面が硬い壁に囲まれた空間であり、跳ね返ってきた球を黙々と一人でリターンし続ける、とことん孤独なスポーツだからだ。

本来ハルユキが好むゲームジャンルは、マシンガンを抱えて戦場を駆け回る主観射撃もので、それなら本場の連中とも互角以上にやり合える願望だ。もちろん日本でも人気のジャンルなのだが、まさか学校のネットにそんなものが用意されているわけもないし、それに――小学校の頃、クラスの男子はば全員をハンドガン一丁で撃ち殺し、翌日から千端いイジメにあった苦しい思い出もある。以降ハルユキは、学校の奴らとはジャンルにかかわらず二度と同じゲームをしないと誓っている。

がらんとしたコートの右端に参み寄り、操作パネルに片手をかざす。ハルユキの生徒IDが入力され、セーブされているレベルとハイスコアが読み出される。

ハルユキは、一学期の中ほどから昼休みはひたすらこのゲームで時間を潰してきた。結果、スコアはあきれるような数字に達しつつある。さすがに飽きてきた気もあるが、ここ以外に行く場所があるわけでもない。パネルから湧き上がったラケットを、悪いひづめのついた桃色の右手でしっかりと握る。

ゲームスタート、の文字に続いて、どこからともなくボールが降ってくる。それを、今日一日の戦場を込めたラケットで思い切り叩く。

ちかつ、と一瞬の回きを残して、レーザーのようにボールがすっ飛び、床と正面の壁にぶつかって戻ってきた。ほとんど視覚以上の反響で消滅し、瞬か自動的に導く最適解に従って、一歩左に動きながらバタハンドで打ち返す。

現実のハルユキには、無論こんな動きはできない。しかしここはあらゆるナマのしがらみから解放された電子の世界だ。ボールを認識し、体を動かすのはただ脳とニューロリンカー間を往復する量子信号のみ。

ボールはたちまち実体を失い、コートに閃くおぼろな軌跡でしかなくなる。ぽこん、ぽこんという効果音が一秒間に何度も繰り返され、機関連のようにつづく。それでも、ハルユキは体の擬機知原理に託望させ、ラケットを全方位に鳴らせ続ける。

くそ——現実なんて要るか。

無限のゲームスピードに挑みながらも無心にはなれず、脳裏を懸望に満ちた叫びが貫く。

なぜ、本物の教室や学校なんていう下らないものが必要なんだ。人間はもう仮想世界だけで生きていけるし、実際どうしている大人は腐るほどいる。過去には、人間の意識をとること量子データに置き換え、本物の異世界を構築しようという実験まで行われたほどだ。

それなのに、集団生活や学び、情操を育てるため、なんて胡蝶みたいな理由で子供はひとまとめに現実の檻にぶちこまれる。寛谷たちはいいだろう、適度にストレスを解消し、小遣いも節約できるんだから。でも、僕は——これ以上、どうすればいいんだ。

ぽばん、と音がして、視界の隅でゲームレベルがひとつ上がった。

いきなりボールが加速する。反射角度も不規則になり、予想外の方から曲線を描いて襲い掛かってくる。

ハルユキの反応が徐々に遅れはじめる。

「夢生、もっと——もっと加速しろ。」

仮想世界も、現実すらも、あらゆる壁をぶち抜いて、誰もいない場所へ行けるほど——  
速く！

すかつ、とラケットが壁を切った。光線と化したボールがハルユキの頬を擦め、背後へ抜けて、消滅した。情けなくもコミカルな効果音とともに、ゲームオーバーの文字が降ってきて、コートではよんばよんと弾む。

直滅するハイスコアには目もくれず、ハルユキはうなだれたままゲームを再スタートしようとパネルに向き直った。

突然の音が、ハルユキの神聖な隠れ家を震わせたのは、その時だった。

「あ——っ!! こんなトコにこもってたのね!!」

耳が、というより脳がキーンと痺れるほどの甲高い叫び声。ざくり、と背中を強烈にせながら振り向いたハルユキが見たのは、同じく動物型の生徒アバターだった。

と言っても、ハルユキのブタのような滑稽さは微塵もない。しなやかな細身を、紫がかった銀の毛皮に包んだネコだ。片方の耳と尻尾の先に、濃いブルーのリボンを結んでいる。ポリゴンを一から組んだものではないが、相当に各所のパラメータをいじり込んである。

金色の虹彩を持つ瞳に怒りの色を浮かべ、ネコは小さな牙の生えた口を大きく開けてもう一

度叫んだ。

「ハルが最近、昼休みのあいだずーっと寝ないから探し回ってたのよ！ ゲームはいいけど、何もこんなマイナーなのやらなくても、下でみんなとやればいいじゃない！」

「……オレの勝手だろ、ほっとけよ」

どうにかそれだけ言い返して、ハルユキはコートに向き直ろうとした。しかし銀の本コはひよいと首を伸ばし、ゲームオーバー表示を一瞥すると、さらに高い声で喚いた。

「えーっ、何よこれ……レベル152、スコア263万!? あんだ……」

——すごいじゃない！

などという台詞を浅ましくも一瞬期待したハルユキを、本コはあっさりと裏切った。

「バカじゃないの!? ごはんも食わずに何やってんのよ！ 今すぐ落ちなさい!!」

「……やだよ、まだ昼休み三十分もあるじゃないか、お前こそどっかいけよ」

「あーそう、そういう態度とるんだつたら、あたしも実力を行使するからね」

「やれるもんならやってみろ」

ばさばさと言いつ返し、ハルユキはラケットを握りなおした。空内ネットのアドバイザーに、〈当たり判定〉はない。不適切な行為を防止するという名目で、生徒は他の生徒の仮想体を触れないのだ。もちろん、他人を無理やりログアウトさせるなど論外だ。

本コ型アドバイザーは、細い舌を限界まで突き出してべーっとなやっってから、一声叫んだ。

「リント・アウト！」

即座に、光の渦と鈴に似た音を残して姿がかり消える。

ようやく煩いのが消えた、儼かな寂しさを短い静息で吹き散らした、その瞬間。

がつん！と、少々清湛にならない衝撃が頭を襲い、周囲の光景何もかもが消え去った。

暗闇の向こうから、点状の光が引き伸ばされるように、現実の風景が戻ってくる。

ずしりと圧し掛かる自重を感じながら、ハルユキは懸命に瞬きし、目の焦点を合わせた。

元の、男子トイレの個室だ。しかし、眼前にあるべきブルーグレーのドアの代わりに、ハル

ユキは思わぬものを見た。

「おま、……なん……」

すぐ目の前で仁王立ちになっているのは、ひとりの女子生徒だった。ブレザーのリボンの色

は、同じ一年生であることを示す緑。

ハルユキとは、重量比3:1を切ると思われるほどに小柄だ、ショートカットの前髪を右横

に持ち上げ、背のピンで留めている。猫背めいた小さな輪郭に、不釣り合いに大きな瞳が、怒り

に燃えてハルユキを睨んでいる。

左手には小ぶりのバスケツト、そして右手はまっすぐハルユキの頭上まで伸ばされ、小さな

拳を固く握っていた。それを見て、ハルユキはようやく自分がなぜ完全ダイブから突如切断さ

れたのか理解した。女子生徒があのだんコッてハルユキの頭をとつき、その衝撃でニューロリ



ンカーの安全機構が働いて自動リシクアウトしたのだ。

通常、セーフティは肩を揺すられたり大声で呼びかけられたりするだけで発動するし、神経質な女子は周囲一メートル以内に誰かが接近した途端リシクアウトするように設定したりもする。ハルユキが臨天をぶんだ隙に落ちてくるまで、出入者に気付かなかったのは、トイレの個室に体を隠し、セーフティレベルを最低にまで落としていたからだ。

「お……お前なあ!!」

驚きあきれつつ、ハルユキはこの学校で唯一バニクスに会話できる女子に向かって叫んだ。  
「何やってんだよ!! この男子トイレだぞ!! 鍵かかってんのに……バカじゃねえの!!」

「バカはおまえじゃ」

ハルユキの幼馴染にしてスカートのまま男子トイレの仕切り壁を乗り越える剛の者、倉嶋千百合は、ぶすつとした声で言い返すと右手を戻し、後ろ手にドアの鍵を開けた。

身軽な動作でびよん、と個室から飛び出る。栗色の髪にすべる日光に思わず目を細めるハルユキを、千ユキはようやく僅かに見せた笑顔とともに促した。

「はら、とっとと出てきなさいよ」

「……………わーったよ」

ため息を吞み込み、ハルユキは便座の蓋を軋ませながら体を起こした。出入り口に向かう千ユキを追いながら、もう一つの疑問について尋ねる。

「……なんでここが判ったんだ」

答へはすぐには返つてこなかった。男子トイレから首だけ出して外の様子を確認したチユリは、ずかりと廊下に出てから、短く言つた。

「あたしも屋上にいたの。だから發つけた」

ということば――。

「……見てたのか」

廊下に一步踏み出した足を止め、ハルユキは低く呟いた。

チユリは言葉を操すように働き、背中を奥の壁に預けてから、ようやくこくりと頷いた。

「……あたし、あいつらの事にはもう口出ししない。ハルがそれていいって決めたんなら……しようがないから。でも、ご飯は食べたほうがいいよ。体に悪いよ」

どこか無理したような笑みを浮かべ、チユリは左手のバスケットを差し出した。

「あたし、お弁当つくってきた。味は保証できないけどさ」

――惨めだ、とハルユキは思った。

チユリの言葉と行為のなかに、憐れみ以上の感情を探そうとしてしまう自分の心が、どうしようもなく驚けなかった。

なぜなら、チユリには、れっきとした彼氏が居るのだ。あらゆる面でハルユキと対照的な、もう一人の登場人物が。

自分の口が勝手に動き、妙に平板な声を放つのを、ハルユキは聴いた。

「……タタに作ったやつ之余りかよ」

チユリの顔が、きつと曇った。きつく寄せられる眉の下、瞳を見ることができず、ハルユキは視線を廊下に落とした。

「ちがうよ、タツくんのところは輪舞だもん。これ……サンドイッチ、ボチトサラダとハムチーズだけだよ。ハル、好きでしょ」

視界に入ってきた白いバスケットを、ハルユキは右手でそっと押し戻そうとした。

しかし、現実世界の緩慢な肉体は、ハルユキの意思とかけ離れた急激な動きでバスケットをチユリの手から叩き落とした。床にぶつかった拍子に蓋がはずれ、水色のクッキングペーパーの内側から、三角に切られたサンドイッチが一つ、二つ飛び出して彩を崩した。

「あっ……」

反射的に護ろうとしたが、頭の奥があつと熱くなり、言うべき言葉は形にならなかった。顔を上げることすらできず、俯いたまま後ずさると、ハルユキは一声叫んで身を翻した。

「い……いらいねーよ!!」

今すぐいでもこの場所からログアウトしたい、ハルユキは痛切にそう思ったが、しかし勿論それは不可能だった。せめて懸命に走ったが、現実の肉体はどうしようもなく鈍重で、背後で小さくすすりあげる声から逃れることはできなかった。

最悪な気分て午後の授業とホームルームを聞き流し、ハルキは逃げるように教室を飛び出した。

二つ隣のチユリの教室、あるいは校門、あるいは増り道のどこかで彼女を待って謝るべきだという声を意識の埒外に押しやり、もう一つの隠れ場所である図書室へと駆け込む。

本来、図書室などという空間はとうにその役目を終えている。しかし、大人の中には学校そのものと同じようにペーパーメディアの本も子供の教育に必要なと考える連中がいて、資源と空間の無駄としか思えない真新しい背表紙が書架に並べられているのだ。

もともと、そのおかげで学校内に貴重なパーソナルスペースが確保できるのだから文句は言えない。カムフラージュにハードカバーを二、三冊抱えて壁際の閲覧ブースに閉じこもったハルキは、狭い椅子に体を押し込むと、シンカーが認識できるぎりぎりの音量で完全ダイブを命じた。

授業が終わってから数分しか経っていないだけあって、学内ネットは閑散としていた。いまのうちにいつもの場所に引きこもるべく、高速で草花を横切り樹の陰を登る。

バーチャル・スカッシュコーナーも当然無人だった。本当は、こんな単純な球当てではなく、血みどろの戦争もので胸のめやめやを一時でもふっ飛ばしたいところだが、グローバルネットには接続できずゲームアプリの起動も制限されている学校内では止むを得ない。

空腹はもう限界を超えていたが、それでもすぐに増殖する気にはならなかった。増殖道でチユリに遭遇したら、どんな顔で何を言えはいいのかまったく判らない。いや、聞けばいいのだが、自分の口を悪思に綻わせられる自信がそもそももない。

——あのときも、そうだったな。

昔、同じようにチユリを泣かせてしまったときのことを思い出しそうになり、ハルユキはきつく目をつぶった。そのまま操作パネルに右手をかざし、ロダインする。

手探りでラケットを掴み、体の向きを変え、コートに正対した。

目を開け、落下してくるボールに、あらゆる細胞を叩きつけようとして――。

ハルユキは、全身を凍りつかせた。

コートの中央に表示されている原色の立体フォントが、記憶と異なる数字を表示させていた。  
「レベル……166!」

ハルユキがつい数時間前に更新したレベルを、10以上も上回っている。

一体何故、スコアは生徒IDごとに管理されているはず、と一瞬思ってから、すぐに悟った。あのとき、チユリのげんこつによってハルユキは強制ログアウトさせられたため、ゲームがそのまま保持されたのだ。だから、誰かがその続きをプレイを再開し、スコアを塗り替えることは可能だ。しかし、

自分以外の誰がこんなとんでもない点をする?

ハルユキの、崩壊寸前のブライドをどうにか維持させているもの、それは完全ダイブ環境、下のVRゲーム・テクニクだ。勿論、座の良さが勝敗を左右するタイスやボードゲームは除かれるが、反射速度がものを言うガンシューティングやアクション、レースゲームなら、この学校で自分に勝てる数はいないという自信がハルユキにはあった。

それをひけらかしたことはない。自分が目立ってもろくなことがないのは、小学校の頃から願と言うほど学習している。あえて確認するまでもないとこれまでは思っていたのだが……この、スカッシュゲームの勝るべき得点は……。

その時。

背後で、声が出た。チユリではない。女性だが、もっと低く、雨のように滑らかな響き。

「あの馬鹿げたスコアを出したのはキミか」

おそるおそる振り返ったハルユキの目の前に立っていたのは。

闇に銀をちりばめたドレス。杖。あるいは剣のように床に突かれた傘。純白の肌と漆黒の瞳。

――（黒雪姫）。

アバターでありながらデジタル奥さのかけらもない、一種凄絶な美貌を骨かに傾け、学校の有名な名人は音もなく前に進み出た。

全身でそこにだけ色彩のある紅い唇にかすかな微笑を浮かべ、黒雪姫は延けて言った。

「もっと先へ……（加速）したくはないか、少年」

その気があるなら、明日の昼休みにラウンジに來い。

たったそれだけを言い残して、黒雪姫はあっけなくロダアウトした。

アバターがハルユキの視界に存在した時間は十秒に満たなかつたろう。ローカルネットサーバーのパダが、いっそ幻覚を見たのだとすら思える、余りにもあり得なさ過ぎる出来事だったが、しかし、コート上に浮かび続ける恐るべきスコアはたしかな現実だった。

もう、ハイスコア更新に挑戦する気すら起こらず、ダイブを終了したハルユキはそのまま図書館の閲覧ブースでばんやりと座り続けた。耳の奥では、三つの台詞だけが無限に連続再生されていた。黒雪姫の口調は女子中学生としては異質だったが、あの圧倒的存在感とミックスされる違和感は皆無で、むしろ男子だけでなく女子生徒にも絶大な人気がある理由の一端なのだろうと思えた。

やがてふわふわした足取りで学校を出て、家路をたどる間も、体はほとんど自動操縦のありさまだった。ニューロリンカーが視聴覚モードで表示する交通予測ナビがなければ、二、三度車に轢かれていたかもしれない。

高田寺の高層マンションにある無人の自宅に帰り着くと、ハルユキはまっさきに冷凍びずを温め、炭酸飲料と一緒に平らげた。両親はすいぶん昔に離婚し、今は母親と一緒に暮らしているが、毎夜零時を回らないと帰ってこないのだから登校直前に昼食代をもらう一瞬しか顔を合わせ

ない。

すきつ腹をジャンクフードで満たし、自分の部屋に引っ込む。いつもならまずダローバルネットの巡回コースをチュックして、その後ローロッパあたりの戦場を数時間駆け回り、余力で宿題を片付けてから寝るのだが、今日に眠っては何をする気も無い。

余りにも色々なことがあり過ぎたせい、脳が睡れているかのように重く、ハルユキは着替えてニューロリンカーを外すなりとすんとベッドに倒れこんだ。

眠りは、しかし、とても安らかとは思えないものだ。荒谷たちの嘲笑、チュリの涙、そして黒雪姫の謎めいた言葉が繰り返し夢に現れ、ハルユキを翻弄した。

もっと先へ——（加速）したくはないか。

夢のなかで、黒雪姫はアバターではなく現実の同生団会長の姿だった。全校集会の壇上で超然とした振る舞いを保つ彼女が見たことはないはずなのに、なぜか夢ではどこか誘うような小悪魔的な微笑とその唇に浮かべ、ハルユキの耳に囁くのだった。こっちは来い、と。



## 2

そう、全部夢だったのだ。昨日の、ローカルネットでの遭遇も含めて。

翌水曜日、いつものように憂鬱な顔で登校したハルユキは、そう思いながら教室に入った。既視感溢れる授業に、繰り返される寛谷たちの憂鬱メール。二日連続で昼飯をタカられるのは初めてだったが、指定されたのは昨日と同じ焼きそばパンとクリームメロンパンだった。どんなに好きなんだよ、と思いながらメールを閉じたハルユキは、昼休みのチャイムとともに席を立った。

のろのろした参調に向かったのは、しかし寛谷たちに呼び出された屋上ではなく、校舎一階、学生食堂に隣接したラウンジだった。

安物の長テーブルがぎっしりと並ぶ学食とは違い、半円形のラウンジには清潔な白い丸テーブルが余裕を持って配置されている。大きな採光ガラスから、秋に色づく中庭の木々を一望できる、間違いないく梅郷中学校で最も上等な空間だ。

ゆえに、一年生は使用できない不文律がある。テーブルを囲む生徒たちのリボンとネクタイは全て青（二年生）か緑（三年生）で、緑はまったく見えない。

上級生たちの半数はコーヒーや紅茶のカップ片手に談笑し、半数は高い背もたれつきの椅子

に体を預けて目を閉じている。眠っているのではなく学内ネットに完全ダイブしているのだ。ハルユキはまず、ラウンジの入り口の観葉植物にどうにか身体を隠し、内部をうかがった。居るわけではない。昨日のアレは夢だったのだから、半ば以上そう確信していた——のだが。

「……………居るじゃん……………」

思わずこくりと空気を呑む。ラウンジの最奥、窓際のテーブルに、ひときわ目立つ集団があった。二年と三年が混在して六名、よくよく目を凝らすと全ての顔に見覚えがある。全員が現生社会のメンバーだろう。男子も女子も方向性に差はあれ揃って碧目秀麗だ。

その中でも最大の存在感を放っているのが、物憂げにハードカバーの頁を捲る青リボンの女子生徒だった。麗近くまであるまっすぐな髪は、いまどき珍しいほどの盛黒。ダークグレーのブリーツスカートから覗く脚は、これも黒のストッキングに包まれている。そしてどうしたところか、ブレザーの下の開襟シャツまでが荒沢のある黒だ。間違いない——梅郷中学校一の有名な、（前巻巻末）

ラウンジ入り口から奥のテーブルまでは、直線二十メートルもないだろう。しかし、その距離はハルユキにはほとんど無限にも等しく感じられた。上級生のあいだを突っ切ってあそこまで行くなどという冒険は到底できそうもなかった。

回れ右をして帰ろう。そして学食の販売コーナーでパンとジュースを買い、屋上の荒谷たちに届ける。その後第二校舎のトイレにこもり、ローカルネットの一人用ゲームで空しく時間を

消す。

——くそ、畜生、行つてやる。

ハルユキは歯を食いしばると、観葉植物の陰から出て、ラウンジへと足を踏み入れた。周囲のテーブルから集まる上級生の視線には、これは被害妄想ではなく確かな苦痛と不快の色が含まれていた。入学当初ならいざ知らず、一学期の半ばともなれば全ての一年生が立ち入り禁止の慣習法を知っているはずだからだ。

しかし幸い、声に出して怒めようという者はいなかった。がくかく表える両眼で懸命に重い体を運び、テーブルの間を縫って、ハルユキはほとんど息も絶えだえになりながら、ついに生徒会役員たちが占拠する最奥部へと迫り着いた。

最初に顔を上げたのは、最も手前に座る二年生だった。ふわふわした髪を揺らして首をかしげた女子生徒は、僅かな訝しみの混じる笑顔をハルユキに向け、優しい声で言った。

「あら……何か御用？」

御用です、とも言えず、ハルユキは口ごもった。

「ええと……あの……えー……」

その時には、残る役員たちの四人までが皆ハルユキを見ていた。彼らの顔に悪意はなかったが、周囲のテーブルから向けられる不快の視線はもはや耐えがたく、緊張のあまり卒倒しそうになったとき、ようやく最後の一人が本から顔を上げた。



初めて間近から肉眼で見る黒雪姫の顔は、やはり昨日見た（はずの）アバターの数倍は美しかった、切りそろえた前髪の奥、くつきりした眉の下で、鮮彩までも黒く見える瞳が訝ええとした光を放っている。アバターを黒い濃微に喰えるなら、こちらは黒水仙か。そんなものがあるのかどうかは知らないが。

その美貌に、この見苦しい一年は何、という表情が浮かぶのをハルユキは覚悟した。

しかし心底驚いたことに、黒雪姫は色の薄い唇に見覚えのある微笑を浮かべると短く言った。  
「来たな、少年」

ばかりと言を立ててヘッドカバーを脱ぎ、襟立ちのままのハルユキに手翻さしながら、視線をちらりとテールブルの役員たちに走らせる。

「用は私だ、満まない、そこ空けてもらえよかな」

後半は、隣に座る三年の男子に向けたものだった。短髪長身の上級生は、面白がるような表情を浮かべて立ち上がると、掌で椅子をハルユキに示した。

もともと礼を口にして、ハルユキは丸い体を限界まで縮め腰を下ろした。華奢な椅子が盛大に軋んだが、黒雪姫はまるで気にするふうもなく、ブレザーの左ポケットを探ると束ねた細長いものを取り出した。

それは一本のケーブルだった。銀の細線でシールドされたコードの両端に、小さなプラグが付いている。左手で長い髪を後ろに持ち上げ、びっくりするほど細い首に装着されたニュー

ロリンカー（当然のようにピアノブラック染装だった）の端子に右手でブラダの片方を挿入すると、黒雪姫は何気ない仕草でもう一方のブラダをハルユキに差し出した。

今度こそ、事の成り行きを見守っていたラウンジビウの生徒たちから、大きなさわめきが巻き起こった。中には、嘘だろとか、いやあーそんなーとか悲鳴じみたものまで混じっている。度肝を抜かれたのは、ハルユキも同様だった。顔にぶわっと汗が汗き上がる。

《有線直結通信》。

略して直結と呼ばれる行為を、黒雪姫はハルユキに促したのだ。ニューロリンカーは通電、無線とその場のネットワイタサーバーを通してのみ相互通信を行い、そこには何産ものセキユリタイが介在する。しかし、有線で直結した場合は、防壁の九割までは無力化する。ある程度のリンカースキルを持つ者なら、相手のプライベートルメモリを覗き見たり、悪意あるプログラムを仕掛けることすら可能だ。

ゆえに通電、直結するのは最も信頼できる相手——家族、もしくは恋人に限られる。逆に言うと、公共の場で直結している男女は九十九％まで付き合っているということになる。ケーブルの長さがその親密度を表すという技術的根拠のない俗習まで存在するのだ。

いま黒雪姫が差し出しているXSBケーブルは約二メートルはあるが、しかしこの場合長さなど問題ではない。きらきら光る銀色の端子をまじまじと凝視しながら、ハルユキはどうにか声を絞り出し、尋ねた。

「……あ、あの、どうすれば……」

「キミの首に挿す以外に使い道はなかろう」

間髪入れずにそう断言されてしまう。ハルユキは卒倒しようになりながらも、震える指先でブラダを受け取り、手探りで自分のニューロリンカーに突き刺した。

途端、眼前に点滅する《ワイヤード・コネクション》の警告表示。それが薄れると同時に、ラウレンジの光景から、目の前の黒雪姫の姿だけが鮮やかに浮き上がった。

微かな笑みの浮かぶ唇はびくりとも動かないのに、ハルユキの脳裏に増らかな声が響いた。

「わざわざ足勞顧ってすまなかったな、有田春雪君。思考発声はできるかな？」

唇を動かさずリンカーのみを通して会話する技術のことだ。ハルユキは頷き、言葉を返した。

「はい。あの……これは、一体、どういうことなんですか？ 平の込んだ、その……悪戯とかなんですか？」

怒るかと思ったが、黒雪姫は小さく首をかしげると、ふむ、と呟いた。

「そうだな……ある意味ではそのとおりかもしれない。なぜなら私は、これからキミのニューロリンカーに、ひとつのアプリケーショントラフトを送信する。それを受け入れれば、いまのキミの現実とは全く異なる世界に接続され、思いもよらない形に再構成されるからだ」

「……げ、現実を……破壊……」

ハルユキは呆然と繰り返した。

もう、テーブルで成り行きを興味深そうに見つめる生徒会の面々も、固閑でざわめく生徒たちも、まるで境界に入らなかった。ただ黒雪姫の言葉が、何故も脳裏でリフレインした。

黒髪をまじう上級生は、そんなハルユキの様子に再び笑みをかたもづくり、右手を持ち上げると、しなやかな白い指先でさっと何かを消らせる仕草をした。

ぼーん、というビープ音。

「RECORDINGを実行しますか？ YES/NO」というホロ・ダイアログ。

見慣れたシステム表示のはずなのに、その意はまるで独自の意志を秘めてハルユキに決断を迫っているかのように思えた。

常識的には、よく知らない人間から直結回線経由で送り込まれた正体不明のアプリを実行するなど無思慮もいいところだ。今すぐテーブルを引き抜いて当然の場面だろう。しかし、ハルユキはなぜかそうできなかった。代わりに、椅子の上で縮こまる自分の体を見下ろした。

——現実。僕の、リアル。

鈍重な体。覆えない容顔。繰り返される苛めと、ネットへの逃避。そして何より、その状況を変えようもしない自分。このままでもいい、どうせ何も変わらないと諦めている僕自身。

ハルユキは視線を動かし、黒雪姫の顔色の瞬を見つめた。

そしてコンマ五秒後、右手を持ち上げ、YESのボタンに指先を突き刺した。僅かな驚きの色が白い靨に浮かぶのを見て、ほんの少しの満足感が胸にぼたりと落ちた。



「望む、とこです。この現実が……壊れるなら」

そう呟いたのと、ほとんど同時に。

境界いっぱい、巨大な焰が噴き上がった。

思わず体を強張らせたハルユキを取り巻くように荒れ狂った大焰の流れは、やがて体の前に結集し、ひとつのタイトルロゴを作り出した。デザインセンスは決して新しいものではない。前世紀の末に流行した、ある種の封戦型ゲームを思い起こさせる荒々しさ。

現れた文字は——「BRAIN BURST」。

これが、ハルユキと、ハルユキの認識する現実の全てを変革するひとつのプログラムとの出会いだった。

インストールは三十秒近くも続いた。ニューロリンカー用アプリとしてはかなり巨大だ。

熱い盛るタイトルロゴの下に表示されたインジケータ・バーがようやく一〇〇％に到達するのを、ハルユキは息を呑んで見つめた。現実を——破壊すると、黒雪姫は言ったのだ。それは具体的に何を示しているのか。

インジケータが消え、ロゴも熱い尽きるように消滅した。オレンジ色の残り火が、小さな英語フォントで「ウエルカム・トゥ・ジ・アタセラレーテッド・ワールド」という文字を作り、これもすぐに火花となって散った。どういう意味だ——加速、世界？

ハルユキはそのまま十秒近く呼吸を止め、何かが起こるのを待った。

しかし、自分の体にも、周囲の光景にも、変化の兆しすら訪れる気配はなかった。相変わらず制服の下では汗がたらだらだし、周りのテールブルから浴びせられる非難の視線は増強するいつばうだ。

細長く息を吐き出しながら、ハルユキは訝しきとともに黒雪姫を見た。

「あの……この、『フレイン・バースト』ってプログラムは、一体……」

思考発声でそう尋ねたが、黒衣の上級生は微笑を消さぬまま、ハルユキの疑問とは離れたことを囁いた。

「無事にインストールできたようだな。充分な適性があることは確信していたが」

「て、適性？ このプログラムのですか？」

「そうさ、『フレイン・バースト』は、高レベルの脳神経反応速度を持つ者でなければそもそもインストールできない。例えば、パーチャルゲームで暴走したスコアを出せるほどの、な。

キミが幻の姿を見たとき、プログラムは脳の応答をチェックしていたのだ。適性が足りなければ、そもそもタイトルロゴすら見ることは叶わん。しかし……それにしても少しだけ驚かされたぞ、かつての私は、この怪しげなプログラムを受け入れるかどうか二分近く迷ったというのに。キミを説得するために考えていた台詞が無駄になってしまった」

「は、はあ……すみません。でも、その、何も……起こらないみたいなんです。常軌じやな

く運動起動型のアプリですか？」

「まあ、そう簡単（かんたん）な、これからキミには、少々心の準備をしてもらわねばならん。具体的な機能の説明はそのあとでもよからう。なに、時間はたっぷりあるからな」

ハルユキはちろりと、視界の右下端（さげ）に継続表示されている時計を眺めた。すでに昼休みは半分が過ぎ去ろうとしている。たっぷり、と言うほど時間があるとは思えない。

周囲の、好奇と嫌悪（けんあく）が入り混じった空気を痛いほど感じながら、ハルユキは身を乗り出した。体の下で椅子（いす）がざしつと軋（ゆ）んだ。

聞きなれた音だが、自分の離（はな）れ、階梯（かいでい）さを椅子までもが笑っている気がして、ハルユキは唇（くちびる）を噛んだ。こんな現実の自分に妥協（たか）などあるうはずもない。変われるなら、それがたとえどんな変化であらうとも受け入れる。

「……心の準備ならもうできてます。教えてください、このプログラムは……」  
そこまで言いかけた時、

ハルユキが背を向けているラウンジの入り口から、最も聞きたくない声が響き渡った。

「てめえ、ブ……有田（ありだ）！ バックレてんじやねえぞ!!」

反射的にびくんと体を跳ませ、ハルユキは椅子から腰を浮かせた。振り向いた先に、顔を赤くして立っているのは、昼休みは屋上から出てこないはずの荒谷（あらかや）だった。

ハルユキが表情（へうしやう）を驚愕（きやうがく）から恐怖（こふ）へと変化させるのと同期して、荒谷の顔も激怒（げきど）から不審（ふしん）へ

と変わった。ハルユキが立ち上がったことによって、これまで巨体の陰に完全に隠れていた風雪姫の尊容を臺と、そのリンカーから伸びてハルユキに繋がるケーブルが露わになったのだ。

凍りつきながらも、ハルユキは生徒会の面々を除く周囲の生徒たちの雰囲気微妙に変化したのを敏感に察知した。同じ縁のネクタイをしている大柄な寛谷と、疑に小さく横に大きいハルユキの関係は、全員が瞬時に悟っただろう。しかし生徒たちが放ったのは、寛谷への非難ではなく、あーやっぱりね、という納得の氣配だった。

やめろ——今はやめてくれ。

ハルユキは懸命にそう念じた。風雪姫に、自分がイジメられているのだなという事を知れるのは絶対に厭だった。用事が終わったら、すぐにパンを買って屋上に行くからおとなしく待っていてくれ、そう伝えるつもりで、ハルユキは寛谷に向けて誇張した笑みを浮かべた。

それを見た寛谷の顔が、一層の憤激に赤黒く染まった。ブタあ、と唇が無言で動くのを、ハルユキはぞっとしながら見た。学校一の有名人と直結した扶輪でハルユキが浮かべた笑みの意味を、奴は完璧に誤解したのだ。

吊り上げた目をぎらぎらと光らせ、寛谷は無言で学食とラウンジを隔てる生け垣を潜った。かかとを潰した上履きをべたべた鳴らしながら、一直線に近づいてくる。その背後に手下AとBも、こちらはやや緊張した顔で続く。

もう駄目だ、と思いながらハルユキは一步あとずさった。

寛谷は、同じ十三歳とは思えぬ長身に、空手をやっているとかでがっちりした筋肉をまとっている。その上から丈の短いブレザーと、逆にやけに長い西袴のシャツを身につけ、ズボンもどろろりと太い。白っぽい金に染めた髪は剣山の山のように逆立ち、ごく細い眉と両耳のピアスに彩られたタリ目は剣呑の一言だ。

梅郷中学校は私立の連学校だが、少子化極まるこの時代、入学試験を設けている中学はほとんどない。ゆえに寛谷のような武闘派が、『案にシメよう』と急って入ってくることもある。

そんな手合いに、入学初日にあっさりシメられたハルユキは、すぐ目の前に立ち止まり伸び掛からんばかりに見下ろしてくる寛谷を細み上がりながら見つめた。

「ナメてんじやねーぞ」

捻じ曲げられた唇から発せられた台詞に、ハルユキが、卑屈な謝罪を口にしようとした寸前背後から、黒雪姫の、涼しげな肉声が抑揚ゆたかに響いた。

「キミはたしか、アラヤ君だったな」

それを聞いた寛谷が、一瞬の驚き顔を経て、縮むような笑みを浮かべた。こんな奴でも、《あの黒雪姫》に名前を覚えられていたというのは嬉しいらしい。

しかし、続いた言葉は、寛谷だけでなくハルユキをも愕然とさせるものだった。

「有田君に話は聞いているよ。間違つて動物園からこの中学に送られてきたんじゃないか、とな」

寛谷のアブがぐんぐんと落ち、それがわなわなと震えるのを、ハルユキは呆然と見つめた。

「な……な……なん……」

寛谷が口走るとまったく同じことを、ハルユキも叫びたかった。

な——何言ってるんだアンタ！

しかしその思考を音声にするひまもなく、寛谷が凄まじい怒号を放った。

「んだとナメエコラア殺つぞブタアアアア!!」

びくーん、と縮み上がったハルユキの眼前で、寛谷が右拳を固め、高く振りかぶった。

そして同時に——脳内で、鋭い声がハルユキに命じた。

「今だ、叫べ! (バースト・リンク)!!」

その短いコマンドを、ハルユキは、自分が実音声で喚いたのかそれとも思考音声で念じたのか判らなかつた。しかし、自分の体の隅々にまで、声が震動となつて染み渡るのをはつきりと感じた。

バースト・リンク!!

バシイイイイッ!! という衝撃音が、世界を揺るがした。

あらゆる色彩が一瞬で消滅し、遠きとおるブルーのみが広がった。周りのラウレンジも、成り

行きを凝視する生徒たちも、そして目の前の荒谷までもが、モノトーンの青に染まった。

そして、全てが、静止した。

一秒後に自分を殴り飛ばすはずの荒谷の拳が、数十センチ先に凍り付いているのをハルユキは唖然と見つめた。

「う……うわっ!!」

思わず叫び、一歩飛びすぎる。

そのアクションの結果、ハルユキはさらに信じがたいものを見た。

自分の背中だ。荒谷と同じように青一色に変じた自分の、丸っこい背中が、滑稽に縮み上がった姿勢のまま不自然に停止している。まるで肉体から魂だけが離脱してしまったかのようなのだ。今の自分はどうなっているんだ? と驚愕しつつ見下ろすと、そこにあったのは見慣れたピンクブタだった。間違いない、ローカルネットではハルユキが使用しているアバターだ。もう何がなにやら訳が判らず、ハルユキはふらふらと振り向いた。

服にしたのは、これまた奇様な光景だった。

ラウンジの椅子には、びたりと膝を揃え背筋を伸ばした黒雪姫が優雅に座っている。しかしその体も、首から伸びるケーブルも、全て水晶のような透過度のある青に染まっている。

そして隣に、黒のドレスに鍛んだ日傘、陽羽蝶の頭をまとったアバターが謎めいた笑みを浮かべて立っていた。

「な……何なんですかこれ!?」

ハルユキは堪らず喚きたてた。

「完全ダイブ!? それとも……幽体離脱ですか!?」

「ふん、そのどちらでもないよ」

愉快そうな口調で、黒雪姫のアバターが告げた。

「我々は今『フレイン・バースト』プログラムの機体下にある。〈加速〉しているのだ」

「か……かそく……?」

「そう。周囲が静止したように見えるが実は違う。我々の意識が超高速で動いているんだよ」

黒雪姫は、ドレスの裾を繰取る領の端をきりめかせながら数歩移動し、青く凍る現実のハルユキと荒谷の傍らで止まった。傘の先で、右ストリートパンチの軌道上にある荒谷の拳を指す。

「この拳も、視認はできないがいまもごくごくゆっくりと移動している……時計の短針のようにな。このままずっと待ってれば、やがてこの八十センチほどを通過し、こっちにいるキミの頬にしめじめメリ込むのが見られるだろう」

「じよ、冗談じゃないですよ。いやそうじゃなくて……ちよ、ちよっと待ってください」

ハルユキは、ブタの両手で頭を抱え、必死に情報を整理した。

「え、ええとですね……じやあ、別に僕や先輩の魂が自分の体から抜け出てしまったってわけじやあないんですね? あくまで思考は本来のアタマの中で行われてるってことですか?」



「呑み込みが早いな。その通りだ」

「でも、そんなの凄じやないですか！ 思考と感覚が加速しただけだっていうなら、こんな……幽体離脱みたいな移動したり、自分の背中を見たり、そもそも先輩と会話だってできるわけないですよ！」

「うむ、もっともな疑問だ、ハルユキ君」

教師のように頷くと、黒雪姫は縦にロールした黒髪を揺らしてテーブルの横まで移動した。

「我々が今視ているこの青い世界はリアルタイムの現実だが、しかし眼球で光学的に視認しているのではない。ちよつとこのテーブルの裏側を見てみたまえ」

「は、はあ……」

ハルユキは現実よりもさらに小さなブタボディを屈めて、青いテーブルの下を覗いた。

「あ、あれっ」

妙だ。テーブルは本製で、表面には細に細い板目が走っている。しかし裏面は、まるでプラスチックのようにのっぺりと一切のテクスチャがないのだ。

「なんだこれ……まるで、ポリゴン……？」

顔を上げたハルユキに、黒雪姫は軽く頷きかけた。

「その通りだ。この青い世界は、ラウレンジに複数存在するソーシャルカメラが捉えた画像から再構成されたる映像を、ニューロリンカー経由で脳が視ているものだ。カメラの死角にな

っている部分は推測補完されている。だから、その女子のスカートを覗こうとしても無駄だ」  
 ソーシャルカメラというのは、正式名称ソーシャル・セキュリティ・サーベイランス・カメラというもので、治安維持を目的に日本国内にびっしり設置してある、政府の映像監視網のことだ。たとえ私立の中学といえどもカメラ設置を拒むことはできず、そのデータは国家レベルの厳重な防壁に守られ、一般民がのぞき見することは絶対に不可能——と言われているのだが、そんな理屈を思い浮かべながらも、ハルユキは反射的にナイプルの下に伸びる生徒会役員の女子の脚を迫り、その優美なラインがスカートの縁で消滅しているのを確かめてしまった。

慌てて立ち上がったハルユキを、黒雪姫はじろりと一瞥した。

「私の脚は見るなよ。カメラの視界に入ってるからな」

「み……見ませんよ」

苦勞して視線を固定しながら、ハルユキは首を振った。

「え、まあ、今見てもものの理屈はなんとなく解りました。ここはリアルタイムの現実を3D映像化した世界で……僕らはアバターを代行体として、周りを見たり直結回線経由で喋ったりしてるってことですね？」

「そうだ、今は便宜的に君の学内ローカルネット用アバターが流用されているが」

「できるなら、他の方がいいですね」

呟き、ハルユキは大きく息を吐いた。ブタの頭を振って思考を整理し、もう一度黒雪姫のア

バッテリーを見る。

「でも……これでやっと半分ですよね、知りたいのはここからです。……《加速》って一体何なんです？　こんな時間停止みたいな機能がニューロリンカーにあるなんて、聞いたことないですよ！」

「当然だ、ニューロリンカーに秘められた加速機能を引き出せるのは、《フレイン・バースト》というプログラムを持っているか、持っていた者だけだ」

黒雪姫は咬くように言い、左手を上げると、凍結する現実のハルユキの首に巻きつくXしさいズのニューロリンカーをそっとつついた。

「ハルユキ君、キミはニューロリンカーの作動原理を知っているか？」

細い指が《自分》の首に触れるのを見て、わけもなくドキッとしながらもハルユキは頷いた。  
「は、はい……とおりの知識ですけど、脳細胞と電子レベルで無線接続して、映像や音や感触を通り込んだり、逆に現実の五感をキャンセルする……」

「そうだ、つまり二〇二〇年代のヘッドギア型VR機器、あるいは三〇年代のインプラント型とは原理が根本的に異なる。量子接続は、生理学的メカニズムではないのだ。ゆえに、脳細胞に負荷をかけることなく、とんでもないムチャができる……ことに気付いた者が居た」

「ムチャ……とは？」

ハルユキの疑問に、黒雪姫はやや見当はずれとも思える問いを返した。

「キミは二〇年頃のPCに触れたことがあるかな？」

「え、ええ、一応、自宅にもあります」

「ならば、PCの基準動作周波数を何と噂んでいたか知っているだろう」

「ベースクロック……ですか」

「羽衣姫は満足そうに頷いた。

「そう……マザーボード上の振動子が時計のように刻む拍子で、設定倍率にしたがって増幅しCPUを駆動していた。そしてまた人間の脳、我々の意識も同じ仕組みで動いているのだ」

「え……？」

ハルユキは目を丸くし、大きなブタ鼻からぶふーっと息を吐いた。

「ま、まさか、僕らのどこに振動子があるっていうんです」

「ここだ」

黒雪姫は即答し、現実の青いハルユキに正面から抱きつくと、いたずらっぽい上目遣いになりながら左手で背中の中心をつづいた。

「な……、な、何するんですか」

「今、キミのクロックが少し上がったぞ。もう分かったろう……心臓だ！ 心臓は、ただ血液を送り出すだけのポンプではない。その鼓動によって、思考の駆動速度を決定する基準クロック発生装置なのだ」

息を呑み、ハルユキはブタバダイの胸を押さえた。黒雪姫はまるでからかうように、尚も心臓のあたりに触れながら続けた。

「たとえば体が静止していようと、状況次第では心臓の鼓動はいくらでも速くなる……レーシンドラドライバーのようにな。何故か。それは、思考を——状況認識力、そして判断力を（加速）する必要があるからだ。あるいは、互いに触れ合う恋人たちのように。一分一秒を、より緻密に体験するために（加速）する」

黒雪姫は、現実のハルユキの胸にあてた指先を、ゆっくり上に動かして首で止めた。

「心臓が一度どくと軋（こ）打つと、発生した量子パルス信号は中枢神経をさかのぼり、脈を、つまり思考を駆動する。ならば——その信号を首のニューロリンカーで乗っ取り、増幅してやればどうなると思う」

どくつ、と背筋に戦慄（せんりつ）がはしるのを、ハルユキは感じた。

「思考が……加速する？」

「そう、ニューロリンカーならそれができる。肉体や脳細胞に一切の悪影響を与えないことなく、いまこの瞬間、我々のニューロリンカーは、心臓がたった一度の鼓動で発振したクロックを増幅し、無線量子信号に乗せて脳に送り込んでいるのだ。そのレートは、実に一千倍に達する——」

「いっせん……ば……い」

告げられた言葉を呆然と繰り返すことしか、もうハルユキにはできなかった。麻痺しかけた意識に、黒雪姫の泣き声がいっそうの衝撃を与えた。

「思考を一千倍に加速する。それはつまり、現実の一秒を、一千秒……割り算をすれば十六分四十秒として体感するということだ」

F1レーサーとこの話ではない。もはやタノロジーというよりも、(時間停止の魔術)に等しい。

しかし、その驚異的な現象がはたして具体的に何を可能にするのか、についてハルユキが思い返らす前に、黒雪姫が何かに気付いたように「おっと」と呟いた。

「……う」

「いや、すまん。説明に夢中になって、少し時間を使いすぎってしまったな。すっかり忘れていたが、現実のキミは今まさにぶっとばされつつあるんだった」

「げっ……」

ハルユキは慌てて足を動かし、青く凍る自分の向こう側へと回り込んだ。

確かに、会話を賈やした約五分(またはコンマ三秒ほど)のあいだに、荒谷のパンチはずいぶんと移動していた。リアルハルユキの丸いほっぺなまでは、もう五十センチ弱しかない。

荒谷の顔は、これが天井に隠されたソーシャルカメラの映像から生成されたものだとは信じられない再現性で、凶暴な興奮もあらわに顔を歪めている。

「一体何が楽しいんだ。——いや、そりや楽しいだろうな。學の向かう先に、處ろな表情で没頭と立つ僕は、まさにずコキヤラと呼ぶにふさわしい。」

陰鬱な思考を胸裏に過ぎらせながら、ハルユキは黒雪姫に向き直った。

「……あの、この《加速》って、いつまで続くんですか？」

「理論上は無限だ。だが、《フレイシ・バースト》プログラム上の制限によって、キミが加速していられるのは最大で体感三十分、現実においては一・八秒だ」

涼しげに返された黒雪姫の言葉に、ハルユキはピンタブタのくきくきした眼を斜き出した。

このまま現実の自分が二秒近くも凍りついていたら、荒谷のパンチは確実に残る距離を移動し、鼻筋にじわじわとめり込み——。

「……な、殴られちゃうじゃないですか！」

コマ送りでぶっ飛ばぶ自分の姿を想像し、ハルユキは叫んだ。が、黒雪姫は軽く笑い、説明を付け加えた。

「はは、心配するな。もちろん、加速状態を任意に停止することは可能だよ」

「あ、ああ……そうですか。それなら、現実に戻ってからのパンチを避けることも……」

「容易いな。ふふ、それが《加速》の最も解り易い使い方だ。生身では不可能な反射速度で状況を見極め、熟慮してから、加速を解除して悠々と対処できる」

言うとおりに、これまで散々殴られた際には避けることはおろか、恐怖のあまり見ることもすら

できなかった荒谷のパンチの軌道とその狙いが、（加速）中の今なら手にとるように判る。

加速を解除すると同時に、左にほんの十五センチほど動けばいいはずだ。こくきと唾を飲みながらもそう頭に刻み込み、ハルユキは解除のためのコマンドを尋ねようと黒雪姫を見た。

しかし、黒衣の麗人は、ハルユキよりも先に軽い口調でとんでもないことを言った。

「だが、避けるな。ここはあえてぶつとばされようじやないか、ハルユキ君」

「ふ……………」

ブタ鼻をしばしわななかせてから、ハルユキは叫んだ。

「い、厭ですよ！ 痛いじゃないですか」

「どっちがだ」

「え…………… ど、どっちって……………」

「痛いのは、体なのか心なのかと訊いている」

黒雪姫のアバターから、微笑が消えた。ハルユキの答えを待たず、思ひハイヒールがかつと前に踏み出された。

ハルユキのブタボダイよりも、五十センチ近く高い機身を屈め、黒雪姫はごく至近距離から目を覗き込んできた。ハルユキは息を吞んで棒立ちになった。

「キミが、この荒谷という生徒に殴られるのは初めてではあるまい」

「は…………はい」



イジメの件は絶対知られたくないと思っていたのに、なぜかハルユキは聞いていた。

「なのに、この生徒がこれまで処分されなかったのには、二つの理由があるはずだ。一つはもちろんだ、キミが泣き寝入りしてきたこと。そしてもう一つは、荒谷が暴力や暴言の現場を、巧妙にソーシヤルカメラの視界から外していたこと」

確かに、ハルユキが直接的なイジメ行為を受けたのは、常に屋上の排気施設の陰や校舎裏といった生徒の近寄らぬ場所だった。しかしあれば、人の目を避けていたのではなく、カメラを避けていたということか。

黒雪姫は難しい表情になり、すっと体を仰げた。

「……税金ながら、当校の二年や三年にも、こいつと同様の生徒が少ないながらも存在する。彼らにもそれなりのキットワークがあり、ソーシヤルカメラ視界警告アプリなどという違法なものも流通しているようだ。連中は、カメラの視界内では決して尻尾を出さない……新入りのこいつも、それは厳しく命じられているはずだ」

氷のような視線で、青く染まる荒谷の顔を一瞥した黒雪姫は、僅みのある静かな声で続けた。「だが、所詮はまだ子供だ。先ほどの私の発見で我を忘れ、こんなカメラが山ほどある場所、暴力行跡に出た、いいか、これはキミにとってチャンスなのだ、ハルユキ君。このパンチを返すのは容易だが、そうすれば荒谷は我にかえり、この場から消えてしまうだろう。こいつに受けるべき罰を受けさせる機会は、再び限りなく遠くなる」

——そして、荒谷は改めてハルユキを痛めつけるはずだ。その報復が、これまでの越び半分のものではなくなるであらうことは、たやすく想像できた。ぶるり、と背中を震わせながら、ハルユキは現実の自分と、その顔に近づきつつある荒谷の拳を見た。

骨ばったその右手は岩のようにこつこつと実り、殴られれば泣くほど痛い。この半年で、嫌というほど味わった痛みだ。しかし——。

本当に直を流していたのは肉体ではなく心だ。ずたずたに引きちぎられたプライドのほうだ。

「……あの」

ハルユキは躊躇いながら、黒雪姫に問いかけた。

「『フレイン・バースト』を上手く使えば、ケンカでこいつに勝てますか」

一切の表情を消した美咲が、まっすぐにハルユキを凝視した。

「——勝てるだろうよ。キミはもう、非加減者たちを遥か超える力を持つ（バーストランカー）だ。一発も殴られることなく、好き放題叩きのめせるさ。キミがそう望むなら」

望むとも、望まないわけがあるか。

荒谷の怪手技を華麗に避けまくり、人相をブタより醜く変えてやる。鼻を潰し、前歯を全部叩き折り、土下座して泣き喚くその顔から自慢の金髪を一本残らず引き抜いてやる。

ざり、と奥歯を食いしばり、大きく息を吐いて、ハルユキは震える声で黒雪姫に告げた。

「……いえ、やめときます。大人しく殴られますよ……せつかくのチャンスですから」

「……………ふ」

黒雪姫は、どこか満足そうに笑うと、ゆっくりと頷いた。

「賢明な選択だ。ま、どうせなら被害を最小に、効果を最大にしようじゃないか。(加速)が切れたら、自分から右後方に思い切り跳ぶのだ。顔を右に回して拳を受け流すのを忘れるな」

「は……………はあ」

ハルユキは、現実の自分のすぐ後ろに移動すると、荒谷のパンチの軌道を確認した。確かに、顔の向きを変えながら跳べば、いかなる手技といえど威力の大半は散せそうだ。

傾いてから視線を動かし、跳ぶ先の状況も確かめる。左にはナールブルがあるが、右後方には大きくスペースが空き、中座を望む大忍まで障害物はない。たった一人の人間を除いては、

「あ、いや……………だめですよ。ここからそっちに跳んだら、先輩の体に衝突しちゃいます」

立ち上がっているハルユキと、椅子に座るリアル黒雪姫との距離はたった一メートルだ。ハルユキの巨体に覆われたら、華奢な体がどうなってしまうか知れたものではない。

しかし、黒ドレスのアバターは暫く肩をすくめただけだった。

「かまわん、そのほうが効果的だろう。心配するな、ちゃんと避けるから怪我はしないよ」

「……………は、はい……………」

確かに、事前に解っていたいればそれも可能かもしれない。やむなく頷く。

「そろそろ本格的に時間がないぞ。さ、早く現実の自分に重なれ」

ばん、と音中を押され、ハルユキは一步前に出ると、青い自分にブタのアバターを重ね合わせた。背後では壁面も椅子に座ったように、声の位置が低くなった。

「よし、それでは加速解除のコマンドを教える。上手くやれよ——（バースト・アウト）！」

バースト・アウト

ハルユキは一瞬に息を吸い、思い切り叫んだ。

きいいいん、というジェット機のような音が、遠くから近づいてきて周囲の静寂を破る。青い世界が、徐々に本来の色を取り戻していく。

視界の左側で、停止していた瓦各の拳が少しずつ動き出す。カタツムリのようにのろのろした動きから、じわじわと増速し、ハルユキの頬に迫る。

ハルユキは、言われたとおり周囲で右後ろ方向へと飛ばうとしながら、懸命に首を右に回した。ぐうううと接近してきたパンチが、皮膚に触れ、わずかにめり込み――。

そして、世界が戻った。

わっ、と周囲の騒音が押し寄せてくる中、ハルユキは左頬をがつぶよんと拳が挟むのを感じた。頬の内側に歯が食い込み、骨が引き裂れる感覚。多少は血が出そうだが、しかしこれまで何度も食らった空手パンチに比べれば確かに半分くらいは痛みだ。

だが、同時にハルユキの巨体は映画のように緩手に宙に飛んでいた。

うまく避けてくれ！ と念じながら、背中から後ろの椅子に激突する。何やらいい匂いと、柔らかな髪感触が訪れたのもつかの間。

ガターンと椅子が倒れる音、そして直後に、がつん！ という不吉な音がした。

背中から床に落ちたハルユキは一瞬息が詰まり、空気を求めて喘ぎながらも、必死に首を廻らして、衝突を回避したはずの黒雪姫の様子を確認した。

見開いた両眼が捉えたのは、頭をラウンジの探光ガラスに突かれ、壊れた人形のように手足を投げ出して臉を閉じる華奢な姿だった。

乱れた前髪の下、遠き通るほど白い顔に、つう、と一筋の血が流れた。

「あ……………あっ」

爆鳴を呑み込みながら、ハルユキは立ち上がろうとした。だが、その寸前――。

「動くな!!」

直結されたままのラシカーを避けて、黒雪姫の思考音声がハルユキの意識を打った。反射的に、仰向けに倒れた格好のまま体を凍りつかせてハルユキは言葉を返した。

「で、でも……血が!!」

「心配ない、少し切っただけだ、言っただろう、最大の効果を狙うと。これでもう、死谷はキミの前には現れない。二度とな」

言われるまま、ハルユキは視線だけを左から右へと動かした。

右拳をまっすぐ振りぬいたままの寛谷が、ぼかんとした表情でハルユキたちを見下ろしていた。その顔から、徐々に血の気が引いていき、薄い唇が二度、三度と痙攣するように震えた。

しん、とした静寂に包まれたラウンジに――。

「……きやああああ!!」

周りのチーブルの女子生徒たちの凄まじい悲鳴が響き渡った。

寛谷と手下A Bは、生徒会役員の男子によって取り押さえられる間もまるで抵抗しなかった。真っ青な顔でがくがく脚を震わせる三人を、血相変えて駆けつけてきた教師たちが引き摺りながら連行していき、黒雪姫もまた生徒会の女子に抱えられるようにして病院に直行した。

ハルユキ自身は保健室で軽い手当てを受けただけが、校医の手で消毒されパッチを貼られるあいだも、直結チーブルが抜かれる直前に黒雪姫が発した言葉が、残響となって耳奥に漂っていた。

「――おっと、言い忘れた。明日登校するまで、絶対にニューロリンカーを外すな。しかし、ドローパー接続は一秒たりともしてはいけない。いいか、絶対だ、約束だぞ」

指示の真意を推測することなどまったくできなかった。保健室で午後の二時間を過ごすあいだもずっと、奇妙な距離感が全身を包んでいた。昨日と今日のなった二日間て自分に起きた

多くの出来事を、どう整理して吞み込んでいいのかわからない。

しかし少なくとも、もう下駄箱から靴がなくなっていたり、あるいは靴に異物が入っていたりということを心配する必要はなさそうだった。機械的に上履きをスニーカーに履き替え、校舎から出たところで、ハルユキは言われたとおりニューロシンカーをネットから切斷した。

これにどんな意味があるのだろうか、と再び考えながら校門を目指して歩き出したとき。

「ハル」

小さな声が耳に届き、ハルユキはびたっと脚を止めた。

周りを見回すと、夕焼けに染まった校舎の壁に影を落として立つ小さな姿に気付いた。思わず顔が強張るのを意識しながら、ハルユキは相手の名前を呼んだ。

「……チユ」

忘れていたわけではないが、無理やり意識から追い出していた昨日の出来事が脳裏に一端で再生される。うわ、どうしよう、いやまず謝るんだそれしかない、とバニタるうちに、難しい顔をした倉嶋千百合がざしざしと校庭の合成軟質舗装を踏みながら近づいてきた。

「あ……あの……きのうは、その」

「ハル、昼休みのこと聞いたよ」

ハルユキのしどろもどろな言葉をばっさり切って、チユリが言った。

「え？ 昼……あ、ああ」

「あいつらに隠られて、ものすごい吹っ飛んだって……それ、その怪状？ 大丈夫？」

太い眉をぎゅっとしかめてチユリが顔を近づけたので、ハルユキは思わず左手で口元のバツチを覆った。まさか、勝手に飛んだのは自分でしたことだ、とも言えない。

「う……うん、大丈夫。ちよっと切っただけだって。ほかに怪我もないし」

「……そう、良かった」

まだやけに強張った顔に、かすかに笑みを浮かべてから、チユリはちらりと調りを見た。昼休みの一件で、ハルユキはたちまち校内の話題のタネになってしまったらしく、下校する生徒たちは皆じろじろと遠慮ない視線を浴びせていく。

「じゃあ、たまには一緒に来ろ」

硬い声でチユリはそう言い、答えを待たずに歩きはじめた。

たまには、って中学に入ってから一度もそんなことしてないじゃん、とハルユキは思ったが、ここで嫌だと叫んで走り去った昨日の最行の繰り返しだ。そう、とうとうあれ少なくとも昨日の一件については謝らなくてはならない。

背丈に似合わない大きな歩幅ですすた歩くチユリに小走りて追いつくと、ハルユキは微妙な距離を取って横に並んだ。そのまま校門をくぐり、乗用車のインホイールモーターの音だけが静かに響く大通りの歩道を進む。

いつもなら、学校を出た遠く、自動的に周囲を移動する人・自転車・自動車が見界にカラー



シンボルで表示されるので眼を瞑つても歩けるのだが、グローバルネット切斷中の今はナビは使えない。いったい何故無音状態はあんな指示をしたのか、とまたも考えたその瞬間、右横のチユリがまさにその名前を口に出したのでハルユキはあやうく飛び上がりかけた。

「二年の黒雪姫さんと、直結してたって、ホント？」

「えっ？ な、なん——」

なんて知ってるのか、と言いかけて、そりやそうだと思ひ直す。覚悟のパンチよりも、その一件のほうが、生徒たちに与えたインパクトは大きいのだらう。

「……うん、まあ……」

頷いたハルユキを見ようとせず、チユリは小さく輪を突き出すとさらに歩調を速めた。その様子が、最大級の不機嫌を示していることを長い付き合いのハルユキはよく知っていて、なんでだともう一度思ったが、今度もまたすぐにそりやそうだと白答した。手作りの弁当を廊下に叩き落とした尾藤者が、謝りもせずには他の女子と妙な行為に及んでいればチユリでなくとも怒って当然だ。

「で、でも、別に変な意味じゃないって、その、ちよつとアブミをコピーしてもらっただけで」十月なのに、背中に嫌な汗をどーっとかきながらハルユキは弁解した。しかしチユリの表情は和らぐず、やはりこれはまず何よりサンドイッチの件を譲らなければ——と決意したハルユキは、懸命に脳内で台詞を組み立てた。

「そ、それより、その……昨日の……」

ようやくそこで口にした時、よく通る声が前方から響いてハルユキは統きを吞み込んだ。

「おーい、ハル、チーちゃん！ 偶然だな、今帰る？」

びた、とチユリが脚を止め、ハルユキも顔を上げた。環境七号線にかかるエスカレーターのためとに、にこやかな笑顔で手を上げる同年代の少年が見えた。

制服は、梅郷中のもとは異なるブルーグレーの詰襟。右手には古式ゆかしい黒革の学生カバンを提げ、肩に剣道用の竹刀ケースを掛けている。少し長めの髪は清潔感のある真ん中分けで、その下の顔がまた、爽やかという形容がこれ以上似合う寂もいるまいというスツキリした美男子だ。

「あ……、タツくん」

チユリが、ぼちぼちと何度か瞬きしてから、にっこり笑った。

さつきまであんなに不機嫌だったくせに、と思つてから、この短い時間で二度目の「そりやそうだ」を、ハルユキは内心で呟いた。——ムカつくサンドイッチ落としと男と歩いているときに、偶然彼氏に会えたんだから。

ハルユキとチユリの幼馴染である篠田武は、竹刀ケースを揺らして小走りに近づいてくると、ハルユキに明朗快活な笑顔を向けた。

「おっす、ハル！ 久しぶり」

「アス、タタ。久しぶり……だっけ？」

自分より十センチ高いところにあるタタムの顔を見上げながら、ハルユキは言った。

「そうだよ、リアルじやもう二週間会ってないぞ。お前、マンションの行事出てこないから」

「出るかも、運動会なんて」

顔をしかめてそう言い返すと、タタムは相変わらずだなあと笑う。

三人は、北高円寺に建つ複合高層マンションで同じ年に生まれた。しかし、それだけの理由では、ハルユキにない全てを持っているこの少年とはとても仲良くなれなかったろう。

皮肉にも、タタムはあまりにも勉強が得意すぎて新北区にある小中高一貫の名門校に入ったため、逆にハルユキは被と屈託なく付き合えるようになった。タタムに、地元の公立小学校でたちまちイジメの標的となった自分の惨めな姿を見られずに済んだからだ。

同じ小学校に進んだチユリには、イジメの件は絶対にタタムには言うなと口止め（あるいは懸念）した。もし知れば、タタムはハルユキを救おうと、悪戯鬼産中を呼び出して竹刀でしばき倒すくらいのことではしただろう。

しかしそれでイジメがなくなっても、やはりハルユキはもうタタムとは友達でいられなくなる気がしたのだ。

「そう言えば……」

三人並んで歩きながら、ハルユキは自分から口を開いた。学校ではほとんどしないことだ。



「こないだの都大会の動画、ネットで見たぞ。すごいなタタ、一年でもう優勝だよ」

「まぐれ、まぐれだよ」

頭をかきながら、タタムはくすぐったそうに笑う。

「苦手をやつが準決勝で消えてくれたからさ。それに、チーちゃんも応援にきてくれたしね」

「えーっ、あ、あたし？」

タタムの向こう側で、チユリが目を丸くして叫んだ。

「あたしなんて、別にそんな、すみっこで見てただけだし……」

「ははは、何言ってるんだよ。ぶっとばせし、とかすごい声出してたじゃないか」

愉快そうにタタムが笑い声を上げる。

「その上、負けたらお弁当あげないなんて言うしさ。あれ、本気の日だったよねチーちゃん」

「あーもう、聞こえない！ きこえない！」

両耳をふさいで歩調を速めるチユリを見ながら、ハルユキは右ひしてタタムの体をつついた。

「なんだよ、あの決勝戦の気合入りっぷりはそういう訳だったのかよ」

「いや、まあね、ははは」

タタムと一緒に笑いながら――

やっぱり、これでよかったんだ、とハルユキは思った。

二年前の選択は間違っていないかった。今こうして、昔と変わらず三人で話せているんだから、

この関係は壊したくない。

その時、反撃するような軽い調子で、タタムが言った。

「ハルだってきのう、チーちゃん手作りのお弁当食べたんだろ？」

「えっ、いや、その、あれはその」

突然強張ったチユリの背中を見て、ハルユキは軽く恐慌した。しまったまだ謝ってなかった、どうする今謝るべきか、それとも帰ってからメールで――。

いや、待て。

なんてタタムが知っているんだ。

ハルユキの脚がもつれ、転びそうになるのを「おっと」とタタムが支えた。しかしそれを意識することもしず、脳内では熱気を帯びた思考だけが駆け巡った。

あのサンドイッチは、ハルユキが寛谷たちに昼食代を巻き上げられていることを知ってチユリが作ってきたものだ。決して料理は得意でないはずなのになぜ、と思ったのだが、まさかタタムのアドバイスだったのだろうか。

とすれば、つまりチユリはタタムに相談したのだ。ハルユキがイジメにあっていることを、そうでなければ、今の台詞が出てくるはずがない。

かあっ、と頭の中が白熱し、ハルユキは無意識のうちに右肩を掴むタタムの手を振り払っていた。

「お、おい、ハル——」

訝しげにタタムが言ったが、その顔を見上げることがハルユキにはできなかった。視線を彷徨わせると、凍りついたような表情のチユリと目が合った。唇が動き、何かを言いかけたようだったが、それより早くハルユキは叫んでいた。

「あつ……悪い、ちよつと見たい番組あったんだ！ 先に帰るよ、タタ、またな！」

そのまま走り出す。胸がやけに絡り何度か転びそうになったが、ハルユキは懸命に駆けた。二人はまた相談するだろうか。どうすればハルユキを救ってあげられるかと。

その会話の内容を想像するだけで、内臓がねじ切れそうな感覚に襲われる。せっかく奇跡的な出来事で荒谷が消えたというのに、もうとつくにタタムに知られていたとは、皮肉にしても出来すぎだ。

自宅マンションのエントランスを通過し、エレベータに飛び込むまで、ハルユキは一度も足を止めることなく走りつづけた。

その夜、ハルユキが見た夢は、間違いない記憶にある限り最悪と言うべきものだった。

小学校の頃の悪戯冤罪中や、荒谷と手下A・B、それに名も知らぬアウトローな学生たちが、入れ替わり立ち替わり現れてはハルユキを痛めつけた。

少し離れたところから、チユリとタタムが手を繋いで眺めていた。全身の痛みより、二人の

顔に浮かぶ憐れみの表情のほうがハルユキには耐えがたかった。

夢が遂行するにつれ、見物人は増えていった。二人の隣に母親が現れ、ずいぶん昔に家を出ていった父親も登場し、マンシヨンの住民たちやクラスメートまでも、ぐるりと人垣をつくって地に這うハルユキを見下ろした。

もう、彼らの顔にあるのは憐れみではなく嘲笑だった。醜く惨めなハルユキを、無数の人間たちが指をさしてあざ笑った。

嫌だ。もうここは嫌だ。

そう思つて、はるか暗い空を見上げると、そこに何者かの影があった。夜より黒い翼を広げ、軽やかに飛翔する一羽の鳥。

僕もそこに行きたい。もっと高く。遠く。

飛びたい。

彼方まで。

「――それが、君の望みか？」



## 3

はっ、とハルユキは目を開けた。

窓から差し込む白い光に、時計を見ると午前六時半を指している。なんと十二時間ちかくも寝ていた計算だ。

全身は寝汗でびっしょりて、悪夢の残滓がぬるぬると皮膚にまとわりついているようだった。そのくせ、夢の内容はいっこうに思い出せなかった。

昨日、黒雲影が最後に発した言葉がおぼろげに蘇る。

夜通しニューロリンカーを外すな、という指示は、まさか夢と何か関係があるのだろうか。

はんやり考えながらシャワーを浴び、制服に着替えたハルユキは、キッチンでシリアルとオレンドジュースの朝食をひとり食べた。食器を洗浄機にしまい、登校前の一儀式をすませるために母親の浴室をノックする。

「……いつてきます」

薄暗い室内に声をかけると、ベッドからかすれた声が不明瞭に聞こえた。昨夜すいぶんと飲んできたらしい。

母親が、手元の端末を操作してハルユキのニューロリンカーに五百円をチャージしてくれる

のを待っていると、不意に声<sup>こゑ</sup>が苛<sup>いら</sup>むちの色を帯びた。

「ハルユキ、マシンカーが切れてる」

あつ、しまった、と慌てて首元に手をやる。何か忘れているような気がしながらも、ニューロリンカーをタローバル接続すると、すぐにちやりーんという効果音とともに電子マナー残高が加算された。

「いってきます」

ふたたび声をかけたが、もう返事はなかった。そつと寢室のドアを閉め、玄関でスニーカーを履くと、ハルユキは自宅を出た。

エレベーターで一階に降り、ろくに顔を覚えていない住民たちにもごもご挨拶しながらエントランスを通過する。

自動ドアをくぐり、マシンシロンの前座へ足を踏み入れた、ほんの三秒後、

バシイイイッ! という、あの音がハルユキの脳内いっばいに響いた。

世界が暗転した。朝日に輝<sup>きら</sup>いていた町並みが、一瞬で夜間<sup>よかん</sup>に虎<sup>とら</sup>んだ。

何だ!? (加減)!? しかし――なぜ、勝手に!?

息を吞んだハルユキの眼前に、見覚えのある奥えるフロントで、アルファベットが並んだ、

「HERE COMES A NEW CHALLENGE」

どこかで見たような文言だった。が、記憶をたどる間もなく英文字は燃え尽き、視界の上部

に、さらに不思議なものが現れた。

まず中央に、『1800』の数字、そして左右に、青いバーがぐいーっと伸びる、その下に、少し細い緑色のバーが続く。

最後に、視界中央に赤の文字で――『FIGHT!』  
数字が、1799へ変化した。

どうしていいのが解らず、ハルユキはしばらく四指の数字がカウントを刻んでいく様子をただ見つめた。

千八百秒、三十分。どこかで聞いた数字だ、そう――黒書姫が言っていた、《加速》のタイムリミットが確かその長さではなかったか。

だが今回、ハルユキは加速開始コマンドである《バースト・リシタ》のバの字も口にしていない。世界の色だって、青一色ではなくフルカラーだ。だいたいチャレンジヤーだのファイトだの、意味がわからない。

状況を少しでも把握しようと、必死に周囲を見回すと、すぐにあることに気付いた。

十月のさわやかな朝日はあとかたもなく消えてしまったが、まわりの地形は記憶に染みついた自宅前のままなのだ。片側二車線の道路、その向かいに並ぶコンビニやオフィスビル、振り返れば出てきたばかりの高層マンションが闇を衝いてそびえている。

しかし、新宿方面への車線をびっしり埋めていたはずのタルマの群れや、歩道に溢れる通勤通学者は軒並み消えてしまっている。それどころか、道路はそこかしこでひび割れ陥没し、ガードレールや標識はひん曲がり、建物のガラスは激手に割れている。

少し離れた交差点には、まるでバリエードのように瓦礫が積み上がり、巨大なドラム缶から何かが燃える炎がちらちら上がっていた。破壊の跡はハルユキの自宅マンションにも色濃く、コンタリートの柱が崩れ落ちたり、外壁に大穴が開いていたりといひとい有様だ。

いまずぐ自宅に取って返し、部屋の機子確かめたい、という衝動に駆られ、ハルユキはふらりと数歩移動すると、瓦礫の間からエントランスの中を覗き込んだ。

そして、唖然と眼を見開いた。建物の内部は、まるでゲーム内のポリゴン建造物に頭を突っ込んでしまった時のような、灰色ののっぺりした平面だけが箱状に広がっていたのだ。いや――まるで、ではない。そのものだ。

ここは現実であり現実ではない。ハルユキはいま（加速）機銃下でバーチャルネットに完全ダイブしており、周囲の光景は、ソーシヤルカメラの映像から再構成された3D映像なのだ。昨日ラウンジで見た、青く凍った世界と同じように。

とは言え、これはど精細な仮想空間をハルユキは見たことがなかった。画素のピッチなど到底見分けられない。足元に転がる小石一つすら、圧倒的なディテールで造り込まれている。となれば、自分の体はどうなっているのか、とハルユキは視線を落とした。

見慣れた桃色ブタのアバターがそこにあることを予想していたのだが――。

「……なんだこれ」

唖然として、思わず声を漏らす。

視界に入っただのは、胴も、胴も、胴も、針金のように細く、削かれたように銀色の体だった。まるでロボット――しかし、ゲームやアニメのような戦闘的イメージはかけらもない。

握って顔に手をやってみると、鼻や口の感触はなく、ヘルメットのようになめらかな曲線だけが硬い指先に滑った。咄囁きに周囲を見回し、マンション前の道路を隔てた雑居ビルの壁面にひび割れた窓を見つけると、カシャンカシャンと足音を鳴らしながら走り寄る。

大きなガラスに映った姿は、まさしく全身これ金属のロボットだった。体はとことん細く、小さく、流線型の頭ばかりが不恰好に大きい。一言でいえば――とても、ザコっぽい。

せめて顔にツノがあるとか……両眼が金色にビコーンと光ったりしろよ。

と、誰とも知れのアバターデザイナーにハルユキが思わず文句をつけた。その時。

ガラスに映る自分の背後、道路を渡った向こう側に、うごめく複数の人影が見えた。

びくっ、と金属ボディを凍ませながら振り返る。いつの間にか現れたのが、破壊されたコンビニの軒下に立ちこちらを見ている姿が二つばかりあった。間にまぎれてシルエットしか判らないが、みなハルユキより随分と大きい。

人影は顔を寄せ合い、何か話している様子だった。ハルユキは思わず耳をそばだてた。

「……んだが、妙にビクついた奴だなあ」

「名前も記憶にないよねー、初心者かな？」

「けどメタルカラーだぜ、ちよつとはヤルンじやねよう？」

あいづら——NPCじゃない。

ハルユキは直感した。あの物置、口調、間違ひなくプログラムではなく生身の人間だ。

だが、ここは《加速》されたバーチャルエタツトなのだ。つまり彼らも、ハルユキや黒雪姫と

同じくブレイン・バーストをインストールした者たちだ、ということになる。

ならば、この状況がいったい何なのか知っているだろうか。とりあえずあの三人に事情を訊いてみよう。ハルユキはそう想着、おずおずと道路に踏み出し中央の白線まで進んだ。

不意に、新しい視線と気配を感じた。足を止め、きつと視線を走らせる。

いる。三人どころではない。どこから現れたのか、廃ビルの上、互いのてっぺん、全方位から奇怪なシルエタツトたちがハルユキを見ている。しかしそれ以上近寄るでもなく、ただ——そう、何かを待っている異変気。

ハルユキは途方にくれ、道路の真ん中で視線だけを動かした。視界上側のカウンントはいつの間にか1620まで減少している。数字の左右に伸びる二本ずつのバーには変化なく——。

いや、今までは気付かなかったが、左右のバーの下に小さなアルファベツトが並んでいる。

左側の文字は《シルバー・タロウ》と読める。そして右側のは、《アッシュ・ローラー》。

この画面構成、見覚えがある、すごく、

ハルユキは強烈な既視感覚とともにそう思った。

新しいものじゃない——ハルユキが生まれるより三十年以上も昔、一九〇〇年代の末に日本のアミューズメントセンターを席巻した、ある種のゲームプログラム、つい最近も、何かを見てこんな感想を持った気がする。あれは……。

立ち尽くし、記憶をひっくり返していたハルユキは、突然背後で響いた爆音に飛び上がった。

「……!?」

振り向こうとしてバランスを崩し、がしやんと尻餅をついたハルユキの眼前に、一際巨大なシルエットが屹立していた。

パイタだ。それも、見慣れたモータードライブ型ではない……ずいぶん前に法律で禁止された内燃機関をハラワタのように燃え込み、そこからドツドツドツと重い震動を響かせている。

フロントフォークがやけつばちのように長く、それに挟まれたタイヤも冗談みたいに太い。

灰色のこいつトレッドから、かすかに焦げ臭い匂いが漂ってくる。

ハルユキは視線を上向けて、大げさに湾曲したハンドルの向こう、革のシートにまたがるライダーの姿をおろおろと凝えた。

全身を鎧を打った黒レザースーツに包み、両足のブーツを踵ん張って両腕を胸で組んでいる。頭も黒のヘルメットに包まれているが、シールドは顎骨を模したど派手な代物だ。

その奥から、軋るような声が漏れるのを、ハルユキは呆然と聴いた。

「ひきびきの《世紀末》ステイジだぜ、ラアアアア、キイイイイ」

組んだ腕の片方から、人差し指をつきたてて左右に振る。

「オマケに相手がビカビカのニュービー、メガラアアアアッキ——」

懸臂ライダーは、右のブーツを持ち上げるとハンドルに載せ、器用にひとこすりした。途端、とばばるゝおおおん！ という轟音が鳴り響き、ハルユキを再び飛び上がらせた。

どう見ても、友好的な相手ではなさそうだった。というよりも、先ほどの連想が正しければ、ここは《対戦ステージ》であり——そしてこのライダーは——。

「う……うわ……」

ハルユキはじりじりと後ずさりし、振り向き、

「うわ——」

ロボットの細い脚をがしよがしよと鳴らして、懸命に走り出した。

「とやハハハハア!! 逃げろにげろお!!」

背後でもう一度エンジンが咆哮し、耳をつんざくようなタイヤの空転音が続き——ほんの一秒後、背中にもものすごい衝撃と鈍痛を感じて、ハルユキは闇夜のなかばーんと高く舞い上がった。

同時に、視界左上、《シルバー・クロウ》のはうの青いバーがぐぐいっと縮んだ。



それを見て、くるくる宙を回転しながらもハルユキは、あーやつぱりね、と思つた。

つまりこれは《対戦ゲーム》であり、僕は右も左も判らない初心者、そして相手は勝手知つたるベタランプレイヤー。

勝てるわけねー。

「ははは、きつそく狩られたか。私との約束を守らんからだと、少年」  
 昼休み。

昨日と同じように、ラウンジでハルユキと直結した黒雪姫は、前髪の下に治療促進パッチの破く頭を隠らしながら思案だけで器用に笑つた。怪我のほうは、出血こそ減手だったが單なる裂傷に留まつたらしい。ありつたけの言葉を連ねて用意してきたお礼と謝罪の言葉は、右手の一振りで留められてしまった。

「わ……笑い事じやないです。死ぬかと思いましたが……そりや、うっかりニューロリンカーをダローバル捕虜した僕が悪いんですけど……」

ぶちぶち言うハルユキを愉快そうに眺め、テーブルから持ち上げたティーカーップに唇をつける、その隣には手付かずの海老ドラタンが置かれ、ハルユキの前の大盛りボータカレー同様熱の湯気を立てている。

同じテーブルに座る生徒会役員たちはもう盛んに箸やスプーンを動かしていて、ハルユキの

岡がかすかに情けない音を立てたが、黒雲姫の講義あるいはお説教はしばらく終わりそうもなかった。

「——だがまあ、これで、私が言葉で説明する手図が省かれたわけだ。授業料は少々高かったが、もうキミにも解っただろう」

「何が……ですか」

「フレイン・バースト」プログラムの正体さ。大掛かりな陰謀なんてではなく、ただの——」

ハルユキはかつくんと頷き、黒雲姫の途切れた声に続くべき単語を思考に上せた。

「ただの、対戦格闘ゲーム。それも現実を舞台にした連戦戦。とんでもないっすよ……」

「ふふ、確かにとんでもなく人騒がせな話ではあるな」

「思考の《加速》なんていう物凄いテクノロジーを使って、一体何をするのかと思ったら対格ゲーっすか！　もう二十年も前にすたれきったジャンルじゃないですか！」

すると、黒雲姫は少し考えるように小首をかしげ、どこか皮肉そうな笑みを添ませた。

「うーん、その言い方はちよつと違うかな。ハルユキ君、我々バーストリンカーは格闘ゲームで遊ぶために《加速》しているのではない。その逆、《加速》し続けるために戦っているのだ。そうせざるを得ないのだよ、それがこのプログラムの嫌らしいところさ」

「それは……どういう意味ですか？」

「ん……この先は、実際に説明したほうがいいかな。ちよつと《加速》してみなまよ」

「は、はあ……」

ハルユキは大盛りカレーへの視線を断ち切り、言われるままに椅子の上で姿勢を正すと、加速コマンドを口のなかで叫んだ。

バースト・リンク！

ばしっ、というあの音が体と意識を叩き、周囲の生徒たちがびたっとその動きを止めた。同時にあらゆる色彩が失われ、透明感のある青に置き換わる。

目の前の黒首姫も同じように停止したが、すぐに清潔な制服姿から、幽体離脱するように妖艶な黒ドレスのアバターが立ち上がった。ハルユキもリンクブタの体で椅子から降りると、あとに残る現象の自分の丸っこい姿が目に入らぬよう前に出た。

「で……どうするんです？」

「視界の左側に、新しいアイコンが増えていないか？」

言われるまま視線を動かすと、確かにいくつか並んだアプリ起動アイコンの中に、黒え上がある。Bのマークが新規登録されていることに気付いた。左手を持ち上げそれをタタタとする。

「それが、対戦相関ゲームソフト〈ブレイン・バースト〉のメニュー画面だ。自分のステータスや戦績の閲覧、さらに周囲のバーストリンカーを検索して対戦を挑むことができる。マッチャメイキングのボタンを押してみろ」

頷き、ハルユキはメニュー最下のボタンをタタタした。周座に新たなウィンドウが開き、

一瞬のサーチング表示に続いてネームリストが現れる。

と言っても、そこにある名前は大抵二つだ。今朝も見た、ハルユキ自身を指すのであろう（シルバー・クロウ）と——そしてもうひとつ。フラッタ・ロータス。

これが黒雪姫の、バーストリンカーとしての名であることをハルユキはまったく疑わなかったが、確認のつもりでちらりと顔を上げた。予想通り黒揚羽蝶のアバターは軽く頷いて言った。「今、我々はグローバルネットからは切断され、学内ローカルネットにのみ接続しているゆえ、リストにはキミと私しかいない——はずだ」

「はい……フラッタ・ロータスさん」

経歴な名前だ、とか、あなたにびつたりです、とか言いたかったが勿論そんな台詞をする余裕でできるわけもなく、ハルユキのブタ鼻がふがふが動いただけだった。

「よし、それでは、私の名前をクリックし、対戦を申し込んでみる」

「え……ええ!?」

「何も本気で戦おうって訳じゃない。タイムアップでドローにするだけだ」

軽く苦笑し、黒雪姫はさあ、とハルユキを促した。

同一フィールドに数万人が接続する大規模戦闘ゲームも珍しくないこの時代に、いまだき一對一か、と思いいながらリストの名前をそっとクリックし、現れたポツポツアプメニユーから

【DUEL】を選ぶ。さらに浮かんだYES/NOダイアログから——【YES】。

瞬間、ふたたび世界の様相が変化した。

青く停止したラウンジから、全ての生徒たちが一斉に消える。柱やテーブルが、色を取り戻しながらまるで風化するように朽ちていき、ガラスにも厚く埃がこびりつく。

そして空が、さあっと深いオレンジ色に染まった。そこから乾いた風が吹いてきて、床のあちこちから伸びた名も知れの草を踏らした。

見覚えのある1800の数字が、ぼしっと視界上部に刻まれた。左右に青いバーが伸び、最後——『FIGHT!!』の表文字。

「はう……（黄昏）ステージか。レアなのを引いたな」

きょろきょろ周囲を見回していたハルユキの傍らで、黒雪姫の聲が響いた。

「ステージ属性は、よく識える、すぐ壊れる、意外に暗い、だ」

「は、はあ……」

傾きながらも、ハルユキは自分の体を確認した。するといつの間にかピンタプタの体は、あの細い銀のロボットに変化していた。

となれば黒雪姫はどのような姿になっているのかと思ひながら視線を向けたが、目の前に立っていたのは、これまでも一切変わらない黒ドレスのアバターだった。

「それがキミのデュエルアバターだな。（シルバー・クロウ）、いい名前じゃないか。色もいい。フォルムも好きだな、私は」

黒雲姫の手が伸ばされ、銀色のつるつる頭をなでてした。

その確かな接触感覚は、ハルユキに改めてここが「接触禁止」というお子様な倫理保護コードなど存在しない、本物の仮想現実であることを意識させた。

「ど、どうも……なんかずこっぱいですけど、造り直しは、できない……ですよね。これ、デザインやネーミングは誰がしたんです？　そもそも、デュエルアバターって何なんですか？」

「その名のとおり、対戦専用のアバターさ。デザインしたのは、ブレイン・バースト・プログラムであり、キミ自身でもある。——キミはゆうべ、とても長く、怖い夢を見ただろう？」

「……はい」

内容は思い出せないが、それが物語い夢だったことだけは感覚的に憶えている。思わずロボットの細っこい二の腕を硬い掌で握る。

「プロダラムが、キミの深層イメージにアタセスしたせいだ。ブレイン・バーストは、所持者の欲望や恐怖や強迫観念を切り刻み、確し取って、デュエルアバターを造り上げるのだ」

「僕の……イメージ。恐怖と……欲望」

味さ、ハルユキは改めて自分の体を見下ろした。

「これが……この小さくてひ弱てツルツルの体を、僕が望んだってことですか？　そりや確かに、もつと握せてたらなーとは常々思ってますけど……それにしたって、もうちょつとこうとーローっぱく……」

「ははは、そう単純なものじゃないさ。プログラムが読み取るのは、理想像ではなく劣等感なのだ、キミの場合、あのピンタのブタくんがそのままデュエルアバターにならなかっただけでも幸運だと思うべきかもしれないぞ、もつとも、私はあれも好きだがね」

「や……やめてください、僕は嫌いです」

とつと学園内ネット用に新しい黒騎士アバターを組もう、と思いながらハルユキは尋ねた。

「でも、ということは、先輩のその学園内アバターもブレイン・バーストが作ったものだったんですか？ それが、先輩の劣等感の象徴？ そんなに綺麗なのに……」

「いや……」

かすかに顔を翻らせ、黒雪姫は顔を伏せた。

「これは、私自身がエディタで組んだものだ、私は……わけあっていま、本家のデュエルアバターを封印しているのだ、理由はいずれ話す、時がくればな」

「封印……？」

「残念ながら、私のデュエルアバターは強いよ、悪逆の極みだ、それが封印の理由ではないがね……え、私のことはいいい」

肩をすくめ、黒雪姫はすぐにいつもの誠めいた表情に戻ってしまった、再び白い手で、ハルユキのヘルメット頭をすりつと撫でる。

「キミは今朝、グローバルネット経由で他のバーストランカーに対戦をふっかけられ、出来立

でのこのアバターで戦った。そしてけちもんけちよんに負けた。そうだな？」

「……う、まあ、その通りです。パーフェクト負けです」

「対戦が終わったあとのリザルト画面を、よく見ておいただろうか？」

ハルユキは、登校前に突然放り出された《対戦ステージ》のことを嫌々ながら思い出した。あの暗闇の隙間で、下品なパイタにまたがった骸骨ヘルメットのライダーに、散々殴られ、つかれ、敗北されて、ハルユキの体力ゲージはあつというまに満ちてしまったのだ。

情けない効果音とともに、目の前に『YOU LOSE』の文字が現れ、そして――。

「たしか……僕の名前と、レベル1って表示、それに変な数字が出ました。パーセント……ポイント、だったかな。それが、99から89に減ったんです」

「よし、よく覚えていたな。パーセントポイント！ それだ、それこそが戦々をこの無慈悲な戦場へと駆り立てるものだ」

叫ぶようにそう言うと、黒雪姫は窓ガラスのほうに数歩すすみ、くるりと振り返った。両手で持った傘がカツター！ と床に突き立てられ、ひび割れた硝子が小さな破片を飛ばした。

「パーセントポイントは、すなわち、我々が《加速》できる回数だよ。一度加速するとポイントが1減少する。インストール直後の初期値は100ポイントだが、キミは昨日ラウンジで一度加速したため、1ポイントを消費していた。そしてさっき、さらに1ポイントを使ったことになる」



「げっ……、そ、それどうやってチャージするんですか。まさかリアルマネー課金ですか」

「違う」

黒雪姫はばつり否定した。

「バーストポイントを増やす方法はただ一つ、〈対戦〉で勝つことだ。勝てばポイントが、同レベル対戦ならば10増える。しかし負ければ10減る。今朝のキミのように」

すっ、と顔を窓の外の夕焼け空に向けて、黒雪姫は呟くように続けた。

「〈加速〉はとてつもなく強い力だ。喧嘩に勝つことは勿論、試験で満点を取ったり、ある種のギャンブルやスポーツで大勝することも容易い。このあいだの夏の甲子園で、本塁打の大会新記録を打ち立てた一年生選手はハイレベルのバーストリンカーだ」

「……な……」

唖然とするハルユキに、どこか悲しげな視線がちらりと投げられる。

「ゆえに、一度この禁断の薬を味わった我々は、永遠に〈加速〉し続けるしかない。そのためバーストポイントを得るべく、永遠に戦い続けるしかないんだよ」

「……ちよ……ちよと待ってください」

ええ、あの天才強打者がバーストリンカーだって。

いやそうではなく――黒雪姫の話に、少しおかしいところがあったか。

ハルユキは懸命に考え、口を開いた。

「あ……あの、さっき、対戦に勝てば10アップ負ければ10ダウンで言いましたよね。てことは……そのほかに、《加速》で消費されるポイントもあるんだから、全バーストリンカーの持つ総ポイントが減る一方じゃないですか。つまり、対戦が弱い人は当然ポイントがゼロになることも……。なったら、どうなるんです……？」

「さすが、理解が早いな。簡単なことだ。《フレイン・バースト》を失う」

黒雪姫は、闇色の瞳に燃えるような色を浮かべてまっすぐにハルユキを見た。

「プロダラムが自動的にアンインストールされ、二度と再インストールすることはできない。ニュエロランカーを機種変更しても無駄だ、固有駆使で識別されるからな。ポイントを含めて奪われた者は、二度と《加速》することはできないのだ」

寒々とした声でとうとう告げながら、もつとも、と言いつづけた。

「キミのように、新人として参戦してくる者もいるから、パイは減少一方というわけでもないがな。それでも現在、傾向としては微減だが」

しかしハルユキには、付け加えられた言葉はほとんど聞こえなかった。

「フレイン・バーストを……失う」

たった二、三度《加速》の力を味わっただけなのに、想像しただけで背中がぞうっと凍った。加速できなくなる、というだけではない。ハルユキにとっては、もともと別世界の住人である黒雪姫とのたった一つの接点が消われるということでもあるのだ。

改めて、あのドラロライダーに狩られた10ポイントがいかに重いものだったかを悟る。

「さて……どうする、ハルユキ君」

囁くようにそう問う声に、ハルユキは顔を上げた。

「どうする……って……」

「今ならまだ戻れるぞ。(加速)も(対戦)もない、普通の世界に。キミをいじめる馬鹿者ももう現れない、それは私が生徒会役員として保証しよう」

「……は……僕は……」

——加速とか、ブレイン・バーストとか関係ない。ただ、あなたと離れたくないだけで、などと言うことは勿論できなかった。かわりに、銀の拳をかしやつと握り締めて答えた。

「……僕は、まだ、先輩に返すべきものがありますから」

「はうう」

「あなたは、僕にブレイン・バーストをくれて、あの地獄から引つ張り出してくれた。それが、僕の初期10ポイントを手うたためじゃない、ってことくらいは分かります。そうなら、いくらでもうまい言い方がありませんもんね。……なら、あなたには何か、僕にさせたいことがあるはずです。スカッシュゲームのハイスコアをチユツタしたり、加速について一からレタチャーしたりするほどの手間をかけるだけの目的が。さうしてしよう」

「……ふむ。的確な推論だ」

かすかに微笑む美しいアバターを、ハルキは顔面こしにまっすぐ見つめた。

「僕は……僕は、ほんとに、先輩とこうして話せるような人間じゃないんです。かつこ悪いし、ぶよぶよだし、蚊が虫だし、たった一人の友達を恨んだり妬んだり、すぐ走って逃げたり、ほんとにめなやつなんだ。最低なんです」

何を言ってるんだ僕は、と怒ったが、言葉は溜れるように出てきて止まらなかった。鏡のよう

に表情のないアバターなのがまだしも寂しかった。

「それなのに、あの黒雪姫先輩が、声をかけたり、直結してくれたりして、それが、ただ僕がちょっとゲームが上手かったからだけなのは分かっていますけど、その他に理由なんてないって分かっていますけど、ば、僕はそれだけじゃ嫌っていうか、その」

ほんとに僕は何を言う気なんだ、もつと整理してから言えよ、ああこんな時こそ加速すべきか、いやもうしてるんだった。

とでつもないパニクタに陥りながら、ハルキは俺も胸のうちを吐露せずにはいられなかった。

「だから……だから僕は、先輩の期待に応えたい。あなたのかけてくれた……じ、意識に、ちやんと報いたい。何ができるかわかりませんが、あなたが今困っているなら、そのためにできるあらゆることをしたい。だから僕は……ブレイン・バーストをアンインストールしません。戦います……バーストリンカーとして」

なんだよ、最後のひと言だけでよかったじゃん！ いったい僕は何を言ってしまったんだ。

言葉を吐き出し終えたハルユキは、羞恥のあまり細い仮想体をいっそう締め、俯いた。

どうせ、何を勧進いしてるのかしらこの直意通判若は、と思われたに違いないと覚悟したその直後、ぼつりと放たれた言葉が聴覚を震わせた。

「慈悲……なんて言葉を使うな」

はっ、とわずかに上向けた視線が捉えたのは、この数日で最も感情をあらわにしてくしやりと詰められた顔だった。

「私は愚かて無力な中学生でしかない。キミと同じ場所に立ち、同じ空気を吸っている同じ人間なんだ。ましてやこのステージでは、キミと私はまったく対等なバーストリンカー同士。距離を作っているのはキミのほうだよ。このたかが仮想の二メートルが、キミにはそんなに遠いのか？」

す、と音もなく白い右手が差し出された。

遠いです。

ハルユキは、胸のうちにそう呟いた。

あなたのような、全てを持っている人の視界に入る、それですら僕のような人種にとってはどれほどの恐怖なのか、あなたには分からない。僕は下僕でいい。あなたの命令どおり動ける駒になれば、それだけで望外の幸せなんだ。ここでその手を取ったら、僕はしてはいけない期待をしてしまう。あとで必ず、二倍の後悔となって返ってくるに違いない毒入りの期待を。

チユリとタクムのこともそうだが、あの二人にとって、愉快なふとっちよの友達でさえあれば僕は満足だった。憐れまれたり、同業されたりだけしなれば、それ以上のポジションは絶対望まないのに。

ハルユキの口から零れた声は、復讐の夕暮れを渡る木枯らしのように乾いていた。

「……先輩は、僕を地獄から救い出してくれた、それは……僕にとっては一生分の幸せです、これ以上は何も望みません、絶対」

「……そうか」

眩しとともに、闇雲影の手が下ろされた。

硬く重い沈黙が、しばしステージを支配した、それを破ったのは、いままでと何ら変わらぬように思える滑らかな声だった。

「キミの志は、ありがたく受け取ろう。確かに私は、現在少しばかり厄介な問題を抱えている。その解決に、キミの手を借りたい」

ハルユキは、小さく息をつきながらこくりと首を動かした。

「ええ、僕にできることなら、なんでも、何をすればいいんですか？」

「まずは、〈対象〉の仕方を学んでもらう。体力ゲージの下に表示された自分の名前をクリックしてみたまえ、〈インスト〉が開き、キミのデュエルアバターに設定された通電技及び必殺技の全身コマンドを確認できる」

「ひ……必殺技?」

伸ばしかけた手をとめ、ハルユキはおうむ返しに訊いた。

「うん、プロダラムは、デュエルアドバイザーを創造するとき、その属性に従って既定量のポテンシャルを各バリエータに割り振る。攻撃力に秀でたタイプ、防御が強いタイプ、そして必殺技で一発逆転を狙うビークリーなタイプもある。だが、大原則として同じレベルのデュエルアドバイザー同士ならばその総ポテンシャルはまったく等しい。キミは初めての対戦で惨敗したが、それは相手が強かったからではない。ただキミが、戦い方を知らなかっただけなのだ」

あのバイタ男(アッシュ・ローラー)は、ハルユキと同じレベルだった。あれほど圧倒的に思えた相手なのに、ほんとうは《シルバー・タロウ》と同じ戦力だったのだろうか。

だとすれば、この小さく細っこいロボットのアドバイザーには、さぞかし物凄い必殺技が設定されているに違いない。ハルユキはときどきしながら銀の指を伸ばし、自分の名前を押した。効果音とともに半透明の窓が開く。

シンブルな人型のアニメーションで体の動きが示され、その右に技名が表記されている。

まず一つ、腰指めに右拳をかまえ、突き出すモーション。通常技(パンチ)。

そして二つ目、右腕を引き、前に振り出すモーション。通常技(キック)。

そして最後に、必殺技——両腕をクロスさせ、大きく左右に開き、よいしょと頭を突き出す、その名も《ヘッドバット》。

それだけだった。それ以外には何もなかった。

「……あの」

ハルユキは呆然と呟いた。

「通常技の、パンチと、キック……それと、必殺技が、ただの頭突きしかないんですか」

「ほう？」

それを聞いた黒雪姫は、右手の指先を顔に添え、首を傾げた。表情は変わらなかったように思えたが、それ以上見ていることができず、ハルユキはきつと俯いた。黒い瞳に浮かんでいるであろう失望の色を想像するだけで、全身がかあつと熱くなった。

意識せぬうちに、口が勝手に動いていた。

「いや、いいんです。なんか、予想してましたから。このアバター、見た目でもうダメダメ感あふれてますもんね。すいません、ご期待に添えなくて。いいですよ、僕のことばもうほんといてくれても、はずれタジだったと思ってください」

「この……闘勝者!!」

びくつ、と体を震わせて、ハルユキは顔を上げた。いつの間にか目の前まで近づいていた黒雪姫が、柳眉を吊り上げ烈火のとき友睦に見下ろしていた。

「キミの生き方については何も言うまい、所詮は同じ中学生だからな。しかしブレイン・パーストに関しては、私はキミより六年以上も先輩なのだ。私は言ったはずだが、あらゆるデュエ



ルアバターは等しいボタシシャルを持つと、もう忘れたのか」

「で……でも、だって、実際性がパンチとキックと頭突きしか……」

「ならば、それを補うに足る強さがどこかに必ずある」

わずかに視線を和らげ、黒雪姫は諭すように続けた。

「そのデュエルアバターを生み出したのはキミの心なんだ。キミが信じてやらなくてはならない。僕がいちばん信じられない人間、それは僕自身なんです。」

と胸中で呟きながらも、ハルユキは頷いていた。

「……すみませんでした。信じます……自分はともかく、あなたの言葉だけは」

それを聞いた黒雪姫の顔がわずかに綻び——ただの苦笑ではあつたが——ハルユキは小さく肩の力を抜いた。

「キミは、戦い方より先に学ばねばならないものがあるようだな。強さというのは……」

わずかな間、微苦笑が、仄かに哀切な色合いを帯びる。

「強さというのはな、決して結果としての勝利だけを意味する言葉ではないよ。私は、それを学ぶのに余りにも長い時間を費やした。そして学んだときには、もう遅過ぎた」

静かに囁かれた言葉の真意を、ハルユキは理解できなかった。首をかしげ、訊き返そうとしたが、その間を与えず黒雪姫はさっと身を翻してしまった。

「ン、そろそろ時間か」

見れば、千八百秒もあつたタイムカウントは、わずかに二十秒を残すのみとなつていた。

「では、次のレタチャーは体験授業といくか」

「は……え……うう……うう……うう……」

きよとんとするハルユキに、黒雪姫は不敵な笑みを浮かべてみせた。

「無論、返してもらいに行くのだ、きよの10ポイントを」

直後、ドロローのワザルト画面を経て〈対戦〉が終了し、同時に〈加減〉も解けた。

現実のラウンジに復帰した途端、黒雪姫はハルユキに発言の機会を与えぬままぶちつと直結ケーブルを引き抜いてしまった。

「さて！ 食事にしよう有田君、冷めてしまうぞ」

にっこり笑つて、ケーブルから小さなスプーンを取り上げる。やむなくハルユキも、自分の前に置かれたカレーライスの皿に手を伸ばした。体験時間ではもう三十分以上前にカウントーから運んできたものだが、まだほかほかと湯気を上げていて、胃がきゅうつと縮む。

周囲のケーブルからは、昨日と同じ非難の視線がハルユキに集中照射されていて、どうせなら学食のスミッコに持つていつてから食べたいと思つたが空腹には勝てなかつた。はぐはぐと三口ばかりかき込んだところで、同じケーブルに座る上級生が黒雪姫に話しかける声が聞こえ、ハルユキはむぐつと喉を詰まらせた。

「銀、そろそろ教えてくれないかしら？ 私たちはもう好奇心で死んでしまひそうだね、こち

らの殿方は、あなたとどういう関係であると理解すればいいのかしら」

さつ、と視線だけ上げると、発言の主は昨日も見た、ふわふわした髪型の生徒会役員だった、確か二年生の書記だ。

「ふむ」

黒雪姫は、ガラタン皿の脇にスプーンを置くと、優雅な手つきでティーカップを持ち上げ、少し考える様子を見せた。周囲の生徒たちが一斉に静まり返った。

「端的に言えば、私が告白し、彼がフツたのだ」

悲鳴と驚愕の叫びが世界に満ちた。

スプーンを喰え、カレーを喰えて、ハルユキは走って逃げた。

「あ……あのですねえ!!」

午後の二時間を、針のような視線を浴びながらやり過ごしたハルユキは、校門に向かって歩く黒雪姫の右斜め後方から押し殺した声で抗議した。

「何考えてんですか!! 僕またイジメられますよ! イジメられますからね絶対!!」

「堂々たる宣言だな」

ふふつと笑ってから、黒雪姫はすまし顔で続けた。

「私は事実を言ったまでじゃないか。それに、キミも満足でもなさそうだったぞ」

「いながらさっさと自分の仮想デスクトップを操作し、指先を弾く仕草を見せる。ローカルネット経由で即座にファイルが受信され、ハルユキの視界にアイコンが点滅した。クリックすると、眼前に大きな画像が展開された。

カレーのスプーンを口に突っ込んだまま、ぽかんと開け顔を晒す自分の写真。それを見た途端、ハルユキは叫んだ。

「うざやあ!!」

即座にファイルをゴミ箱に叩き込む。

「いいい、いつの間にこんな視界スタシを掘ったんですか! 早業にもほどがありますよ!!」

「何、ほんの記念だ」

そんなやりとりをする間も、周りからは現実的殺傷力を持っているとしか思えない視線がハルユキに照射されている。今更のように肩を縮めるが、到底黒雪姫の細身の陰には隠れられない。

「もう少し胸を張れ。この学校に、私にフられた男子は多くともその逆はキミだけなんだぞ」

「だから、僕がいつそんなことをしましたか!」

「その言い方はひどいな。また傷ついちゃうな。……っと、そんなことより」

そんなことの一語で問題をベンディングし、黒雪姫は表情を改めると小声で言った。

「校門を出れば、キミのニューロリンクカーはグローバル接続される。ここを含む《杉並第三

戦区に居るバーストリンカーなら、誰でもキミに対戦を強制できるわけだ。ふっかけられる前に加速し、マツチンダリストから「アタシユ・ローラー」を探して挑め」

「え……エリア？ 対戦できる範囲に、限りがあるってことですか？」

ハルユキの問いに、黒雲姫は小さく頷いた。

「それはそうさ。東京の反対側にいる奴と対戦になっても、遭遇する前に三十分が過ぎてしまふ。……いずれば、多人数が無制限に接続できる専用フィールドへと踏み出すことにもなるが、それはレベルを越えてからの話だ。今は目の前の戦いだけに集中しろ」

わずかに銀きを増した声で、レタチャヤーが締めくくられた。

「先に言っておくが、負けたからって即ちマツチとはいかないぞ。同じ相手に挑戦できるのは一日一回だからな。私もギヤラリーには行くが、残念ながら手助けはできん。……そうしよばくれた顔をするな、メールに書いたとおりに戦えば負けはしないさ」

「は……、はい」

ごくつ、と喉をならし、ハルユキは頷いた。驛内に、六時開きの授業中に送られてきたテキストメールの文面をコピー＆ペーストする。

「これが本当のデビュー戦だ、《シルバー・クロウ》、グッドラック」

ぱんと背中を押され、ハルユキは戦塵吹き荒れる歩道へと足を踏み出した。

戦場はまたしても、深夜の破壊をかがり火が照らし出す（世紀末）ステージだった。

ハルユキは小さいアバターをいっそう縮めて、環七にかかると道橋の上に身を潜ませていた。前回の対戦のときはバニタリすぎて気付かなかったが、視界には残り時間と体力ゲージのほかに、小さな水色の三角形が表示されている。敵の大まかな方向を示すがイドカーソルだ。

三角は、広い道路のまっすぐな北を指したままかすかに震えるのみだ。と言っても、敵（「アツシユ・ローラー」）がどこか遠くてじっとしているというわけではなく、おそらく一直線に急接近中なのだ。カーソルは距離までは教えてくれない。

ハルユキは、黒雲煙から逃られてきた攻略メールの文面を脳裏でたどった。

『キミからの情報を検討した結果、アツシユ・ローラーには大きな弱点が二つある。まず一つは、移動時に大きな音を立てること』

確かにそうだ、前回だって、ちゃんと周囲に気をくばっていれば、あのドコドコやかましいガソリンエンジンの騒音はかなり遠くから聞き取れたはずなのだ。

今頃は同じ轍を踏むわけにはいかない。息を殺し、懸命に耳をそばだてる。と――。

……………きた！

カーソルは相変わらず微動だにしないが、傍若無人な重低音がハルユキの聴覚に触れた。無人の環七を、エンジン全開バリバリ爆走中らしい。さぞかし楽しいだろう、もし現実のあいつもバイク乗りなら、目ごろあの流暢のなかをローパワーな電スタでとろとろ走っているのだから、そのうえチャレンジャーが、つい今朝方バーフエクト勝ちしたニュービーとくれば尚更だ。

でも今度は、少なくとも完勝はないぞ、なぜなら、ファーストアタックは僕なんだからな。ハルユキはぐつと奥歯を噛み締め、水色のカーソルを睨んだ。

相変わらずびたりと雨に向いたままだが、敵の接近度合いはエンジン音で判る。だが、向こうはそうはいかないはずだ、一直線に高速接近する状況では、カーソルの向きが変わるのは、交錯したまさにその瞬間でしかないのだから。

歩道橋の床にびったり腹ばいになったまま、ハルユキは懸命に高円寺駅方向に下る坂を睨んだ。爆音はとんとん高まり、振動すらも体に感じるほど――。

見えた。

ヘッドライトはさすがに消しているが、赤いかがり火がちかりとタロームメッキに反射するのが確かに見えた。交差点まで上ってくるのに、あと十五――いや十秒か。

奇襲のチャンスはたった一度、しかし、ハルユキの武器は、通常技のパンチ及びキックのみ。つまり、歩道橋から飛び降りて休ことぶつかっていくしかない。

怖い。そんなことが、僕にできるわけない。

と一瞬思ってしまった自分を、ハルユキは内心で罵った。

馬鹿言ってるんじゃない。今の僕は重量過多な有田春樹十三歳ではなく、バーストランカー（シルバー・クロウ）だ。そしてここは現実ではなく仮想のゲームワールドだ。僕がこれまで、ありつただけの時間と情熱を注ぎ込んできた世界。むしろこちらが僕にとってのリアルだと言いつけるほどに。

なら、僕は負けない。というより――今度はこっちが楽勝してやるこのガイコウ野郎！

「うわあああ！」

喚き声を上げ、ハルユキは体を起こすと一息に鉄欄を乗り越え、跳んだ。

時速百キロ以上ですっ飛んでくるバイクの乗り手に、高所から飛び降りて蹴りを命中させるというのは、恐らくハルユキが思っていた以上に至難の業だったろう。

しかし、バーチャルスカッシュの視認もむずかしいボールをひたすら叩き続けてきたハルユキには、アッシュ・ローラーの慣性ヘルメットは大きすぎる目標物だった。空中で右足を突き出し、広げた両手で姿勢を制御しながら、ハルユキは銀の矢となって突進した。

「……おわ？」

という叫びが、かすかに隣機のフェイスクールドの下から漏れたような気がした。

しかしその時には、銀甲に覆われたかかどが、見事に隣機のと真ん中に命中していた。



バキヤアアアン!! という物凄い衝撃音とともに、シールドが放射状にひび割れた。かくんとライダーの首が後ろに曲がり、ハルユキはその顔の上をすべるように通過すると、アスファルトの路面に墜落しころころと転がった。

一瞬、目が回ったが、すぐに顔を上げて後ろを確認する。

バイクは、前後のブレーキローターから大量の火花を散らしながら右斜め方向に吹っ飛んでいき、路肩の瓦礫の山に突っ込んでようやく停止した。乗り手の体が、反動でどんとタンクに突っ伏し、同時にぶすんと驚けない音を立ててエンジンが止まった。

「……や、やった」

咳き、ぐっと右手を握り締めてから、ハルユキは双方の体力ゲージを確認した。

シルバー・クロウのほうは、高所落下ダメージを適用されたように五％ほど減少している。

対するアッシュ・ローラーはまさに被害甚大、飛び降りたらタラッシュの双方でダメージを負ったと見えてゲージが二〇％以上も削れ、色も少し紫がかっている。

ファースト・アタックは完璧に成功と言っている。しかし長々とタリタイカバヒットの余韻に浸っている場合ではない。

ハルユキは立ち上がると、前もって腹をつけておいた道路左側の五階建てビルディングを目標して走り出した。黒雪殿いわく、世紀末ステージは路上がメインフィールドなので建築物には入れない。しかし建物の外階段はその要りではない。

ビル壁面には、半ば崩れたような非常階段がおまけ程度に張り付いていた。そこに飛び込むと、ハルユキは一点に屋上まで駆け上った。

「アッシュ・ローラーの弱点その二」それは、デュエルアバターのボテンシャルのほとんどをバイクにつぎ込んでいることだ。ライダー本人の戦闘力はゼロに等しいはずだ。だからキミはまず初撃でダメージを与えてから、バイクの登ってこれない建物の屋上に移動するのだ」

それが、黒雪姫がハルユキに与えた作戦だった。

ダメージ量で優位に立ったまま階段を上れば、あとはタイムアップまで待つだけで勝てる。あるいはライダーがバイクから降りて上ってきてても、パンチとキックだけで楽々叩きのめせる。見ようによっては卑怯な戦略とも言えるだろう。しかし実際のところ、ハルユキはこういうクレーパーに弱点を突く勝ち方というのが大好きなのだ。むしろそれが、ゲームの本質だろうと思う。

ときあえず屋上から、今朝のアッシュ・ローラーのヒヤハハア笑いを倍返ししてやろうとハルユキは縁まで移動した。

下を覗き込むと、クラッシュしたバイクがようやくエンジンを再点火したところだった。息切れのようなアイドリンド音を響かせる車体が、ずばっと瓦礫から引つ張り出される。

さて何と挑発してやろう、とハルユキが少し考えたとき、どこからかひそひそ声が聞こえた。「へえー、やるじゃないあのちっちゃい子」

「今朝とは大違いだな、**（戦）**は誰なのかね」

視線を向けると、少し離れた隣のビルの上、巨大な貯水タンクのへりに座ってこちらを見下ろすシルエットがあった。**（ギヤララー）**だ。

バーストリンカーの**（対戦）**は、現実世界においては最大でもたった一・八秒の出来事ではないため、誰かが戦闘を始めてから加速したのでは間に合わない。そこで、興味のあるバーストリンカーや友達などの名前を登録しておき、そいつが対戦を始めたら自分も自動で加速し、戦場にダイブして観戦できるという機能があるらしい。その際はポイントは消費しないということだった。

周囲を見回すと、いつの間にかあちこちの屋上や路地にたたずむ人影を見つけることができた。彼らがハルユキをマークしているはずはないので、アッシュ・ローラーのほうをチェックしていたリンカーたちなのだろう。

しかしこの中で一人だけ、シルバー・クロウの名を登録しているギヤララーが存在するはずだ。もちろん**（ブラッタ・ロータス）**こと黒雪姫である。

さてどこにいてものだろうときよあきよあきしていると、タンクに座っている二人組みの片方が、ハルユキに向けてひらりと手を振った。

「このデュエルに勝ったら、君も登録させてもらうわね。がんばってね、ボウヤ」

「は、そう簡単ではないと思うがね」

もう片方の台詞に、ハルユキは内心で答えた。

残念ながら、この先はあまり燃える展開じゃないですよ、たぶんタイムアップですから、という気持ちを込めて小さく肩をすくめ、再び視線を路上に戻す。

そして、驚愕のあまり凍りついた。

道が眼下に豆粒のように見えるアッシュ・ローラーのバイクが、いつの間にかビルの壁面に前輪を立てかけていたのだ。

ちよ……な、何する気なのアンタ。

返事は、甲高い激怒の叫びだった。

「い———い気になってんじやねーぞハゲ!! 俺様のVツインサウンドで轟かせてやんよ!!」  
 ぽがぁぁぁん!! とエンジンが咆哮し、クロームのマフラーから排気炎がほとばしった。

直後、巨大なアメリカンバイクは、猛烈な勢いでビルの壁面をまっすぐに登攀しはじめた。

「げっ……」

銀面の下で目をむき出し、ハルユキが一步退いた——そのわずか二秒後、手を伸ばせば届きそうな距離を、爆音と強烈臭さを振りまきながら鉄塊が垂直に横切った。

ぽるおぉおぉん!! と一際高らかにエンジンを吹かし、屋上の縁から二メートル近くも高く飛びあがったバイクは、そのままハルユキめがけて落下してきた。

「うわわわ!!」

慌ててさらに数歩バックダッシュする。

速まじい衝撃とともに灰色のリアタイヤが屋上のコンクリートを叩いた。放射状にひび割れが走り、飛び散った破片がいくつかハルユキの装甲に弾けた。その瞬間、自分の体力ゲージがはんの一ドット程度ではあるが削れ、ハルユキは改めて驚いた。

普通の対戦ゲームなら、ダメージはシステムに規定された方法でしか発生しないはずだ。やはり、この「ブレイン・バースト」はただのゲームではないのだ。現実と区別できないほどに高度なグラフィックとサウンド、そして熱戦なまでのリアリズム。

この世界での戦闘を勝ち抜くための鍵は、きっとそこにある。

内心にそう刻みつけながら、ハルユキは己より速かに経験を積んでいるであろう敵を見上げた。

パイタを器用に直立させたまま、アッシュ・ローラーはじろりとハルユキを見下ろし、金属質の甲高い声でしやべり始めた。

「実はさあー、俺様、けきテメーに勝ったおかげでようやく300ポイント貯まってさあー、レベル2になったんだよあー」

ガンメタのヘルメットの個性シールドはすでに破壊され、素顔の一部があらわになっていた。さぞかしコワモテならんと思いきや、そこにあったのはどちらかと言えば埋もれっばい、線の細い少年の顔だった。

デュエルアバターは劣等感の顕現、という黒雪姫の言葉がちらりと腦裏を過ぎる。

痛い唇を引きつらせるように笑みを浮かべたアツシユ・ローラーは、一度アタセルをおおてから言葉が続けた。

「レベルアップボーマス何にするか超迷ったけどさあ、必殺技も走行速度アップも願って壁面走行能力にしたんだよね。いやー、俺様、超くっ正しく解くわ」

ハンドルから両手を離し、二本の人差し指をびしっとハルヒキに向けて、

「そしてオマエ、ギガ・ア——」  
シ・ラツキイ

そんなの言われるまでもなく知ってるさ。

胸中でそう毒づいたが、ハルヒキもただ黙って聞いていたわけではなかった。周囲を懸命に

駆け、黒雪姫のメールを思い出し、なんとか執腕を打聞する策がないか知恵を絞っていたのだ。

【もし初撃、あるいは退避に失敗し、バイクに乗ったままのアツシユ・ローラーと正面戦闘になってしまった場合は、残念ながらキミが勝利する可能性はかなり低くなる。なぜなら——】

続けて、黒雪姫はデュエルアバターの《相性》について書いていた。

バーストリンカーに自動的に付与される英語名には、必ず色を示す単語が含まれている。

その色によって、デュエルアバターが持つ属性をおおよそ把握することができる。

《青系統》は近距離直接攻撃、《赤系統》は遠距離直接攻撃、《黄系統》は間接攻撃。紫や緑のような中間色は、二つの系統にまたがった属性を持つ。また、それらカラーサークルに分布す

る色とは別に金属の名を冠した（メタルカラー）というものがあり、これは攻撃ではなく防御能力に秀でた属性である。

【キミの（シルバー）を含むメタルカラーはかなりレアであり、強力な色系統でもある。切斷・貫通・炎熱・毒攻撃に耐性を持ち、また硬質の体を用いた近距離攻撃力も決して低くないからだ。だが、勿論弱点も存在する。魔法攻撃はほとんど天敵だし、打撃攻撃にも弱い】

シルバー・クロウの属性をそう分析した黒雪姫は、続けて見たこともないはずのアッシュ・ローラーについても詳細に言及した。

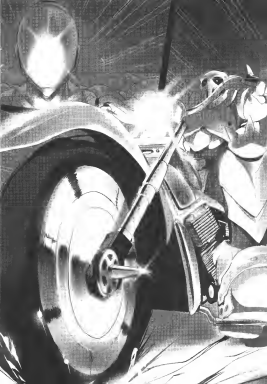
【対するアッシュ・ローラーの（アッシュ）は、カラーサークル上では緑よりの青に属する色だ。彩度が低いのは、その攻撃の特殊性を示している。ダイヤは明らかな武器ではないので判りにくいだが、恐らく属性は近距離打撃型だ。つまりキミの装甲は、アッシュ・ローラーの突進に對してはほとんど無力なのだ。そこで、正面戦闘となってしまう場合の対応はただ一つ――

――残り時間ぜんぶ、ひたすら避け続けろ。

と、言われても。

ハルユキは絶望的な気分で、ビルの上の広さを確認した。

タタも口も二十メートルもあるまい。黒雪姫の避けまくれ作戦は、当然だっぴりい無人の環七道での戦闘を想定したもので、バイタが壁を登ってきた場合は考慮してないだろう。つまりハルユキは、結果的に自分から不利な場所に逃げ込んでしまったことになる。





バイタの突進力からして、非常階段まで走って逃げるのは無理だろう。ではダメージ覚悟で屋上から飛び降りるか？　しかしそれで、今のアタシユ・ローラー以上にゲージを減らしてしまつては元も子もない。

打開策を思いつくことができず、立ち尽くすハルユキに向けて、機馬上の騎手は勝ち誇った笑いを高らかに放った。

「ヒヤハハハ！　打つ手ナシかあこのツルビカボーズ！　じゃあこっちから行くぜ!!」  
とるおおっ!!　と内燃機関が猛り、空転した後輪から青い煙が上がった。

どすんと前輪が接地し、巨大なバイタは一直線にハルユキ目掛けて突っ込んできた。

「うわっ!!」

悲鳴とともに右に跳んだが、あまりにも距離がなさ過ぎた。足先をタイヤがかすめ、体力ゲージがぐくくと減少する。同時に、痺れるような衝撃に加えて一瞬の痛みがハルユキの神経を駆け巡った。

バーチャルゲームで、〈痛覚〉を再現することは随分昔に法律で禁止されたはずだ。やはりこれはただの遊びではない。仮想であり、同時に現実の戦いの戦いなのだ。

バイタはほんの三メートルほど行き過ぎた場所で物凄いスキル音を響かせながらスピントーンし、再度の突進態勢に入った。

何か、なにかないか。一発逆転の秘策、起死回生の――

「もうだ、必殺技！」

たとえ名前がただの「ヘッドバット」であっても、もしかしたら罠をも隠く威力があるかもしれないじゃないか。

ハルユキは一瞬の望みを託し、インストのシルエットに表示されていた通り、両腕を体の前でがしつと交差させた。次いで、上体を思い切り仰け反らせながら、腕を一杯に開く。

みよんみよんみよんというやや滞りない効果音とともに、自分のウルビカ頭が白い輝きを帯び始めるのをハルユキは意識した。周囲のギヤララーたちが、おおっ、と舌をわめく。

……いける!!

確信し、ハルユキはまっすぐ突っ込んでくる巨大なパイタを睨んだ。

「うおおお!!」

輝びながら、輝く頭をパイタのヘッドライト目掛けて突き出し――。

それが命中する直前、こつい前輪に横かれて仰向けに倒れ、コンタリートに人型の穴を開けてめりこんだ。頭のエフエクト光が宙に拡散して消え、必殺技ゲージだけが空しく消滅した。どつ、というギヤララーたちの爆笑が、ステージを揺らした。それに混じって、一人の泣き声が耳に届いた。

「残念、終わりみたいね」

ハルユキの全身が、慣れ親しんだ屈辱の熱にかあつと奪まれた。

高生（こうせい）もくしやう。バーチャルゲームの中なら、僕はヒーローだったはずなのに。キヤラが弱すぎるんだ。何だよ必殺技が当たりもしないヘッドバットだけって、やつてられるか。

起き上がったものの、ふて寝れて、すぐ床り込もうとしたハルユキの視界に――。

はるか彼方（かたがは）、一際（ひとと）高いビルの上（うへ）に、独りぼつんと立ってこちらを見るシルエットが入った。夜風に揺れる、ロールした髪。ふわりとしたドレス。透けるような蝶の翅（は）。

米粒よりも小さなその人影の、表情は見えなかった。しかし、注がれる眩しいまなざしを、ハルユキは確かに感じた。

だめだ――投げちゃ駄目（だめ）なんだ。

負けるにしても、足掻いて足掻いて、見苦しく負けろ。せめてそれくらいできなきゃ、あの人の駒（こま）にすらなれない。

屈辱（くつじやく）を振り払い、ハルユキはあらゆる知識と経験を総動員させて懸命（けんめい）に考えた。

仮想（かりきよう）でありながら現実、それがこのゲーム。《フレイム・バースト》最大の特徴だ。圧倒的なディティール、そしてリアリティ。ならば、あのアッシュ・ローラーのバイクも、ただ見た目だけのポリゴンではないはずだ。精緻（せいせい）に再現（さいげん）されているがゆえの弱点（じゆてん）もきっとある。

バイク――それも前世紀（せんせいき）のガッリンエンジン型の特徴って何だ。

うるさい。ガス臭い。それらは遭遇（そうぐ）雨（あめ）までは弱点（じゆてん）となりうるが、この状況では関係ない。

ガッリンが切れたら動かない。ならタンクに穴を開けられれば――いや、とてもそんなピン

ポイント攻撃は不可能だ。

他にないかないか。なにかな……。

後輪で逃げ跡をつくりながらダッシュしたバイクが、二度ハルユキに黄色く輝く車輪を向けた。その瞬間、ハルユキは鋭く息を呑んだ。

あった。あれだ。内燃機関バイクの特徴。そして弱点。

「ヒヤ——ハハハハア!! もつと遅れえ——!!」

絶叫とともに、鉄の馬が疾駆する。

一度でいい。動いてくれ、シルバー・クロウ。あいつより速く。

奥歯を食いしばり、ハルユキは突っ込んでくるバイクを睨んだ。

そうだ——いかにあいつが遅くたって、見えないほどじゃない。素手に避けようとするな、

ギリギリの動きでかわすんだ。

「oooooooooo!!」

全集中力を振り絞り、ハルユキは跳ね飛ばされる寸前、五十センチだけ右にスライドした。ちつ、とハンドルの端が体をかすめ、アッシュ・ローラーが目の前を通過した。

瞬間、ハルユキは両手を伸ばし、ダメージ覚悟でバイクの後輪を握る黒いフェンダーの縁を握んだ。指が引き抜かれそうな衝撃とともに、腕の各関節から火花が散り、体力ゲージが軽く凹む。

バイクの速度が僅かに落ちた。その隙を逃さず、ハルユキは床面に両脚を突っ張り、思い切り体を仰け反らせた。がりがり、と鋼の足がコンクリートを削り、ゲージが続けて減少した。

「ヒヤッハア————ッ!!」

肩越しに振り向いたアツシユ・ローラーが、甲高い鉄笑を放った。

「バア————カ!! てめえみてーなガリチビに、俺様のモンスター・マッシーンが止められつかよオオカ!!」

ライダーブーツがカン! とフットペダルを蹴る。黒革のグローブがスロタトルを蹴る。

エンジンが吼え猛り、マフラーから炎が逃った。直後、アメリカンバイクは恐るべきトルクを發揮し、ハルユキを引き摺ったまま再加速し始めた。

ガリガリガリガリ!! と、自分の両足の裏が凄まじい擦過音を放つのを聞いた——のと同時に、

「ッ……チチチチいててて——!!」

まるで、足が粗い下し金でクズられていくような、いやそのものの熱と痛みに襲われ、ハルユキは悲鳴を上げた。

「キヒヤヒヤヒヤヒヤー 早く放さねーと、タッパがもりもり減ってくぞお——ッ!!」

アツシユ・ローラーの勝ち誇った声に、耳障りな金属音が重なる。銀の両脚が真っ赤に過熱し、体力ゲージは怖いほどの速度で減少していく。

しかし、ハルユキは両手を放さなかった。銀面の下で歯を食いしばり、熱と痛みにも必死に耐えながら、思直にバイタの尻にぶらさがり続ける。

ここが眼下の環七道の路面なら、シルバー・クロウの小さなボディはアッシュ・ローラーの言葉とおり、やがて細い鉄橋となつて消えてしまうかもしれない。だが、魔ビルの屋上という限られた空間で、永遠に直線的疾走を続けることはできないはずだ。

みるみる低い鉄橋が迫り、誘導ライダーは「ひょおーっ」という奇声とともにバイタを傾けてスピニングに入った。ブレーキローターが火花を吐き、太いタイヤが白煙を上げる。

「くううっ！」

凄心力で吹っ飛ばされそうになるのを、ハルユキは必死に堪えた。

もうすぐ。あと半秒後に、最初で最後のチャンスが来る。

エンジンが回転を落とし、バイタが圓頭を終え、再度の猛ダッシュを開始しようとした——その寸前。はんの一瞬、シルバー・クロウの足底が床面をがっもちりと捉えた。

「——おおおおお!!」

ハルユキは絶叫した。

同時に、あらん限りの力を振り絞り、両手で掴んだフェンダーを真上に引き上げた。膝や肘がスパークし、残り二割ほどにも減った体力ゲージに最後の一滴を食らったが、細い歯肉は巨大な荷重に耐え、真っ直ぐに伸びた。

コンマ一秒遅れて、太いリアタイヤが猛然と回転した。だがその運動エネルギーは、推進力に変換することはなかった。ざりざりのところで、トレッドが床面から離れていたので、

「お……おッ!?」

ハルユキのすぐ目の前で、背中を向けてシートにまたがるアツシュ・ローラーが叫んだ。慌てたように二度、二度と右手をしゃくる。

そのたびにエンジンが唸り、後輪が狂ったように回転する。しかしもう、鋼の車体はびくりとも動かない。

これが、ハルユキの気付いた〈弱点〉だった。前後ホイールにモーターを内蔵した電動バイクと異なり、前時代の内燃機関バイクは、エンジンと繋がったチェーンによって後輪のみを駆動しているのだ。バイク全体を持ち上げるのは絶対に不可能だが、鋼鉄のロババッテリーを突っ張らせてわずかにリアを浮かせるだけなら一時間でも続けられる。

「て……てめえ!! コラア!! 降ろせハゲえ!!」

体を捻って肩越しにそう喚き散らすアツシュ・ローラーを、ハルユキは見上げた。そして、相手には見えないだろうがにんまりと笑った。

「嫌だね、悔しかったら前輪回してみろ」

非加速世界に復帰したハルユキは、午後の陽光を大きく吸い込み、長く吐き出した。

対戦はカウント600を残して決着したので、現実では一秒そこそこしか経過していない計算だ。しかし両の掌は汗にじっとり濡れ、痺れたように冷たくなっている。

強張った指先でニューロリンカーのグローバルネット切斷ボタンを長押ししていると、いきなりバシーン！と音中を叩かれた。

「おい、やっとな、シルバー・クロウー 正直こりやあ負けたかと思つたぞ」

振り向いた先にあつたのは、珍しく明確な笑顔を浮かべた黒雪姫の小さな顔だった。校門を出たところで並んで加速したのだから当然だが、ステージ内の彼女は遥か離れたビルの上から戦場を見下ろしていたので少々混乱する。

あれが、僕とこの人の本当の距離なんだ。勘違いするなよ。

と自分に言い聞かせながら、ハルユキもぎこちない笑みを返した。

「は……僕も、負けたと思いました」

「謙遜するな、見事な勝利だったぞ。私も、アタッシュ・ローラーのパイタの内部構造までは一切考慮しなかった……キミのアバターの瞬発力があつて初めて突けた弱点だろうがな。ともあれ、ポイントはいさもちり取り返せたわけだ」

「いえ、それ以上です。20ポイント加算されました、あいつレベル2になつてましたから」  
 ばちくりと瞬きした黒雪姫は、すぐに一層大きく顔をほころばせると、もう一度ハルユキの肩を叩いた。



「ハハハ、そうか、叔が壁を垂直走行したのはそのせいか」

「笑い事じゃないつすよ、ガクゼンとしましたよ」

「ふふふ、いや、済まなかった。しかしまあ、そのおかげで面白格好いい勝ち方ができたじゃないか。ギヤラリたちの話を小耳に換んだが、アッシュ・ローラーをあんなふうに攻略したのはキミが初めてらしいぞ、見事な勝利だよ」

「は、はあ……」

駆動輪を持ち上げられて二連も三連も行かなくなったアッシュ・ローラーは、しぶとく五分あまりもバイク上で喚き続けてからようやく降車した。

そこを過すかとはばかりに飛びかかったハルユキは、密接状態の肉弾戦に持ち込み、文字通りの鉄拳をふるって快勝したのだった。

「なかなかどうして（パンチ）も（キック）も様になっていたぞ。（ヘッドバット）はともかく、あれならオーソドックスな格闘タイプ相手ならどうそう直れは取るまい。……っと、いつまで立ち話も何だな」

黒書姫の言葉に改めて周囲を見ると、校門のまん前に立つ二人を、下校する生徒たちが歩きながら、あるいは立ち止まって好奇心も露わに眺めていた。

ヒイッ、と自分の陰に隠れるがごとく身を隠めたハルユキは、人垣の輪の奥にチユリの顔を見つけて息を詰めた。反射的にさっと顔を逸らす。

昨日、チユリとタタムの前から走って逃げた記憶はまだ生々しい。サンドイッチの件もまだ謝っていないのに、さらにあんなことをしてしまってはもう何をどこから修復していいのかわからない。

いや——僕のせいじゃない。黙っていてくれてあんなに言ったのに、荒谷たちのことをタタムに話したチユリが悪いんだ。憐れんでくれ、可哀想に思ってくれなんて僕は頼んでない。端々に深くハルユキに、少々いぶかしむように黒宮殿が言った。

「どうした、場所を移すならどこかそのへんの店に……、——ん？ 君は……」  
「ハルをどうする気なんでしょうか」

いきなり至近距離から響いたチユリの声に、ハルユキは跳び上がった。  
ぱつと音を上げると、小柄な体を精一杯振らせて黒宮殿に對峙する幼馴染が目に飛び込んだ。ハルユキだけに相る、最大級の負けん気を発揮しているときの角度で太い眉を固定したチユリは、低めの声でさらに言いつづけた。

「昨日ハルが暴力を振るわれたのは、先輩がちょっとかい出したせいなんでしょう？　なのにまだこんな風にハルを晒し者にして、どういうつもりなんですか？　何か楽しいんですか？」

ひ——

何これ何だよこの状況どうすればいいんだ。

己のキヤバシタイを完全に超えた成り行きに全身を凍ませながらも、ハルユキは強張った口

をどうにか動かした。

「お、おい、チユ……」

「ハルは驚（おどろ）つてて……」

幼少のみぎりから記憶（おぼえ）に刻まれた視線の（いかり）一撃を食らえば、かつての手下としては両立（りやうりつ）不動（ふどう）で押し勘（おし）るしかない。

その超火力チユリビームを真正面から受け止めながらも、黒古（くろこ）はさすがの首（くび）掻（か）き、涼（すず）しい微笑（えいごう）とともに小さく首（くび）をかしげた。

「ン……、少々意味（いみ）が解（と）らないな。私が何か有田（あきた）君（くん）の意（い）に合（あ）ふもの（もの）をして楽しんでいると、そう誤解（ごかい）しているのかな？」

「違いますか。ハルはこういうの嫌（きら）いなんです、目（め）立（た）つたりじろじろ見（み）られたりするの。さっさからすごく困（こ）つてたじゃないですが、先輩（せんぱい）には解（と）らないでしょうけど」

「ふむ。なるほど確かに、私は有田（あきた）君（くん）を彼の好（この）まの状況（じょうき）に置（お）いていたかもしれない。しかし、それを選ぶ（えら）ばないは彼の意思（いし）だと思（おも）うがね。君（くん）に口（くち）を出す権利（けんり）があるのかな？」

「あやます。この学校（がっこう）で、私がハルと一番（いちばん）長い友（とも）達（だ）ですから」

「ほう、友達（ともだち）……ね」

チユリの宣言（せんげん）を聞いたその途端（とたん）、白い美（うつく）装（そう）に極（きよく）冷（れい）気（き）タロユキスマイルが浮（う）かんできた。

「ならば、私（わたし）のほう（ほう）が優先（ゆうけん）度は高いな。もう噂（うわさ）は聞（き）いているだろう、私は彼（かれ）に告白（くわいはん）して現在（げんざい）返（かえ）

事待ちだ、これから軽くダートするところだ」

ギャ——

だめだもうだめだ世界の終わりで明日転校するしかない。

まるで加速したときのように、チユリと周囲の人達みがしーんと凍りついた、ハルユキもまた不自然な姿勢でフリーズし、汗だけがダラダラと面を流れた。

静寂のなか、黒雪姫は制服のポケットから純白のハンカチを取り出し、

「もうすぐ冬だというのに、おかしな奴だな」

ハルユキの汗をフキフキしてから、右腕にがつしと自分の腕をからめた。

「ではごきげんよう、友達くん」

そして、花道のごとく左右に差ぶ生徒たちの間を、ハルユキの巨体をずるずる引き摺りながら進みはじめた。

後ろ向きに引っ張られながら、ハルユキは幼馴染の顔が、呆然とした驚きから怒りゲージ三本ぶんの大爆発寸前へと変化するのを、恐怖とともに見つめた。

「くく繰り返しますが……な何考えてんですか!!」

幹線道路から煙瓦敷きの裏道へと入ったところで、ようやくハルユキは黒雪姫の腕から手を引き抜き、叫んだ。



「いい言つときますけど、世の中には（加速）で解決できないこともあるんです!!」

「アハハハハ」

黒雪姫は心底愉快そうに笑った。

「ハハハ……早速そんなバーストリンカーの極意にたどり着いたのか、よかったじゃないか」

「よくないですいっつも！ 明日から不登校になったら先輩のせいですからね！」

「おや、キミだって議事でもなさそうな顔をしていたぞ。今度も視界スキャンでばっちり撮ったが、見るか？」

「見ません！ ていうか捨ててください!!」

「ふふふ……」

かつかつとロープアークの隣で耐磨耗練馬の鎧装に歯切れよい音を立てながら、黒雪姫は海もしばらく劇を小刻みに揺らして笑い続けた。やがて、小さく息を吐いて表情を改め、それになと続けた。

「ちよつと気になる……というか、確かめたいことがあったのでね」

「へ？ 気になる……って、チユリがですか」

「ほう、名前を呼び捨てする仲か」

「あつ、いえその、倉鳴です、倉鳴千百食、一年一組の」

「知っている、キミの一番の友達というのは初耳だが」と言うより、本当にただの友達なの

か？」

髪をしような視線を浴びせられ、ハルユキはかくかくと首を縦に振った。

「そうです。幼馴染の腐れ縁をやつて……だってあいつ、彼氏いますから」

「ほう？ それにしては……いや……うむ、ふーむ」

「……何がふーむなんですか」

「いや何、現実世界の探みを再認識していただけた」

「は、はあ……」

訳が分からずため息を呑み込んでから、ハルユキは、先刻少し引かかったことを尋ねた。

「えと……さっき、チユリの名前をもう知ってた、って言いました？」

「その通りだ、まったくの偶然だが、彼女には、キミとは別の意味で注目していたのだ」

「と、どういう意味ですか？」

「ひと言では説明できません。私がキミを見出し加速世界へと誘った、その理由に直結しているからな。ま、お茶でも飲みながらゆっくり話そう。勝利祝いだ、ご馳走するよ」

そう言うとき、黒雪姫は向きを変え、最初からそこを指摘していたらしいコーヒーショップチユーンの店側へと歩み入った。

まだ午後も浅い時間のせいだ、幸い店内に客の姿はまばらだったが、黒雪姫が足を踏み入れた途端、少なからの視線がきつと集まるのをハルユキは感じた。それだけで、後に続くのが恐

ろしくなる。

ただでさえ下校途中に——いや人生のあらゆる時間において女の子と二人きりでお茶を飲むなどという経験が絶無であるハルユキはたちまち脳が過負荷状態に陥り、ほとんど自動的に甘くて巨大な飲み物をオーダーし、おとなしくオゴってもらい、奥まったテーブル席にふらふらと眠まり込んだ。直後、目の前に差し出されてきたケープルを、自分のニューロリンカーに突き刺しながら考える。

うわあなんだこりや、これじやまるでほんとにデート……。

には見えないだろうな、この組み合わせじゃあ、姉と弟？ いやご主人様と執事……。

「何考えてるかわかるぞ」

途端、じろりと睨まれてしまい、慌ててキヤラメル風味の甘いやつをすどどっと吸い込む。

「い、いえ、何も。それよりさっきの、僕を加速世界に誘った理由というのを……」

「そんなに急ぐなよ。長い……話になるんだ」

上品な仕草で、あまり甘くなさそうな飲み物に唇をつけてから、黒雪姫は短いため息とともに軽く頬杖をついた。

窓から差し込む淡い黄色の光のなか、その姿は制服の中学生でありながら古い外国映画のワシントンにも見えて、ハルユキは思わず絶句してしまふ。まるで目の前に旧式の投射型スクリーンがあつて、そこから直結ケーブルだけが伸びてきているかのような——。



いつしかぼんやりと見とれていたせいで、突然テーブル上の右手を軽く叩かれて、ハルユキは飛びあがりそうになった。

「ま、さっきは本当によく頑張ったな。改めて、初勝利おめでとう、ハルユキ君」

「はっ……はい、どうも、ありがとうございます。先輩のアドバイスのおかげです」

「いや、キミの即応力あつてのことさ。あの調子なら、すぐにレベル2になれるだろう。あるいは今年中に3まで行けるかもしれない」

「は……はあ……。正直、まだ想像もできないですが……」

愈ういところで一勝をもぎとったばかりなのだ。今後、あんな嬉しい感に何十回も勝たねばならないと言われても果然とするだけだ。

と、悪書説がすつと微笑を消し、ハルユキの胸中を読んだかのように頷いた。

「うむ、実際、想像を絶する長い道のりだよ。総数一千と推定されるバーストリンカーの中でも、その先、レベル4に上がる者は、かなり限られてくる。5、6となるとソロブレイではほぼ到達不可能だ。レベル7、8のバーストリンカーはもう、全てが巨大集団の指揮官クラスと思つて間違いない」

「しゅ、豪団？」

「他のオンラインゲームでもよくあるギルドやチームのようなものだ。我々は、(軍団)……(レギオン)と呼ぶがね。現在の加速世界は、六つの巨大レギオンに分割支配されている。そ

れらを統べるのが、わずか六人のレベル9バーストリンカーたち……青、赤、黄、緑、紫、そして白の名を冠する〈銀色の六王〉だ！」

突然、刃のような鋭さをまとった声が臨内に響き渡り、ハルユキは目を見開いた。視線に気が付いた黒雪姫が、ばちばちと囁きしてから緩く苦笑した。

「……大声を出してすまん」

「いえ……でも、六人、ですか」

バーストリンカーが千人も居ることに驚かされたが、レベル9に達し得た者の少なきにはただ噤然とするしかない。

「僕もいろんなネラトゲームやりましたけど、レベル上限に届いたプレイヤーがたったそれだけなんて聞いたことないですよ」

さぞかし気持ちいいだろうなあ、とのんきな落胆を交えてハルユキは呟いたが、それを聞いた黒雪姫はびくりと片眉を動かし、首を横に振った。

「レベル9が上限だ、なんて私は言っていないぞ」

「え……じゃ、じゃあ、レベル10もいるんですか？ 何人……？」

答えは、再びの査定のジェスチャーだった。黒雪姫はもうひとくちコーヒーを含み、椅子の背もたれをかすかに鳴らして視線を宙に向けた。引っ張られた直結ケーブルが、ふたりの間でさらさらと銀色に揺れる。

「ブレイン・パースト……正式名称（Brain Paste）は、七年前に正体不明の製作者の手によってリリースされ、すでに幾度ものアップダートを終えている。しかしそれだけの時間が経過してなお、レベル10に到達したパーストリンカーは一人もいない。理由はひとえに……課せられたルールの過酷さ故、だ」

「対戦に、ものすごく勝たないといけないんですか？ 千勝とか……一万くらい？」

「いや、たったの五回でいい」

意外な言葉を口にした特に、一瞬、とこか嘲笑を笑みがよぎった。

「ただしその相手は、同じレベル9リンカーに限られる。そして、レベル9同士の戦いにもし一度でも負ければ、その瞬間全てのポイントを喪失し、ブレイン・パーストを強制アンインストールされる……」

絶句したハルユキに、黒髪姫は開色の瞳をまっすやに向けてきた。

「ハルユキ君、念考の加速などという驚異的現象を可能とするブレイン・パーストが、なぜ七年ものあいだ一般社会に秘匿され続け得たのか、不思議だとは思わないか？」

突然の問いにハルユキは途惑ったが、言われてみれば、それは大いに奇妙な話だ。パーストリンカーが一千人もいるなら、とっくの昔にどこからか秘密が漏れ、世間を驚愕させていてもいいはずではないか。

「そうさせているのは、ブレイン・パースト適性者となるための条件の厳しさなのだ」

「条件……？ ゲームがうまい、とか……？」

ハルユキの問いに、黒雪姫は苦笑で答えた。

「そんな曖昧な話ではないよ。最大の条件は、(生)まれたその直後から量子機械通信端末を當時装着し続けてきたこと」だ。第一世代ニューロシンカーが市販されたのが十五年前……つまり、だ」

一瞬の間を置き、黒雪姫はゆっくりと先を告げた。

「パーストリンカーに大人はいないのだ。最年長の者でもわずか十五歳。ほんの子供さ。子供であるがゆえに、パーストリンカーにいる間はその特権を何(なん)が何でも守ろうとするし、強制アインストールされたあとは大人に何を言っても信じてもらえない」

艶やかな唇に、一瞬ではあるが、皮肉げな笑みが横切る。

「そしてまた、子供ゆえの甘い幻想をも共有している。二年前の夏……幼き王たちは皆、ほとんど同時にレベル9に達した。直後システム・メッセージによりレベル10へと至るための残酷なルールを知った。結果、彼らは血みどろの抗争に突入したか？ ——否だ。王たちが選んだのは、永い停戦だった。先に進むことよりも、自分たちだけの箱庭の維持を優先した。つまり……加速世界をそれぞれのレギオンで分断統治すると定め、領土の不可侵条約を結んだのだ。まったく、茶番もいいところさ。自分たちは、レベル9に達するために無数のリンカーを狩ってきたというのに」

「ごくり、とハルユキは喉を飲んだ、からからに渴いた喉に痛みが走り、溶けかけたキヤラメ  
ルフラッパを大きく吸ってから、おそろおそろ思念を逃る、

「つまり、先輩の目的というのは、その《純色の六王》なちに洗むことなんですか……？」

それを聞いた黒雪姫は、ふっと鋭めいた笑いを浮かべた、

「いや、それはもうやった」

「は……？」

「六王は……かつては《純色の七王》だったんだよ、ライバルでありながら、強い絆で結ばれた、七人の少年少女たちさ。互いに無数の対戦を繰り返し、同じくらい勝ったり負けたりして、しかし一片の憎しみも抱くことはなかった、《黒の王》が皆を裏切り、狩ろうとした、二年前のあの夜まで」

黒の——王、

つまりそのアバターネームには……フラッタの氣が……、

目を見開き、呼吸を止めたハルユキをじっと見つめ、黒雪姫はゆっくり頷いた、

「そう……この私だ、黒の王フラッタ・ロータスは、皆がレペルリに到達したのちにただ一人、和平の選択に異を唱えた。絆も、友情も、敬意も全て棄て去り、七人の総ポイントを賭けた戦いに突入すべしと主張した、そしてそれが退けられると——会議の円卓を、突如の鮮血に染めたのだ」

「な……何を……したんです」

「七人の王が一堂に会した最後の夜……と言っても、もちろんリアルで会っていたのではない。パーストリンカーは、極力現実での顔と名前を隠さねばならないからな」

それは何故、とハルユキは尋ねようとしたが、すぐに理由を察した。顔や名前が他のパーストリンカーに洩れれば、最悪の場合（現実での襲撃）もあり得るからだ。ポイントをとろうしても稼がねばならない状況に迫り詰められた者なら、それくらいのことにはするだろう。

ハルユキの心を読んだように黒雪姫も軽く頷き、続けた。

「その夜の会議は、七人全員が対戦者として同一フィールドに接続できる（バトルロイヤルモード）で行われた。私は……目の前で友情を説き不戦を訴える（赤の王）の不意をつき……」

艶やかな前髪の奥で、白い顔から表情が抜け落ちる。虚無を映す瞳を一点に固定し、黒雪姫はぼつんとその先を告げた。

「首を落とした。完璧なタリテイカルヒット……彼は一瞬で全ゲージを失い、新ルールに従ってポイントも失い、ゆえにブレイン・パーストそのものも喪った。現在の赤の王は二代目さ。そこから先は……まさしく地獄の具現化だったよ、ふふ。赤と急仲だった紫は泣き叫び、青は怒り狂い、そんな彼らと私は名譽も敬意もない殺し合いを演じた。最初で最後の機会だと解っていたからね……なんとかあと四人の首を取ろうと死に物狂いになったが、さすがに無謀だったな……」

色の薄い唇が歪み、肉声の笑いがくつ、くつ、と細れた。

「理性的判断力なんてものは消し飛んでいた、狂気に働き動かされるまま私は戦い、しかしそれ以上一人も持れず、だが斃されることもなく、気付けば三十分が過ぎてリンクアウトしていた。——以来二年、ひたすら逃げ隠れているというわけさ。いまの私は、加速世界最大の裏切り者であり、最高の資金首であり、最低の臆病者だ」

「……なんて……」

独白のあまりの凄惨さにハルユキの思考は半ば麻痺し、単純な疑問だけか意識から放たれた。

「なんでそんなことを……?」

「友情より、名誉より、運かに優先されるからだ……レベル10になることが、私はそのためだけに生きているとすら言っている。——システムメッセージは、こうも告げていたんだよ。レベル10に達したパーストリンカーは、プログラム製作者と邂逅し、プレイン・パーストが存在する本当の意味と、その目指す究極を知らされるだろう、と。私は……知りたい。どうしても知りたいのだ」

テーブルに両肘を突き、握り締めた両手に顔を隠した黒雪姫は、無限の深淵から響いてくるような重苦しい思惑でハルユキに囁いた。

「思考を加速し、カネや、成績や、名声を手に入れる。本当にそんなものが我々の戦う意味であり、求める報酬であり、達し得る限界なのか? もっと……もっと先があるんじゃないのか

「……？ この……人間という體の……外側に……もつと……」

ああ――

少し、ほんの少しだけけど……解る。耐え難い（地上）から、温か遠い（空）を仰ぎ見る、そのカンジ。

まるで劇中の思考までもが伝わったかのように、黒雪姫はゆらりと顔を上げ、切迫した光を浮かべた面の瞳でハルユキを見つめた。

しかしそれも一瞬のことと、両腕をばたんとテーブルに倒した美貌の上級生は、乾いた笑みを浮かべて呟いた。

「……どうだ、呆れたか……それとも軽蔑したかな、ハルユキ君。私は、私の目的のためなら、いつかキミすらも犠牲にするかもしれない。これ以上協力はできない、というなら、それでも構わんよ。引きとめはしないし、キミのブレイン・バーストを奪いもしない」

ハルユキは、二秒ほど考えてから――

おずおずと右手を伸ばし、黒雪姫の指先から一センチほど手前で止めて、言った。

「あの、ですね……。そんなゲームでも、エンディングを見るのを放棄して、その直前のマップを永遠にうろつきたいなんて奴がもしいたら、そいつはただのアホです。上のレベルがあるなら目指すのは当然……だって、そのためにブレイン・バーストは存在するんでしょ」

黒雪姫におもねるための嘘ではなかった。物心つく頃からの筋金入りのゲーマーとして、ハ



ルユキは心の底から、真剣にそう思ったのだ。

黒雪姫は一瞬きょとんと目を丸くし、数秒後、小さく吹き出すように笑った。

「ふ、あはは……。何てことだ、キミはすてにして私よりもバーストリンカーだな。なるほどな……目指して当然、そう来たか……」

「わ……。笑うとこじやないです」

少しばかり傷つき、唇を失らせてから、ハルユキは背筋を伸ばして続けた。

「と、ともかく、だから僕はこれから先輩の手助けをしますよ。僕だって、いつかなりたいですし……レベル10に」

突然、車上の黒雪姫の左手が動き、ぎゅっとハルユキの右手を握った。

「ありがとう」

泡を食うハルユキに、先刻までの虚ろな機嫌の失せた黒雪姫の思念が、暖かく注がれた。

「ありがとう、ハルユキ君。やはり……。私の決断は間違ってたなかった、キミを選んでよかったと、心から思うよ」

ここで、手を握り返し、瞳を見つめ合わせる——というような真似は、しかしハルユキには到底できないことだった。

そのかわりに、反射的に右手を引っ込め、危ないように首を縮めて、ハルユキは委縮した思考言声でも二もこと言った。

「い、いえ、そんな……僕なんてどうせ、ろくに使えやしないですから……。さ、それより、早く本題っていうか、その……僕は何をすればいいんです……。」

短い沈黙のなか、じつと向けられる瞳に浮かぶのは、懐れみだろうか。

やがて、密やかなため息に続いて、黒雪姫は静かに言葉を発した。

「そうだな。ずいぶん前置きが長くなってしまったが……本題に入ろう。先ほど私は、二年間生きのびている、と言ったな？」

ハルニキも、溜めていた息を大きく吐き出しながら顔を上げ、冷静な表情に戻った黒雪姫にこっくりと頷いた。

「それは、怒り狂った王たち自身の、あるいは差し向けられる刺客の挑戦に勝ち抜いてきた、という意味ではない。そうではなく……私はこの二年間、一度たりともニューロリンカーをドローバルネットに接続していないのだ。マツチングリストに登録されなければ、挑戦も何もあつたもんじやないだろう？」

「げっ……ま……マジですか」

思わず呻いてしまう。ハルニキにとって、ドローバルネットから情報を摂取するのは、水を飲み空気を吸うに等しい必須活動なのだ。それを断たれたら、比喩でなく枯死してしまうかも。「大マジき。別に、固定パネル端末でもサイトは閲覧できるしメールも読めるからな。2D画面は眼が疲れるけどな。慣れればどうということもない……」だが、ドローバルネットは遮断

できて、私は私の社会的身分ゆえに、どうしても毎日接続せねばならないネットがひとつだけあるのだ」

「み、身分……？ つまりお嬢様……いやお嬢様？」

「バカモノ」

冷たい声で否定されてから、ようやくこの人も同じ中学生だったのだと思に至る。

「あ、ああ……そうか、梅郷中の学内ローカルネットですね。……って……え、ちよ、ちよと待ってください。まさか……」

「そのまさかだ」

黒書姫はぐいっとコーヒを飲み干し、そのカップを握り潰した。

「二ヶ月前、夏休みが終わったその日、私は校内でローカルネットを通じて〈対戦〉を挑まれた、同じ梅郷中の誰かにな」

唖然としたハルヒを、続く言葉がさらに驚愕させた。

「そして、最悪なことに……その時点で私は本来のデュエルバターを、観戦用のダミーバターへと変更していた」

「ダミー……そんな機能があるんですか？」

「うむ、正体を隠してギョラリしたい場合も多々あるからな。ただ、当然ダミーバターに戦闘力は皆無だ。しかし問題はそこではなく……今にして思えばうかつの極みだが、私は、ダ

ミーに、学内ローカルネット用のアバターを盗用していたのだ。よみや、同じ学校にバーストランカーが交加出現するなどは予想もしていなかったのですね……」

「……間違ってますから、ハルユキはがタンと椅子を鳴らして軽く飛び上がった。」

「え……それって、あの黒揚羽蝶の……？」

脳裏に映し出された妖艶なアバターが、目の前の楚々とした制服姿にびたりと重なる。

「あれを、敵に見られた……学内ネットで……？　てことは……という、ことは……」

「察がいいな。そうだ、彼奴は、この私が……」

黒雪姫はカッパをトレイに放り出し、右手でぐっと胸元を押さえた。

「この現実の私が、『フラック・ロークス』であると知ってしまった。バーストランカー最大の禁忌、〈リアル割れ〉さ。私は、六王の刺客による現実での襲撃を恐れた」

現実での……襲撃。

ハルユキはすでに、その言葉に秘められた恐ろしさを推測していた。もし現実での身元を突き止めることができれば、極論、投獄・投獄・投獄・投獄してポイントを損こそぎ奪い取ることも可能なのだ。

もちろん重犯罪ではある。だが、〈普通のゲーム〉ですら、プレイヤー同士のトラブルから現実での殺傷事件に発展することもない話ではない。そして〈ブレイン・バースト〉は、ただのゲームではない。

ハルユキは息を詰めて黒雪姫の説明の続きを待った。しかし――。

「なのに……なかったのだ、何も、襲撃どころか、接触の気配すら」

「よ……う」

「私も大いに途惑ったが……となると、こう考えるよりない。敵は……独り占めする気なのだ。リアル観れたのを幸い、大物資金首である私をしわじわと追い詰め、所属レゾオンには知らせずにポイントを全て自分だけで狩り尽くす気なんだよ」

「追い詰める……？」

首を傾げたハルユキをじろりと見て、黒雪姫は吸払いし、やけっぱちのように列挙した。

「トイレ中、着替え中、シャワー中、学校内でも精神的に無防備な瞬間は山ほどある。そこをピンポイントで狙って対戦を挑まれば、とても万全な戦略はできん」

「シヤ……わー、ちゅう」

思わず全てのシーンを想像してしまい、声を返らせたハルユキに再び冷たい一瞥が浴びせられる。が、幸いそれ以上の追及はなく、ため息混じりの言葉が続いた。

「実際、この二ヶ月で私は十回以上も数ひとりに襲われている。今のところ露骨なタイミングばかりではないゆえ、どうにかドロ―で逃げ切っているがな」

「な……なるほど。何と言うか、随分とまあ強欲な奴ですね……。でも、ある意味不幸中の幸いと言うか……」



「まあ、現実での襲撃に比べれば、な。だが、そうなればなつたて、私もダメーから本来のデュエルパートナーに戻って奴を叩きのめすというわけにはいかん。敵にこれはムリだなと思わせてしまえば、私のポイントを増め、王たちが私の首に掛けているけちな戦費ポイントで手を打つかもしれんからな……」

「あ、ああ……そうか……うーん」

ハルユキは思わず唖った。八方ふさがりとはまさにこのことだ。

「じゃあ、でも、どうすりゃいいんです？ 逃げられないし、返り討ちにもできないなんて」「知れたことだ。打開策はたつた一つしかない。こちらも、奴のリアルを割るのだ。いったい何年何組のどいつが、私の知らないバーストランカーなのか」

ぼん。と膝を打ちたい気分、ハルユキは腰われた。互いが相手の身元を把握している状況なら、それぞれのバーストを守るために、絶対に停戦せざるを得ないのだ。

「そうか、そうですね。それができれば、敵の動きは完全に封じられる。ていうか……それ、けっこう簡単じゃないです？ たとえば朝礼とかで、全生徒が講堂に集まってるとき、加速して対戦を挑めばいいんだ。相手が出現した場所から、クラスと出席番号は割り出せる」

「ほう、大したものだ。私がそのヲを思いつくのには、丸一日かかったぞ」

「……てことは……もうやっただんですか？」

「やっただとも。そして……愕然とした。あんなに驚いたのは久々のことだったよ」

「だ……誰だったんです……？」

「居なかった」

黒雪姫は、ハルユキが予想だになかった答えを口にした。

「マッチン・ダリストには、私の名前しかなかったのだ。いいか、キミも知ってのとおり、梅郷中の生徒は、学内に居るあいだは一瞬たりともローカルネットから切離することは許されていない。出席確認や、授業自体もそのネット経由で行われるからな。もし切ろうものなら、即座に全校放送で警告される。それゆえに私も、敵の襲撃を遮断できないのだ。なのに……奴はリストに居なかった！」

「か、風邪で学校休んでたとか」

じろっとハルユキを見つめ、黒雪姫は軽く鼻を鳴らした。

「その日欠席した者が全員登校している日に確認したき。それどころか、襲撃され、辛くもドロイで逃げ切った直後にすら、リストに奴の名はなかった。つまり……信じがたいことだが、奴はプロクタできるんだよ、何らかの手段でな。自分からは好き放題対戦を挑めるが、他のパーストリンカーからは一切乱入されない。加速世界の大原則を根柢から吹き飛ばす、すきまじい特権だ。そんな事ができるのは……難攻不落であるはずのブレイン・パースト・プログラム本体の改竄に成功するほどの超ハッカーか、あるいは——プログラム製作者その人と接点がある者……」



製作者と返り合い、ブレイン・バーストの《意味》を知ることだけが生きる目的。黒雪姫は、さいぜんそう言った、ならば、その謎の敵の正体を見破ることは、この人にとっては保身以上の重大事なのだ。

そう察したハルユキは、原因不明の疼きを胸のおくに感じながら、そっと呟いた。

「……つまり……先輩が、僕にさせたい事って言うのは……その敵の正体突き止める手助け、なんですわね」

悪魔からお姫様を護る騎士の役ではなく、

いや……当然じゃないか。馬鹿なことを考えるな。僕は僕を追う強大、あるいは土中のキノコを喰うてる豚なんだ。

「ん……、まあ、そういうことだ」

ハルユキの刹那の葛藤に気付いたようもなく、黒雪姫は小さく頷いた。

「実のところ、すでにかんがりの情報は得ている。今解っていることを列挙するとだな……まず、敵の名前。奴のデュエルアバターは、《シアン・バイル》と言う。レベルは4」

「シアン……バイル……」

かなり——かつこい。それに強そうだ。いや、レベル4というのは最初の壁だと黒雪姫も言っていた。つまり実戦、強いのだ。

「属性は、かなり純粋な《近接の責》だ。ステージの固い壁をパンチでぶち抜くのを何度も見

たからな、翻<sup>ひるがえ</sup>って飛び道具はないようだ。だから私も今のところどうにか逃げ切れているのだが……正直、そろそろ限界だ、こちらの集中力が持たない」

それは、そうだろう。登校から下校までのどの瞬間<sup>ときどき</sup>に襲<sup>おそ</sup>われるか判<sup>わ</sup>らない、などという状況は、ハルユキには恐らく三日と耐えられない。しかし思<sup>おも</sup>い直<sup>ただ</sup>せば、疲労の影すらない明晰<sup>めいし</sup>な思考で、言葉を続けた。

「さらに、これはあくまで推測なのだが……どうも、私だけではなく奴も追いつめられている、そんな気配<sup>きはい</sup>がする」

「え……何に、ですか？」

「加速<sup>かすう</sup>を喪<sup>なく</sup>う恐怖に、奴はおそらく、バーストポイント枯<sup>かわ</sup>れの危機<sup>き</sup>に瀕<sup>ひん</sup>しているのだ。ポイントに余裕のある者は、ふつうもっと対戦<sup>たいせん</sup>を対戦<sup>たいせん</sup>として楽しもうとするものだ。キミが戦ったアソシュ・ローラーのように」

「あ、ああ……確かに、あいつはえらい楽しんできましたけどね……」

「しかし、シアン・バイルにその余裕は微塵<sup>かみじ</sup>もない。無<sup>む</sup>資<sup>し</sup>で、なりふり構<sup>か</sup>わず、ほとんど狂<sup>くる</sup>乱<sup>らん</sup>の体<sup>てい</sup>で私を追ってくる。あの気配<sup>きはい</sup>は、喪失<sup>そうしつ</sup>の恐怖<sup>こふ</sup>に怯<sup>おそ</sup>えるバーストリンカーに特有のものさ。王<sup>おう</sup>たちが私に掛けているケチな賞金<sup>しょうきん</sup>では足りず、私が蓄積<sup>ちくじく</sup>したポイント全てを欲<sup>ほ</sup>するくらいだからな。……ま、だからどうだという話でもないが……」

「そう……ですね。まさか、余生<sup>よせい</sup>徒<sup>た</sup>にメンタルチュックを受けさせるわけにも行きませんし。

何ってることっていうのは、それだけですか？」

何気なくハルユキはそう尋ねた——のだが、

不意に、黒雪姫の思考が微妙に強張った、ような気がした。はて、と思ったが、疑問を口にするより早く、黒雪姫がかぶりを振って言った。

「いや、もうひとつ、重大な情報がある。……ガイドカーソルだ」

「へ？ あ、水色の矢印ですか？」

「そうだ。あれは、対戦開始直後から、敵の居る方向を指し示している。つまり……だな、シアン・バイルが出現する瞬間を見ることができなくても、開始時のカーソルの方向を記憶しておけば、その直線軌道上のどこかに生身の敵が存在する……という理屈なのだ」

「あっ……ああ！ そうか、そうですね。ステージは現実の地形そのままだから、校舎のどの方向にそいつが隠れてるか、までは判るんだ！」

「その通りだ。私は、これまでの十数回の襲撃のたびにガイドカーソルの方向を記憶し、現実の構内においてその方向に居た生徒たちをリストアップして、重複する名前を抽出した。結果、ある生徒が最もシアン・バイルである可能性が高いと推測するに到った。だが、それは決して確たる証拠ではない。あれほど高密度に人間がひしめいている場所で、直線が一本では足りないのだ。その軌道上には常に数十人もの生徒が居るのだから。……ハルユキ君、私がキミにしてほしいのは、次の私への襲撃を自動観戦し、シアン・バイルを示すギャラー用カ

「ソルの方向を記憶することなんだ」

「カーソルが……二本、あれば……」

呆然と呟いたハルユキに向かって、黒雪姫は尚も鋭い表情のまま頷いた。

「そう、二本あれば、その交差する座標を一点に絞り込める。そして、その場所にこの生徒が居れば……文句なしに確定する。シアン・パイルの正体が、な」

きゅつと唇を噛み、黒雪姫はすばやく右手指を宙に走らせて、彼女だけに見える仮想デスクトップを操作した。呼び出した一枚のファイルを、ハルユキに向かって滑らせる――その寸前、しかし、指の動きがぴたりと止まった。

「……う？ どうしたんです？ 誰なんですか、その候補っていうのは？」

掻き立てられた興味のせいで、巨大なフラッグペを飲み干した直後なのにもかかわらず、しまった喉をぐびりと動かしながら、ハルユキは身を乗り出した。

黒雪姫は尚も逡巡する様子だったが、やがて、まるで言い訳するように呟きつつファイルを弾いて寄越した。

「いいか……私がそのファイルを用意したのは、散々捜し求めた梅郷中三人目の加速憑件者、つまりキミをあのだゲームコーナーで見出したのより一週間も前なんだからな」

なぜそんな断りを入れるのかまったく分からず、ハルユキは唇を寄せながらファイルを受信した。仮想デスクトップに表示されたアイコンを、指先でためらいもせず叩く。

聞いたのは、一枚の画像だった。おそらく学務簿から流用したのであろう、バストアップの正面顔がそこに映っている。

「……………？ あれ……………？ なん……………」

勢い良く切り揃えられたショートヘア。青いヘアピン。どこか猫っぽい大きな眼。

見覚えのある——どころではない。母親を除けば世界で最も長く見てきた顔がそこにあった。

「す……………チユリ？ あいつが……………バーストリンカー……………」

呟き、たっぷり五秒以上も放心してから、ハルユキは箸を食って星雪姫に向き直った。

「いや……………あり得ないですよ！ あいつ、ゲームとかものっすこいヘタクソなんです。ジャンル調あずダメダメで……………バーストリンカーの適性なんかあるわけないです。とんくちいし……………」

何ても顔に出るし……………その、先輩をしつこく付け狙ったりとか、そういう奴じゃないんです」

「よく知ってるんだな」

はんの少しだけ硬さを増した声で、星雪姫は視線を合わせずに言った。

「それは……………まあ、姑願望ですし……………」

「さっき校門で彼女が接触してきたときは、私も内心驚いた、もし彼女が（シアン・パイタ）なら、当然私が（フラクタ・ロータス）だと知っているはずだから、何かの作戦かと疑ったが……………」

「あの、ですから、そんな腹芸みたいなことできるほど器用じゃないですあいつ。というか物

「悪い不器用で、思つてゐること全部顔と態度に出るんです」

ハルユキが拭弁すればするほど、なぜか両肩を鋭角に持ち上げながら、黒雲殿は一層冷ややかな声を返してくる。

「それならばむしろ、彼女こそが（シアン・バイル）だと思えたほうが自然とも思えるが？ 彼女……倉嶋君の、私に対する明確な敵意はキミも見ただろう」

「いや、あれはその、そういうんじゃないで、僕が先輩と、その、直結したりなんだりしたから……」

「なぜそれを彼女に怒られなきゃならないんだ？ 倉嶋君にはれっきとした彼氏がいるんだろ？ なら、私がハルユキ君と直結しようが腕を組もうが文句を言われる義理はなかろうが」

「……そ……それは……そうなんですが……」

なんてこんな流れになつちやつたんだ、と頭を抱えたい気分てハルユキはへどもと口籠つた。チユリには確かにタタムという井の打ち所のない彼氏がいるが、それとは別に、その——なんだ——僕は、あいつの——

手下？ 所有物？ 既得占有物件？

ちよつと口に出す気にはならない単語がいくつか脳裏を横切り、そのへんのニュアンスをどう説明したものかと苦悩するハルユキに、黒雲殿の容赦ない追い討ちが浴びせられた。

「つまりあの態度はこういうことじゃないのか？ 倉嶋君は以前からパーストリンカーで、い

ずればキミを（子）にしようと思っていた、なのに私が突然機から揺つ揺つてしまった。そこで、怒り心頭辛抱堪らず私に突っかかってきた、どうだ？」

理詰めのように無理のある理屈を、どこか駄々っ子のような口調で展開する黒雪姫の心理もさっぱり理解できず、気付いたときにはハルユキは勢いに任せて宣言していた。

「わ……わかりました！　なら、僕が直接確かめてきます！」

「ほう？」

片眉をびくりと動かし、黒雪姫は燦（きらめ）かな声を出した。

「だが、具体的にどうする気だ？　面と向かってバーストリンカーなのか、などと訊くわけに行かないことくらいはもう理解していると思うが。」と云って、自在に対戦をプロツタである（シアン・パイル）に、相手を視認しながら加速・挑戦するという平は適用しないぞ、そもそも、こちらから確かめる方法がないからこそ私はこれまで散々苦勞してきたんじゃないか、思いつきでいい加減なことを言ってもらつては困る」

「あ、思いつきじゃないですよ！」

先き言葉に買い言葉的背馳（そくし）反射を止めることができず、ハルユキも口を尖らせて言い返した。「いいですよ、僕、あいつと直結してきます。対戦はプロツタされても、直結状態でニューロリンカーのメモリを見ればブレイン・バースト・プログラムの有無は確認できるはずですよ。それなら先輩も納得してくれそうですよね」

——なんて、どうして。

憤怒と剣を落とし、夕暮れの歩道をとばとば自宅に向かいながら、ハルユキはその一言を何度か脳内でリビートしていた。

なんてあんな展開になってしまったんだ。

僕は、黒雪姫先輩の忠告なる駒になることだけを望んでいたはずなのに、どうしてあんな口げんかみたいな応酬をした挙句、店を飛び出すように帰ってしまっただろう。

頼むから三十分だけ時間を巻き戻してくれ目とハルユキは痛切に願ったが、現実時間をほぼ停止できるブレイン・バーストにもそれだけは不可能だ。

もっとも、たとえADVゲームのごとくあの場面をロードできたとしても、今度はチユリ（ヘンアン・バイル）説に素直に同意できるかというやはり難しい気がするのだった。ハルユキにはどうしても、チユリがバーストリンカーでありしかもそれを長い間隠していたのだ、などということがあり得ると思えない。

いや——思えないのではなく、信じたくない、のだろうか。

正直なところ、客観的な確証などというものは無い。幼い頃ならまだしも、ここ一、二年は



チユリと長時間会話をしたことすらないのだ。黒雪姫はとてはないにせよ、チユリも女の子であるという時点でハルユキにとつては充分すぎるほど調べいた存在だ。

それに、隠し事はしないということの反証すらあると言えはある。チユリは、ハルユキがみんなに頼んだにもかかわらず、イジメの件をタタムに相談し、それを隠していたのだから。

考えてみれば、直結させてくれ、などと物騒なお願いをする前に、少なくともサンドイッチ叩き落とし事件を隠らねばならない。そして調べるためには、チユリとタタムが、ハルユキについてあれこれ話し合つたのだという事実を受け入れ吞み込まねばならない。

そんなの軽く一週間はかかる。というか考えたくない。もういつか、確認なんてやめてはつとくか。でももしたら、チユリ（ヘシアン・バイル）説のほうを受け入れないといけない。

一体僕は何をどうしたいんだ。チユリと、タタムと、そして黒雪姫とどうなりたいんだ。

過負荷で焦げ臭い煙を上げる思考を持て余しながら、ハルユキは重い足取りで自宅マンションのエントランスをくぐつた。

ちらり、と視界の端の時表示を眺める。午後五時半。

チユリはもう帰宅しているが、剣道部の練習があるタタムはまだ学校だろう。だから、二人がどちらかの家に居たりブライベートチャットしてたりということはない。

エレベーターの箱のなかで、ハルユキは警告音が鳴るまでたっぶり待機した。

そして、自宅のある二十三階のボタンを押した。

箱が半分ほど上昇してから、その二つ下のボタンを押した。

「あらあーハルちゃん、久しぶりじゃないの!!」

ドアを開けた途端、満開の笑顔でそう叫んだチユリの母親に、ハルユキはドウモゴブサタシテマス、ともぐもぐ挨拶した。

「まあーずいぶん大きくなって、機つになるんだっけ、って十二よねチユと同じなんだから、中学に上がってからぜんぜん遊びにきてくれないんだから、おばさん寂しかったわあー、今日はゆっくりにしていけるんてしょ? 晩飯食べていきなさいよ、うちの子は最近ちょびーっとなか食べないもんだから作り中絶がなくて、そうだ、今日はちようどハルちゃんの好きなカレーにしようと思つてたのよ、たくさん作るからいっぱいお代わりしてね、チユも喜ぶわよ、あの子さいきんハルちゃんが通んでくれないって不機嫌なのよおー」

無限に続きそうなチユリ母のお喋りをぶったぎったのは、廊下の奥から響いた鋭い声だった。「ママ!!」

見ると、リビングから首だけ出したチユリが、烈火の形相でこちらを睨んでいる。

「余計なこと言わなくていいの!!」

「はいはい、やあねえ反抗期って、ハルちゃん、ゆっくりにしていつてね」

にこにこ手を振りながら、廊下の途中にあるドアからキツチンへと引っ込んだチユリママを

見送り、ハルユキは改めて強張った笑顔を浮かべた。

「……お、おす」

「……………」

じろーりと一瞥（ひとく）くれたチユリは、小さなあご先をくいっと「上がれば？」的に動かし、リビンダに消えた。詰めていた息をふううっと吐き出し、靴を脱ぐと、ハルユキはそっと呟（ささや）いた。

「……おじやまします」

昔は——小学三、四年の頃までは「ただいま」と言っていた、外でチユリ、タタムと一緒に暗くなるまで遊んで、汗まみれになって帰ってくるのはまずこの倉輪家（くらわが）だったのだ。お風呂に入って、晩御飯をこちそうになり、テレビまで見てからとぼとぼと二フロア上の無人の自宅に戻った。当時すでに学校でイジメられていたハルユキにとって、その夕刻のひとときだけが楽しいと思える時間だった。

しかしそれも二年前に終わった。

タタムがチユリに告白し、そのことをチユリがハルユキに相談したあのときに。

上り框（かまち）のスリッパ立てには、まだハルユキ用の青いタマの顔がついたやつが残っていた。色あせたそれに足を通し、リビンダのドアをおさるおさる開けたが、中にチユリの姿はなかった。汗の滲む掌（てのひら）を制服のズボンで拭（ぬぐ）り、勝手知ったる間取りを迷走していちばん奥にあるチユリの部屋のドアをそうつとノックする。

「……………どーぞ」

しばしのタメのあと、短い返事が聞こえた。ごくうと喉を動かしてから、ハルユキはノブを回した。

二年ぶりに訪れるチユリの部屋は、記憶にあるのとあまり変わらずシンプルな内装のままだった。机やベッドは白と黒基調、カーテンもモノトーンでハルユキの部屋によく似ている。

しかし、いくつか変わったものもあった。まず、なんだかやたらといい匂い（におい）がする。そして、ぶすつとした顔でベッドに腰掛けるチユリの服装も。

もちろんもう制服ではない。しかし、小学校の頃はボーイッシュな格好ばかりしていたチユリが、今は何たることもか白いふわふわしたニットにピンタのひらひらしたスカート（スカート）を穿（は）いた。

そりやあまあなあ……タタムとデザートだつてするんだろうしなあ……などとぼけーつと考えていたハルユキに、思いがけない先制攻撃（せんせいこうげき）が加えられた。

「あたし、昨日なんどもコールしたんだからね」

「へっ……………」

じあり、と下方から壁（かべ）まれ、ハルユキは開（ひら）けな声を出した。

昨日は——そうか、チユリとタタムの前から走って逃げてそれっきりだったのか。うへー、サンドイッチ事件の前にもずそれを謝らないとじやないか。

「あ、ああ、わり……昨日はずっとニューロリンカーを切斷してたから……」

「メールくらい送らせてくれてもいいじゃない。おかげで寝るのがすごい遅くなっちゃったんだからねー」

「……………ゴメン……………」

ぶうーっと頬を彫らませるチユリに謝りながら、ハルユキはやっぱないよ、と内心で呟いた。どう考えてもそれだけはない。こいつがパーストリンカー（シアン・パイル）で、しかもレベル4のツワモノだなんて、その上、誰も成功していないブレイン・パースト・プログラムの改変に成功した超ハッカーだなんて！

しかし、とは言えその確証を得るのは簡単ではない。調査中に宣言したと知り、ニューロリンカー同士を直結してのメモリ領域サーチだけが唯一の手段だが、しかしこの状況でどう言えばそんなことを頼めるといふのだ。

いや——待て待て。

突然脳裏に閃いた思いつきに、ハルユキは素早く飛びついた。

こんな状況だからこそ頼めるんじゃないか？ チユリには申し訳ないが——いや、別に大丈夫じゃない。誠心誠意謝りつつ、それと同時に進行でちよちよつとメモリを……。

「あ、あ、あああの、チチ、チユリー」

演技でなく濃しくつつかえながら、ハルユキは叫んだ。

「な……何よ？」

「その……、お、オレ、色々と……サンドイッチのこととか、校門のこととか、あ、謝りにきたんだ。で、でもその、オレ、この手のこと口で言うの苦手だから、その……でも、ちち、ちよつ、直結させてくれ」

演技でなく顔に汗を浮かせたハルユキの顔を、チユリはぼかんと鼻を閉いて眺めた。太めの眉毛の角度が、驚きから誇しさを通過してさらに上昇していく。

ダメか、そりやあ唐突すぎるよなあ。とハルユキが怒鳴られるのを覚悟したとき、幼馴染の顔に妙な挑戦的な色が浮かんだ。あれは——昔のチユリが、男の子とケンカするときよく見せた、やれるもんならやってみろの顔だ。

「……ケーブル持ってきたの？」

硬い声で突然そう訊かれ、ハルユキはしまったと思いながら首を横に振った。

「あ……も、持っていない」

「ふーん。言っとくけど、あたしコレしか持っていないよ」

身をかめ、ベッドの下の物入れを開けたチユリが取り出したのは、棒が三十センチほどしかないオフホワイトのXS Bケーブルだった。

「み、短つ。おまえ……いつもそれでタタと……」

思わず尋ねると、途端に怒鳴られる。

「ばつ、バカじゃないの!! タツくんは一メートルのやつ持ってるもん、これはニューロリン

カー買ったとき付属してきた、PC接続用のやつ!!」

「あ……ああ……」

超高速通信規格であるエクストラ・リアル・バスは、嚴重にシールドされた高品位ケーブルを要求するために、機器のオマケに付いてくるやつは例外なく短い。しかしそれにしても三十センチはあんまりじゃないか。ずいぶんケチなメーカーだ。

過剰的思考をめぐらせるハルユキに、猫のしっぽほどのケーブルをひょいっと放ってきたチユリは、軽く鼻を鳴らすとベッドに小さな体を転がした。

「したけりやすれば」

おいっ、と目を閉じ、顔を逸らせてしまう。

手中のケーブルを、焼けた針金のように持て余しながら、ハルユキはおずおずと言った。

「あ、あの……できたらその、椅子に座って、後ろを向いてくれないかなーって……」

返事はない。シートの上で大の字になったまま、チユリはテコでも動く気はないらしい。

うーん、走って逃げようかな、とかなり真剣に考えたが、今日はもう悪雪殿の前でそれをやっってしまったている。ここでもまた逃げたら、もう事態は修復不可能にこんぐらかってしまう。

「……………じゃ、じゃあ…………」

意を決し、ハルユキはチユリの横たわるベッドにすり足で近づくと、スリッパを脱いだ。

そう——つと、片足を白とグレーのストライプのシートに乗せる。

ざししつ、と煩々するようなパイプフレームが、首段の數倍の加重に軋み育て抗議する。

四つんばいで、チユリの右七センチにまで接近したハルユキは、まずケーブルのブラダの片方を自分のニューロリンカーの右後ろにある外部接続端子に挿した。

そして、首を不自然な角度に傾け、もう一方のブラダを挿んで一杯に伸ばす。しかし、目を閉じて横たわるチユリのニューロリンカーの端子までは、まだ一光年はとにも遠い。

うげええしまった、左から接近すべきだった、いったん引込んで再度アプローチするか、いやもうそんな心理的余裕はない、と言ってチユリの上を横切って向こうに行くのも絶対ムリ。九割がたバニッタに陥ったハルユキは、バランス的に非常に危うい姿勢で上体だけを傾け、無理やりに互いの首を接近させた。チユリの体から、ミルクのような甘い匂いが漂い、平衡感覚が怪しくなる――。

直後、ずるつと左膝が滑った。巨体でチユリの相身をプレスしてしまふその寸前、伸ばした左手が危うく胸に合い、落下が止まる。

とは言え状況はクライシス寸前だった。左膝は、放り出されたチユリの両脚のあいだ、左平はチユリの右頬のすぐ横に接地し、危ういところで体を支えている。うおおおおああなんだこの状況おおおおとバニッタメーターの針がレッドゾーンを振り切ったその時、十センチの至近距離にあるチユリの臉がぱちつと聞いた。

大きな茶色の瞳に浮かぶ感情を、ハルユキは読み取れなかった。怒り、苛立ちはもちろんあ





る。だがそれは、現在のハルユキの不埒な所業に關してというよりも——なんだか、随分長い間押し殺し殺けてきたかのような——。

それ以上目と目を見交わしているのに耐えられず、ハルユキは右手を動かすと、チユリの首にブラダを差し込んだ。出現したワイヤードコネクト警告が、一瞬チユリの顔を隠した。

——その獅子は、わずか一秒ほどのことではなかったが、それでもハルユキはどうにか思考を立て直すことに成功した。

数回瞬きし、視線をチユリの喉から外して、白いニットの襟ぐりから覗く細い鎖骨のあたりに固定する。

「あの……、おい……一昨日のこと、謝らなくちゃって思ってたんだ」

思考発声でつぶつた言葉は、どこにもなくはあるもののつかえることなく一人の聴覚に響いた。

「その、せっかく作ってきたお弁当、台無しにしちゃって……ほんと、ごめん」

真剣にそう謝りつつも――。

ハルユキは、チユリの視界外の右手指先を動かし、ストレージアイコンを開いた。

現実のチユリの顔に半分ほど重なって開いたウィンドウには、自分のニューロリンカーの物理メモリ領域を示すフォルダの横に、チユリのID名がついたフォルダもある。

この時点で、チユリ（シアン・バイル）であるという可能性はもう限りなくゼロに近づい

たと言つていい。もしそうならば、チユリはすでにハルユキが黒雪姫の手下こと（シルバー・タロウ）であるを知っているはずで、そもそも直結など許すはずもないからだ。

それとも——わざわざベッドに横になったのは、ハルユキに自分から直結を思いつとまらせる作戦なのだろうか。いまチユリは、内心では驚き慌てているのだろうか。

十年束の付き合ひの幼馴染（幼馴染）あいてにそんなふうに動揺（動揺）つてしまう自分に、低詫（ひげ）たるものを感（かん）じながらハルユキはそつとチユリのニューロシンカーの物理メモリフォルダにカーソルを合わせた。

『でも……でも、オレ、ちよつとだけシロツクだったんだ』

後（のち）めたるを上書きするためか、思考からそんな言葉（ことば）が湧（わ）き出てくる。

「チユリとタタが、その……あいつらのこと話し合つたの想像（さく）したら、いてもたってもいられなくて……。オレのために、いろいろ考えてくれたんだってわかつてるけど……。でもオレ……」

——僕は、チユリとタタムにだけは隠（かく）れまれないんだ。友達（ともだち）だからこそ——せめて三人のあいだでだけは、同じ場所に立（た）つていたいんだ。

たぶんもう、平達（へいた）れなのだろうけれど。

ハルユキはぐつと指先（さき）に力を込め、フォルダをタリツタした。

ぱつと色の違う半透明（はんめい）ウインドウが開いたのと同時に、頭（かぶ）と肩（かた）の両方にチユリの声（こゑ）が響（ひび）いた。

「ハル……誤解（ごかい）してるよ」

不器用なチユリは、いまだに思考発声ができないらしい。ハルユキの目の前にある小さな格が動き、さらに言葉が続いた。

「あたし、タツくんには何も言っていない。言うわけないじゃない、黙ってるって約束したんだもん。サンドイッチのことタツくんが知ってたのは、この開剣道の大会に行ったとき、こんどハルにも作ってあげようかなって話しただけ」

「え……」

ウインドウを確認しようとしていた視線を、ハルユキは悪わずチユリの瞳に合わせた。不意に勝気な目元が和らぎ、どこか昔を懐かしむように睫毛が伏せられた。

「……何年ぶりかな。ハルが、そんなに自分のこと話してくれたの」

何を言うこともできないハルユキから、すっと眼を逸らし、チユリは重ねて呟いた。

「あたしも……あたしも、ずるかったよね。卑怯だった。ハルが……長い間、すごく長い間つらい目にあってたのに、見て見ぬふりしかなかった。ほんとほ、その気になりさよすれば、いくらでもできることあったのに。先生に言ったり、教育委員会に投書したり、それこそタツくんに頼んであいつら全員やつつけてもらえばよかったんだ。でもできなかった……ハルに怒られて、嫌われると思って……あたしたちが、あたしたちでなくなっちゃうのが怖かった」

くっきりした一重のまぶたを繰取る長い睫毛に、透明な水滴が溜まるのをハルユキは鼻を詰めて眺めた。サンドイッチを叩き落としてチユリを泣かせたのはたった二日前だし、これまで

何度となく啜<sup>く</sup>啜<sup>く</sup>しては互いに泣いたり泣かせたりしてきたのに、いま見ている涙はそれらのどれとも色合いが違うように思えた。

「でも、ハルもずるい」

ぎゅゅと眼をつぶり、唇を震<sup>ふる</sup>わせてチユリは続けた。

「ずっと、ずっと変わらないって言ったじゃない。同じ友達だって。二年前……タツくんのこと、相談したとき……あたしが断<sup>ことわ</sup>ったら、タツくんはもうあたしたちとは一<sup>いっしょ</sup>緒に遊ばなくなるってハルは言った。でも、もしあたしとタツくんが付き合っても、ハルはずっと友達でいてくれるって約束したのに。あたし……あたしはただ、何も変わってほしくないってそれだけ思ってた。ずっと二人で、一緒にいたいって……」

——僕だってそうだ、

ハルユキは、その思念を発声してしまうのを危ういところまで堪<sup>こ</sup>えた。

しかし、まるで声が聞こえたかのように、ぼちちと壁<sup>かべ</sup>を見聞<sup>みきこ</sup>いてしずくを振り飛ばしながら、チユリが真正面からハルユキを見つめた。

「なの……どうして？　なんで今になって、あんな人に頼<sup>たの</sup>むの？　あたしには何もするなあって言っておいて、なんであんな人にべこべこして助けてもらったの？　ずるいよ……悔しいよ、あたしは何年もずっと悩<sup>なや</sup>んでいたのに、あの人は……たった一日で何でも解決しちゃって……それで、ハルをまるで……自分のものみたいに……」

あの人——黒雪姫。

予意外のタイミングで出てきた老前に、ハルユキはもうチユリのメモリを吸くことなどほとんど忘れて、撞撃するように首を振った。

「ち……違うよ、オレが頭んだわけじゃない……先輩は生徒会の副会長だから、イジメを解決してくれただけで……」

「なら、なんであの方はハルのこと自分のベクトルみたいに連れまわしたりするの!? なんてハルは、あの方の後ろで手下みたいに小さくなってるの!?」

「違う……そんなじゃない!」

もう一度激しく首を振りながら、ハルユキは、僕はいったい何をどうしたいんだと自分を問いつめた。気が味わっていた。

黒雪姫に、チユリが「(シアン・パイル)」だと主張されれば頑固に抵抗し、今度はチユリに黒雪姫を責められるとそれを懸命に否定している。事態はもうミヤサマで攪拌されたジグソーパズルにも似て、そこにどう収めていいのが見当もつかない。

語調を落としながら、それでもハルユキはもういちど繰り返した。

「そんなんじゃないんだ、だって、オレは別に……嫌だとは思ってないし……」

「あたしが嫌なの!!」

途端に、部屋の外にまで聞こえるほどの声でチユリが叫んだ。

「ハル、中学に入ってからずっとそっけなかった。ぜんぜん一緒に帰ってくれないし、学校で話しかけると迷惑そうに聞するし、うちにだって来なくなった。小学校の頃はそんなことをかっただじゃない」

「それは……しようがないだろ、お前にはもう、か……彼氏がいるんだから」

「そうしろって言ったのハルじゃない！ そうすれば、あたしとハルとタツくんはずっとずっと同じでいられて、ハルが言っただんじやない!! あれは嘘だったの?」

「嘘じやねえよ！ 嘘じやねえけど……いつまでも小学生じやいられないだろ!!」

チユリの顔の両脇で、シータを強く握り締め、ハルユキも睨んだ。

「昔はオレだって気にしなかったよ、お前とタタの橋に並んで歩くのも、一緒にハンバーガー屋入るのもどうってことなかった！ でも……もう無理なんだよ、辛いんだよ！ タタはどんなかつこよくなるし、お前も、か……かわいいうだし、でもその橋に並んでるオレはこんななんだよ！ 同じ場所にいっても、穴掘って埋まってる気分になるんだ!!」

チユリに対して——いや、誰に対しても、ここまでストレートに自分の劣等感をぶちまけたことはなかった。後で死ぬほど後悔してのたうちまわるだろうという確信があったが、しかしハルユキはどうしても思考を停めることができなかった。

同じことを口で言おうとしたらつかえまくりで言葉にならないだろう。しかし今は直結して思考発声しているのであり、ハルユキの思念は激流となってチユリの脳に注ぎ込まれていっ

た。

「お前だってそうだろ」 タタとは手を繋いで歩けても、オレとはできないだろう！ そればつまり、お前自身がタタを選んだってことなんだよ！ オレが何を言ったとかもう関係ないんだ!!」

ハルユキの二十センチ下で、チユリは眼を丸くして袖白に聞き入っていた。

その、色紫のうすい瞳に、再び水の紗幕がかかった。

くしやつと顔が歪み、激しく震えた唇から、ささやくような声が漏れた。

「……そんなこと、本当に思ってるの？ 人の価値が、見た目だけで決まるなんて、本気で信じてるの？ ……ハルは、いつもそう。いつだってそうやって、自分のこと決め付けてる。なんでそんなに、自分を嫌うの？ どうしてそこまで自分を責めなきゃならないの？」

「嫌いに……決まってる」

呻くように、ハルユキは答えた。

「もしオレが、オレじゃない誰かでも絶対こんな奴隷になる。ズブで、汗かきて、卑屈で……好きになれるとこなんて何ひとつないじゃないか。一緒にいるのも……見るのさえ嫌だ」

「あたしは、知ってるよ。ハルのいいところ、いっぱい知ってる。両手の指じや数え切れないくらい知ってるんだから！」

チユリは、幼かったあの頃のようにしやくりあげながら続けた。



「おやつの時、いつでも大きい方をあたしにくれたし、ランドセルにつけてたマスコットなくしたときも遅くまでひとり探してくれたし、ニューロリンカーが調子悪くなったらすぐに直してくれたし、他の誰にもないいいところがいっぱいあるんだよ。見た目なんて関係ない。もし……もし二年前のあのとき、ハルがあたしに……」

不意に、ぐっと何かを呑み込む様子を見せてから、チユリは悲しそうに微笑んだ。

「……ごめん、これは言っちゃいけないよね。あたし……あたしは、ハルが学校の子たちからだけじゃなくて、あたしとタツくんのおそばからも離れていっちゃうのが怖かったんだ。ひとりになってはしかなかった。いつでも親友が二人もいるんだって、そう思ってたはしかった。だから、ハルの言うとおりにした」

ハルユキは、喉の奥が激しく締め付けられるのを感じながら、どうにか思念を押し出した。

「……お前まさか、オレのために……？」　オレとタタが、友達でいられるようになって……」

「タツくんとおぎけあつてるときのハルが、いちばん楽しそうだったから。そしてあたしは、そんな二人を見ているのが一番楽しかった。この時間だけは変わってほしくないって、それだけ思ってた。でも……ふりだよ、変わらないものなんかないし、人の心も止められない」

突然チユリは両手を持ち上げると、ハルユキの大きな体に回してぎゅっと力を込めた。走りつくハルユキに、涙まじりの笑顔が至近距離から向けられた。

「あたしの手はもう、ハルには届かないわ。ほんとと言うと、さっき校門でハルと黒雲殿さんを

見たとき、その役目は、もしかしたらあの人のものなのかな……って思ってたんだ。それが悔しかった、あたしのほうが、あの人より情懷もハルのこと知ってるって信じてるから、でも……もし、あの人に、ハルを変える方があるなら……」

途惑いの大渦の真っ只中で、ハルユキはただチユリの言葉を聞くことしかできなかった。密着するチユリの体は遠い遠いあの頃と何ら変わることもなく、小さくて暖かった。

「……でも、お願いだからあんな態度やめてね。自分みたいなの。なるなら、あの人の後氏になつてよ。そんな学校中の生徒を驚かせてやって」

今ここで、自分もチユリを抱きしめたらどうなるのか。

ハルユキは、瞬間的にではあったがそれを真剣に考えた。もちろん、実際に体が動くことはなかったが、しかし右手の指先だけが思考を裏切り、びくりと震えた。

その動作に連動して移動したホロカーソルが、偶然チユリのニューロリンカー内蔵メモリの内容を示すウインドウの、アブリケーションインストールフォルダのアイコンを叩いた。僅かなラダの後、新しい窓が音もなく開いた。

無意識のうちに、表示されたアブリ群をひとつひとつ視認して確認しながら、同じく無意識的にハルユキは肉声で呟いていた。

「ごめん……ごめん、チユ。オレ……いままで、お前が何かに悩んでるとか、苦しんでるとか、考えようとしてなかった。そんなだからダメなんだよな……」

「そうだよ、あたしも悩んでるし、タツくんにも悩み事はあるだろうし、たぶんあの人だってそうなんだよ。みんな同じ、ハルとなんにも変わらないの」

チユリの声も、小さな両手も、染み入るように暖かった。

僕はどうかしてた、とハルユキは内心で考えた。こいつがバーストリンカーで、それを僕に隠してるんだなどと、一瞬にせよ疑うなんて、

実際、アプリケーションフォルダにあの横線上がる目の文字をかたどったアイコンが存在しないことは一目で判った。念のため、インストールされているプログラムを一つずつ確認していくが、どれも市販のメーカーやメディアプレイヤー、簡単なゲームなどで出目の怪しいものは見当たらない。

やっぱりチユリは《シアン・パイル》なんかじゃなかったんだ。

そう自分に言い聞かせながら、幾つめかのアプリのプロパティを開いたとき、ハルユキはふと違和感を覚えた。

プログラムの問題なのではない、そうではなく——先ほどから、操作に対する反応が微妙に重い。

廉価なホームサーバーを介した無線通信ならまだしも、今はチユリのニューロシンカーと高品位ケーブル（しかも極短）で直結しているのだ、レスポンスに体感できるラグなど発生する理由がない。

もしラダるとすれば、その原因は、チユリのリンカーの通信帯域が他の回線に大部分占有されているから、しか有り得ないのだが。

いっそう詳しく思いながら、ハルユキはネットワークステータス窓も開いてみた。

チユリのニューロリンカーは現在、グローバルネットと、倉崎家のホームネット、そしてハルユキとの直結回線の三経路に接続している。そのうち、まさにこの瞬間パケットのやりとりがあるのはハルユキとの間だけであるはずだ。

しかし、経路を確認したハルユキは危うく声を上げかけた。大量のパケットが、グローバルネットに送信されている。ローカルの送り手は、フォルダの破まじく深い階層にインストールされた正体不明のプロダム、グローバル側の受け手は不明、ということとは、こいつは――。バタタドアだ!!

チユリのニューロリンカーは何者かにハッタされ、ひそかに外部から接続されているのだ、そしてその何者かは、今まさにこの瞬間、チユリの視聴覚情報を盗んでいる。

この野郎!!

思わず叫びそうになりながら、ハルユキは問題のアプリを消去してやろうと指先を動かしかけた。

しかし、ドラッダしたアイコンをゴミ箱に叩き込む直で思いとどまった。

今接続している何者かこそが「ヘシアン・バイル」だ。こいつは、ブレイン・バーストの改変

に成功したわけではなく、チユリのニューロリンカーを踏み台にすることでマツチングリストへの自在な出現と消滅を可能にしているに違いない。

つまり、バケツトの行き先を特定すれば（シアン・パイル）の正体も割れるということになる。しかし、向こうに気取られずに追跡するのは至難の業だ、それが可能なのは、おそらく対戦中のみ。となれば、次に襲撃してくるまでこちらがバツタドアに気付いたことを伏せておかななくてはならない。

そつと息を吐き出しながら、ハルユキはウインドウを全て閉じた。

「……………ありがとう、チユリ」

呟いて、そつと体を離す。

ずつと小さくしゃくりあげていたチユリも、ゆっくり両手を降ろして、顔しながら微笑んだ。どこもない笑顔を見しながら、ハルユキは左手を伸ばし、チユリのニューロリンカーからブラダを抜いた。

金曜日。

長い週日がようやく終わり、あすあさつては休みだという期待感で顔を輝かせて登校する生徒たちも混じって、ハルユキは憂鬱に眉を蹙りしながら歩道をよばとば進んでいた。

「僕って……僕ってやつは……」

朝から早速マキシマムな自己嫌悪に取り付かれ、口のなかで呻く。

ブレイン・パーストをインストールしたその夜に見た夢が人生最悪なら、昨夜のそれは人生最低と言わねばならぬ代物だった。仮想的知識としてしか知らぬ行為を展開した相手が、黒雲だけであればあるいは人生最良の夢であつたのかもしれない。しかしいつのまにか、相手が二人に増えており、しかもそれが――。

「あつ……ああああ……」

顔を伏せて走りたい衝動を必死に堪える。

現在、ニューロリンカーのキャリアー各社は、〈夢の録画〉というそれこそ夢のようなアプリ開発にしのぎを削っているらしい。実現していなくて本当によかった。いや――そりゃ、少しは残念な部分もなきにしもあらずであることを認めざるを得ない部分もなくもないが……。

「や、おはよう少年!」

不意に、快活な声とともに肩を叩かれ、ハルユキは飛びあがった。

そして振り向き、そこに立つ黒衣の國人を視認してもう一度飛びあがった。

「ひへあっ!?」

「……なんだそれは、流汗の挨拶か?」

訝しい顔をつくる黒雪姫に、ハルユキはぶんぶんとかぶりを振ってみせた。

「いえっ、なっ、なんでもないです! あの、おっ、おはようございます先輩!」

「……うん」

尚も首をかしげてから、黒雪姫はひとつコホンと咳払いをし、続けた。

「ン、あー、あのな、昨日はその……病まなかった。私もちよっと大人げなかったな」

「い、いえ……そんな、とんでもないです。僕のはうこそ……あくに挨拶もしないで帰っちゃって……」

立ち止まって話す二人の左右に、同じ制服を着た生徒たちが徐々に溜留していく。一年生のみならず、二、三年生までもが顔に憧れの色を浮かべ、黒雪姫にお早うございますを言おうとするので、気付けば背後に順番待ちの列までできている。

それを見た黒雪姫は、後ろの集団に、やあお早う皆ー! といっぺんに挨拶を済ませると、ハルユキの背を叩いて早足で歩き始めた。慌てて後を追ったハルユキの耳に、ひそひそ声で会話

の続きが聴かれる。

「いや……、キミが席を立ちなくなったのも無理はないよ。大事な……友達を、卑劣な襲撃者呼ばわりされたんだからな。その上、直結して確かめるなんてできもしない事を言わせてしまった。まったく済まなかった」

「へ？ あ……あの、してしまいましたけど……直結」

「……なに？」

びし、と顔面が硬くなった。なんだかまたしても不穏な気配、とハルユキが警戒するより早く、

「どこでだ」

鋭い声でびしっと質問されれば、馬鹿正直に答えるしかない。

「そ、その……あいつの家で……」

「家のどこだ」

「へ、部屋です……あいつの」

「……ほう」

どうしたわけか黒雪姫の歩行が徐々に加速しはじめ、ハルユキは顔に汗を浮かべながら自分よりかなりストライドが長い相手を追いかけた。数秒かかって再び横になれば、それでですね、と言いかける。

「物理メソリを覗いたんですが……あいつのニューロリンカーにですね……」



「ケーブル長はどれくらいだ」

突き刺さるようなオーラをまといながら訪問する黒雪姫に、ハルユキはほえつつも答えた。

「さ……んじゅっせんち、です」

「……………ふーん」

かつかつかつかつかつかつかつかつ。

物凄い加速で、前方に見えてきた校門に近づいていく黒雪姫の揺れるロングヘアを、ハルユキは唖然と見送った。

わからない。世の中理解できないことだらけだ。

午前中の授業をなにか逃避的に真剣に聞き、山ほどメモを取ったハルユキは、軽やかに鳴り響く昼休みのチャイムを聞きながらもぐずぐずと行動に移りかねていた。

理性的に考えれば、ラウンジにいてであろう黒雪姫を助ね、「シアン・バイル」がチユウのニューロランカーに仕掛けたバクダアと、そのバクダアの追跡方法についてすぐにでも話し合うべきだ。しかしその前に、黒雪姫が昨日から妙に不機嫌な理由を看破しておかないと、とても会話に集中なんかできない。

眼前の相手を不快にさせるのは、実のところよくあることだ。重量過多な奴に隣のように汗をかきつつオドオド小声で話されて、イライラしない人間のはうが珍しいだろう。そして、

相手のそういう表情がハルユキをさらに萎縮させ、声は限りなく小さく、聞き取りにくくなっていく。

黒雪姫も、いままでひそかにガマンしていたのだろうか。それがいよいよ限界を超えたのか。となればもう、黒雪姫とリアルに対面して会話することは永遠に諦めたほうがいいかもしれない。フルダイブしてアバター同士で話せば、少なくとも汗はかかないし声のポリウムも自動補正される。そのほうが万事スムーズに、事務的に流むのなら、自分にとっても望ましいことであるはずだ。

そう言い聞かせつつも、机に視線を落としてしゃんばりしていたハルユキの頭上から、突然聞き覚えのない大音量の声が降り注いだ。

「こんにちは！ 一年二組の有田春雪君ですわね！」

ぎょっとして顔を上げる。目の前に立っていたのは、見覚えのない二人の女子生徒だった。リボンの色は二年。そしてどちらも肩のあたりに、クラブ活動中であることを示すホロタグが表示されていた。【新聞部】。

げえっ、と仰け反ったハルユキの視界に、新たなアイコンが出現した。【SREC】、というそれは、相手のニューロリンカーに会話が録音されていることを知らせるものだ。勿論みだりに許される行為ではないが、校内ではごく限られた場合にのみ認められている。

例えば、新聞部の取材とか。

周囲から興味しんしんの体で見守る同級生たちの姿ももう目に入らず、ハルユキは形振り構わぬ全力逃走態勢に入ろうとした。しかし相手も堪慣れしていると見えて、一人がさつと後ろに回り退路を塞いだ。

中腰で走りついたハルユキの目の前に、ホロキーボードに乗せた両手をすいっと突き出し、新聞部の突撃記者が核心的すぎる質問を放った。

「梅村リアルタイムズ、《噂のあいつにヘッドショット》のコーナーなんですがい、ずばり、有田君があの黒宮姫さんと付き合ってるという噂は本当ですか?」

ちか、ちか、と閃滅する録音アイコンをちらりと見てから、

ハルユキは、全副精力を総動員して、どうにか平静と答えなくもない声で答えた。

「ウソです。デマです。事実無根です」

目の前で、だかだかだかつと十指が不可視のキーを乱打し、さらなる追撃が發せられた。

「しかし我々が入手した情報によれば、有田君は黒宮姫さんとラウンジで二度に亘り直結し、それに留まらず校区内の喫茶店で直結デートまでしていたそうですが!」

「な……」

なぜそれを、と驚愕するハルユキを見下ろし、女子生徒は今とき本物らしいメガネをきらいんと光らせた。

まずい、まずすぎる。……こて回答を誤ると、取り返しのつかないことになってしまう。

願裏に、センセーションナルな見出しが何種類もぐるぐると浮かんだ。それを見て血の制説を響く風雲姫ファンクラブ会員たちの肉の声までもがどこからか聞こえた。

ひくひくと片頬を休めさせながら、ハルエキは対アッシュ・ローラー戦時の三倍の速度で脳を回転させ、当たり前降りが無いと言えなくもない答えを導き出した。

「えー、そろそれは、ですね。ぼぼ僕、ニューロリンカーのOSとかちよつと詳しいもので、その、先輩のニューロリンカーの調子が悪かった所を、頼まれて直したっていうそれだけのことで、喫茶店もそのお札以上の意味はないんです。一切、まったく、これっぽっちも」

強張った笑みを浮かべてぶるぶる首を振ると、新聞部員はダイビングを止め、むうつと肩を寄せた。

直結している人間が、思考発声で会話しているのか、それともニューロリンカーを操作しているだけなのかを確認するすべまではないはずだ。苦しい言い訳だが、反論の材料はあるまい。ハルエキは内心で胸を撫で下ろしながら、笑いた訪壁にさらに石を積み上げるべく言葉を重ねた。

「だ……だいたいですね、僕といるときあの人の態度を検証すれば判るはずですよ。先輩、話してみるとさぐ不機嫌になるんですよ。なのに付き合っているとさそんな訳ないでしょう」

これで取材は終わりだろう。と思つたのだが、女子生徒は首をかしげ、訝しように訊き返してきた。

「不機嫌？ そんなふうにはぜんぜん見えなかったけどなあ……」

「は、ほんとですよ！ 今朝だって、なんか蒸って行っちやったし……デユ、じやない、倉嶋の話になるといつもそんな……」

「倉嶋……さん？ て、たしか、校門前で黒雪姫さんと何か言い合ってた、っていう……」

メガネの奥で、数回ばちばちと囁きしてから――。

新聞部員は、すっと態度から芝居がかった部分を消し、断先を走らせた。ハルユキの視界が、録音中アイコンが消滅した。

「……？ 取材は、終わりでですか？」

「あ、ううん……っていうか……」

奇妙に口籠った相手は、ハルユキの背後の相棒と視線を見交わしてから、案に戻った感じの口調で話しはじめた。

「あの、ね、実際のところ、私たちも半信半疑、っていうより、ぶっちゃけ何かの間違いだみうって思ってた取材してたんだけどさ……」

「は……ん。」

く、と顔を近づけ、女子生徒はハルユキにしか聞こえないボリュウムでひそひそと囁いた。

「ね、有田君、まさか……って感じなんだけど……もしかして、黒雪姫さんと君、本当に……  
さうなの？」

「はあ？」

「だって、さ、君と仲がいい倉嶋さんの話をする、いつも不機嫌になる、ってことは、その……むえ？」

綾きは、横に回ったもう一人の部員が引き取った。

「うん、それって、どう考えても……」

そして二人は、神託を告げる巫女のように、同時にハルユキに囁きかけた。

「……やいてる、んじゃないの？」

気付けば、いつもの男子トイレの個室にいるハルユキだった。

結局また走って逃げてしまった訳だが、己の行動を反省する余裕はまったくなかった。

ヤイタル？ それってどういう字を書くんだ？ 知らないな、そんな日本語。

と思考を逃避させたくとも、すでに脳裏には、適合すべき漢字一文字が焼印のごとく赤々と刻み込まれてしまっていた。

チユリのことを話すと、黒雪姫が不機嫌な顔をするのは……嫉妬しているから。

そう、あの二人は言ったのだ。

嫉妬、妬いてる、つまり、黒雪姫は、演技や冗談ではなく、本気で――。

「嘘だ」

自分の思考を先回りし、ハルユキは呟いた、そんなことがあろうはずがない。他の誰に起きようとも、自分に、この有田春雪にだけは起きるはずがないのだ。考えるな、期待するな。あとで絶対、二倍三倍の悔恨にのたうちまわるに決まっているのだから。

後頭部を、水洗タンクにこつん、こつんとぶつけながら、ハルユキはもう一度声に出した。

「嘘だ……嘘だ」

しかし、そう言い聞かせれば聞かせるほどに、これまでに黒雪姫が示した様々な仕草、表情、そして言葉が無数のピースとなって脳裏に嵌る。

あの時も……あの時も、あの時も、あの人は本気で……？」

「……嘘だ!!」

だん！ と右手でトイレの仕切り壁を叩き、ハルユキは頭を抱えた。

もう思考を続けるのも苦痛になり、この場所からもさらに逃げるべく、完全ダイブコマンドを口にしようと——したその瞬間。

バーチャル・スカッシュで、黒雪姫が叩き出した恐るべき数字のハイスコアが記憶に刻まれた。あの得点は永遠に超えられない。ならば、もうあのゲームを現実逃避には使えない。

「……何てだ」

もう一度、少し大きな声で呻く。

「……何てなんです……何て僕なんだ!!」

あなたは全てを持っている。容姿、頭脳、身体能力、人望、そして――僕が唯一ブライドの扱い所としていた、仮想ゲームの反応速度さえも。

対する僕は、間抜けな敵つきにぶよぶよの体、大汗かきの嫌われ者でしかない。

つまり、僕はあなたに勝る部分を、何ひとつ持っていない。

「なのに……どうやって、信じあつて言うんです……」

確かにハルユキは、黒雪姫が捜し求めたブレイン・バースト適性者ではある。

しかしそれは、同じ中学校に三人も居る程度のものでしかないのだ。

その上ハルユキの《シルバー・タロウ》は、ひよあつとした針金ボダイに巨大なヘルメット頭をくっつけた、殴る蹴ると頭突きしか技のない出来損ないだ。そんなデュエルアバターでは敵――《シアン・バイル》の正体を割る手伝いくらいしかできないだろう。ならばそれにふさわしい強いをしてほしい。冷静に、凄々と、ひとつの駒として命令だけしてほしい。

それ以上のことは望まない。絶対に夢を見たりなんかしない。なのに――なぜ、黒雪姫はあんな態度を、あんな表情を、あんな眼をするんだ。

やがてハルユキは、衆になりたい一心で、ひとつの結論にすがり付いた。それ以外には、もう理由を見つけられそうになかった。

パン代を巻き上げる相手はいなくなったのにまたしても昼食を抜いてしまったが、ハルユキ



は要腹を意識することもなく談々と午後の授業をやり過ごした。

ホームルームでは、担任教師が荒谷たちのことを何か言っていたようだったがそれも聞き流し、放課のチャイムと同時に生徒たちが土日への期待にはしやぎながら教室を飛び出していったあと、のろのろと靴を手に立ち上がった。

昇降口までゆっくりと移動し、靴を履き替え、校舎を出る。

まだ三時過ぎなのに、晩秋の太陽はすでに色褪く、大きく傾いて校門を照らしていた。門柱に同化するように立つ黒いシルエットをハルユキは認めると、足を引き揃えるように近づいた。

「……やあ」

黒雲姫は、ホロキーボードをタイプする手を止め、少しでも硬い笑みとともに小さく片手を上げた。たぶん、生徒会室で処理すべき事務を、わざわざこんな寒い場所に持ち出したのだから。

それに対して、ハルユキは無言でべこりと頭を下げただけだった。

どこもない沈黙が、一瞬降りた。冷たい風が二人の足元の落ち葉を鳴らし、通り過ぎる。俯いたままのハルユキに、黒雲姫は軽い咳払いに続けて言った。

「……歩きながら話そうか」

「はい」

ごくかすかな返事とともにハルユキは頷いた。

無言で歩き始めた黒雪姫の、左側一歩下がった位置について校門を出る。

「互いに沈黙したまま一、二分ほど歩いたとき、黒雪姫がもう一度咳払いしてから話し始めた、  
「その……なんだ、朝は済まなかったな。妙な態度を取ってしまった」

「いえ、別に……気にしてないです。僕も、昼休み行けなくてすみませんでした」

いつになく滑らかな答えに、黒雪姫は小さく首を傾げたようだったが、そうか、と頷いた。  
「なら、いいんだが……。その、な。自分でもどうかしてると思うんだが……。そう、（シアン・バイル）の話に関しては、私もなかなか平静ではいられなくてな」

視線を前方に据え、少しだけ早口で喋りつづける黒雪姫の言葉を――。

ハルユキは、乾いた声で断ち切った。

「そのことをなんですが、倉嶋とシアン・バイルの関係がわかりました」

「……え？ あ……そ、そうか。なら、その話は、直轄通信でしょう。関連する固有名詞を、

誰かに聞かれるとコトだからな」

黒雪姫は早口で言うく、ポケットではなく右手に下げた鞆を握った。

取り出されたのは、梅舞中の購買部の名前が入った小さな紙袋だった。ぴりっと音を立てて  
テープを破り、黒雪姫は袋から新品のXS Bケーブルを引っ張り出した。

「あー、昨日まで使ってたやつはうっかり断線させてしまったんだ。で……ちよっと持ち合わせがなくて、これしか買えなかった」

まるで言い訳するように、一メートルの——購買部で売っている最短のケーブルを差し出す黒雪姫の心のうちを、ハルユキは意識して考えまいとした。腹を合わせず、無言でブラダの片方を受け取ると、自分のニューロリンカーに縛す。

「……………」

黒雪姫は、ハルユキが何か言うのを待っているようにも見えたが、やがて自分のニューロリンカーにもう一方のブラダを差し込んだ。ワイヤードコネクト警告が現れ、溜めると同時に、ハルユキは乾いた思考を相手に送り込んだ。

「倉嶋は、(シアン・バイル) 本人じゃありません。(シアン・バイル) は、倉嶋のニューロリンカーにウイルスを仕掛けて、バッドドアを作っていたんです。だから、校内で倉嶋のいる座標からステージに出現したんです」

立て続けにそこまで言ったハルユキに、黒雪姫はすぐには言葉を返さなかった。

やがて、脳（脳）の中央で響いた声は、いぶかしむように——あるいは、ほんの少しだけ、怯（おそ）えているようにも聞こえた。

「……キミ、どうしたのか……？　なんだか……さっきからちょっと、変だぞ」

「別に……どうもしません」

一メートルを歩く黒雪姫に、頑（かた）なに視線を向けずにハルユキは答えた。

「だが……、——もしかして、起（おこ）っているのか？　朝、それに昨日、私がおかしな態度を取っ

「だから……」

「まさか、僕が先輩に怒るなんてこと、あるはずがないじゃないですか。……僕のことはいいです、もっと大切な話をしてるところでしょう」

再び、はしゃぎながらケープブルを流れた。

青間の政づく歩道は、左側に立ち並ぶビル群のせいで薄暗く、行き交う人たちはみな黒い影に沈んでいた。直結して歩くハルユキと黒雪姫に目を留める者も居らず、まるで二人だけが、平らな影の國に彷徨いこんでしまったかのようなだった。

「……証拠はあるのか」

突然、ハルユキの脇腹に、打って交わって冷たい思念が響いた。

「倉嶋君が、〈シアン・バイル〉ではないという証拠をキミは手に入れたのか？」

「いえ、ウイルスに手を出したら気付かれる危険があったので、確認しただけです」

「ほう。冷静な判断だが、同時に説得力も失っているぞ。バックドアウイルスを経由してブレイン・バーストのマツチンダサーバーに接続するなどという話は、この私ですら聞いたこともないというのに、キミのその言葉を私はどうやって信じたらいいのだ？」

耳詰りとつ綴るごとに、黒雪姫の思念は鋭さを増していくようだった。ハルユキはぎゅっと奥歯を噛み、いっそう平板な音声をケープブルに送り込んだ。

「それはつまり、僕がウイルスの話を捏造した……つまりと、倉嶋こと〈シアン・バイ

ル」に凝滞した可能性を指摘してゐるわけですか？　ならばもう、重燃云々でレベルじゃないですよ。どう判断するか、先輩が決めればいいことです」

「……そこまでは言っていないだろう。飛躍しすぎだ」

僅かに揺れた黒雪姫の言葉に、しかしハルユキは頑なに何も答えなかった。

「――本気でそんなことを言っているのか？」

不意にびたりと黒雪姫の足が止まり、一気に温度を低下させた声が硬く響いた。ケーブルが張り詰める前に、ハルユキもその場に停止した。

「キミが（シアン・バイル）についた」と判断した瞬間、私はキミを狩るぞ、ききやかなバーストポイントを全て奪い、ブレイン・バースト強制アンインストールへ追い込む。キミは加速能力を永遠に喪う。それを理解したうえで言っているのか？」

「解っていますよ、なんなりと、ご自由に。僕はただの駒、ただの道具です。要らなくなったら捨てればいい」

「……キミは……」

突然、ハルユキの左肩が軽く振られた。

視線を上げると、氷細工のように硬く張り詰めた黒雪姫の顔が間近にあった。しかし、黒雪の友陣だけが、内なる感情を映して赤々と熱え上がっているようにも思えた。

「キミは、やはり怒っているのだな。確かに私も至らなかった。それについては謝る。だが――」

唇がかすかに震え、無理やり抑制されたような声が押し出された。

「……私も、己の情動全てを自在にコントロールできるわけではない。苛立ちもすれば、不安にも思う。ことに、キミと……合奏君のことについては……」

一瞬視線を伏せ、蒼白の頬を強張らせながら、黒香姫は続く言葉を放とうとした。

「……いいき、理由を語せというなら話してやる。私は……」

その思念がケーブルを通して届く前に、ハルユキは顔を向き、声を溜り込ませた。

「いいですよ、もうやめましょうよ」

「よ……な、何を……」

「見てるほうも辛いですよ。痛々しいんですよ」

「何を言ってるんだ……どういう……意味だ？」

視線を右下方のひとつの調整ダイヤルに固定しながら、ハルユキはついに、分間たどりついた

〈唯一の結論〉を言葉にした。

「あなたは……あなたのことが嫌いなんじゃない？」

鋭く息を吸い込む音。

自分がいま、取り返しのつかない言葉をかたちにしてしていることを、ハルユキは自覚していた。耳の奥で、昨夜のチユリの囁きがかすかにリフレインしたが、発せられた思念はもう止めることはできなかった。

「あなたは、なにもかも完璧すぎる自分のことが嫌いなんだ、だから、自分で自分を貶めようとしている。そうなんですよ」

左肩に乘る黒雪姫の指は、鉄になつてしまったかのように硬く強固つていた。たぶんこれが最後の触れ合いになるのだあう、と思ひながら、ハルユキは全てを破壊するであらう最後の言葉放った。

「あなたは僕に……デブで、不細工で、嫌われ者の僕に言葉をかけ、手を触れ、好意を……好意のようなものを示すことで、ただ自分を汚そうとしているだけなんだ。……そんなことをしなくても、僕はあなたの言うとおりに働きます。僕は何も望まない。代償なんて要らない。ただの捨て駒、命令されるだけの道具、それが僕みたいな奴に相応しい扱いだって、あなたもほんとは分かつてゐんだ!!」

ゆっくり——、ゆっくりと、肩から白い手が離れていった。

それでいいんだ。

もう二度と触れず、視線も合わさず、

現実世界で向き合うことすらせずに、僕をただの道具にしてくれればいい。

その思いが、思念として届いたのかどうかハルユキにはわからなかった。

さようなら。

と、最後に呟こうとした、そのとき。

パンッ!!

という鋭い感覚が、左頬に弾けた。

灼けるような熱を感じながら、ハルユキは驚愕して顔を上げた。

「……バカ!!」

その声は、現実の音として色の濃い唇から溢った。

極限まで歪められ、しかし尚も凄絶なまでに美しいその顔に、溢れ出た涙のような涙が伝うのを、ハルユキは呆然と見詰めた。

右手を大きく振りぬいた姿勢のまま、黒雪姫はおきな子のように顔全体をくしゃくしゃにし、途切れることなく涙を零し続けた。

「バカ……バカあ………」

繰り返されるその一言の響きは、これまで何度か聞いた、大人びた苦笑まじりの（黒雪姫）とはまるで違った。

歳相応の——ひとりの十四歳の女の子として、黒雪姫は何度も、何度もハルユキを罵った。

そしてハルユキの方はと言えば、十三歳の男子ならできてしかるべき幾つかの対応すらもまるで頭に浮かばず、ただ目を見開いて立ち尽くすのみだった。

自分の発した言葉が、目の前のひとを深く傷つけた、それはわかる。

しかし、黒雪姫なら——全てにおいて完璧で、大人以上の理性と思考力を持つこの人なら、



ただハルユキを嫌悪し、愛慕を忌み、心を離れさせるだけだろうと、そう思っていたのだ。こんなに没くなんて、こんなに醜い顔をするなんて。こんな——こんなはずじゃ……。

ハルユキは、何かを言おうとして口を開きかけた。

黒舌が、溢れる涙を白い両手で覆った。

夕暮れの色に沈む歩道に立ち尽くす二人を、一瞬の風だけが追いついていった。

直後——。

金属が金属を擦る凄まじい騒音が、ハルユキの聴覚を叩いた。

最初は、ニューロリンカー由來の量子的ノイズだと思った。それはどに真實な音だった。

ハルユキは驚愕し、心臓を跳ねさせながら、首と上半身を右に返らせた。

視界に飛び込んだのは——恐るべき光景だった。

白い乗用車が、左のフロントフェンダーで車道と歩道を隔てるガードレールを倒りながら、まっすぐ自分めがけて突っ込んでくる。

事故!? 違う——ブレーキ音が、しない。

その四つの思考が、コンマ一秒以下のうちに閃いた。

ほとんど自動的の口が動き、ひとつの言葉が送った。そして同時に、直結ケーブルを通じて、

ハルユキの脳裏にもまったく同じ言葉が異なる声で響いた。

「「バースト・リンク!!」

バシイイイッ!!

雷鳴にも似たあの音とともに、世界が停止した。

青。

どこまでも青く透き通る、凍った風景。

しかし、完全に停止しているわけではないことをハルユキはすぐに意識した。

眼前いっばいに迫った大型のセダンが、まるで凍結に抗うように、係かずつ、係かずつタイヤを回し、路面を噛み、距離を詰めてくる。

「……うわあっ!!」

今更のように悲鳴を上げ、ハルユキは飛びのいた。瞬間、車の姿が消えた。隠したのは、自分の――梅郷中学校の制服を来た、丸っこい背中だった。

この青い世界は、現実の風景そのままだではない。周囲の市街に無数に設置されているソーシヤル・セキリティカメラの映像をブレイン・バースト・プログラムがハッキングし、ポリゴン製の擬似現実として再構成しているのだ。

ちらりと視線を落とすと、体はピンク色のブタに変わっている。馴染んだパーチャルアバターを動かす、ハルユキは現実の自分の背中を回り込んでもう一度白いセダンを見た。

車道から斜めに進路を外し、ガードレールの隙間目掛けて突っ込んできつつあるその車と、ハルユキとの距離は三メートルもない。そして、徐々にではあるが前進し続けるそのスピードから概算すると、両者が接触するのはこの加速世界においてもあと十分足らずだろう。

こんなことが——なぜ？

ハルユキは混乱した意識のなかで必死に考えた。

自動車が車道を外れるなんて、普通は有り得ない。異常進路を検知したその瞬間、車自体の制御AIがドライパーから操作権を奪い、自動で進路修正・減速・停止を行うからだ。

つまりこのクルマは、制御AIが壊れているか、ドライパーの操作によって一時的に停止させられていることになる。

おそらく後者であろうことは、すぐに想像できた。なぜなら、ハルユキの耳には、フルブレーキング時のタイヤが路面を擦るスキール音が一切聞こえなかったからだ。

ドライパーはブレーキを踏んでいない。それどころかアクセル全開で突っ込んできている。

これは故意の襲撃だ。黒宮姫が以前仄めかしていた、バーストリンカーの現実サイドにおける（攻撃）なのだ。

そこまでをほとんど瞬時に認識したハルユキは、さらに数歩前進し、フロントウインドウ越しにドライパーの顔を確認かめようとした。

攻撃者は、（王）のレギオンに属する見知らぬバーストリンカーだろうか？ それとも、梅

郷中の誰かであらう（ヘンアン・パイタ）？」

周囲のソーシャルカメラのほとんどは車内の映像までは捉えていないらしく、ウィンドウはなかなか見逃せなかった。ハルユキは角度を変え、目を凝らし、ようやく内部が覗ける位置を発見した。

背の低いブタアバターをいっぱいに伸ばして、ほとんどボンネットに乗り上げるようにして運転者を――

「な……!?」

見た瞬間、ハルユキはもう一度感嘆にも似た驚愕の叫びを漏らした。

そこにあったのは、完璧なまでに見覚えのある、そして二度と見たくないと思っていた、同級生の顔だった。

「あ……荒谷……!? な……んで……」

なんてこいつが。ここに。

校内で傷害事件を起こし、その上ニューロシンカーからソーシャルカメラ同乗アプリを始めた法コビーされたゲームだの動画だの、はてはデジタルドラッグまで手づる式に発見されて問答無用で逮捕されたばかりじゃないか。そのまま鑑別所なり少年院にぶちこまれて、自分――少なくとも僕の在学中は帰ってこないんじゃないのか。

自分の眼が信じられず、ハルユキは何度も瞬きして、青い水でできた運転者の顔を凝視した。

しかし、剣山のように逆立つ髪、つり上がった細い眉、針穴のような瞳孔、残忍な興奮に至るまで——そしてそれら相貌がハルユキのうちに否応なく引き起こす恐怖感すらも、目の前にいる男が荒谷本人であることを告げていた。

「今朝——保釈されたんだ」

不意に隣で沈痛な声が響き、ハルユキはさつと顔を向けた。

黒揚羽蝶の紙精姫アバターに身を包んだ黒雪姫が、きつく唇を噛んでそこに立っていた。

「……通明けには家説で審判があり、最遅でも一年は収監されるだろうと聞いていた……。だからもう、この男のことは考える必要はあるまいと、そう思っていた。しかし……まさか、このような……」

押し殺した声でそこまで呟いてから、黒雪姫は長い睫毛を伏せて、ゆっくりと首を振った。

「いや——千姫、警戒しておくべきだったのかもしれない。人が人を撃つのに、《加速》の力など必要ないと……ナイフ一本、クルマ一台あれば充分に事足りるのだと、解っていたつもりだったが……とうやら、真に理解してはいなかったようだ……」

いつもの口調でそう語る黒雪姫の表情に、先ほどまでの幼い号泣の余韻はないように見える。いや、それは僕がそう思いたいだけのだろう、とハルユキはすぐに思い直した。

アバターの、つくりものであるはずの瞳には、痛切なまでの悔恨と、そして決意のようなものがはつきりと見て取れる。

黒雪姫はその眼をゆっくりと閉じ、深く息をつき、囁くように言った。

「これは……怖い、というものなんだろうな、人のところを知らず、知ろうともせず、それでいて鋭れに弄び続けてきた私への」

「……なにを……何を言ってるんです」

ハルユキはようやくそれだけを口にした。黒雪姫はすぐには答えず、体をハルユキに向けると、身長が他近くも違うそのアバターを音もなく動かした。

黒いドレスが広がり、ハルユキと同じ高さにまで下がった目線をまっすぐに合わせてくる。

「有田君……ハルユキ君」

呼びかける声は、記憶にあるどの瞬間よりも優しく、穏やかに、ハルユキの聴覚を揺動した。

「すまなかったな。この事態を招いたのは私だ。だがキミは傷つけさせない。絶対に私が守る」

「……え……なに……何を……」

ハルユキは呆然と、同じ言葉を繰り返した。

もう、今から加速を解いたとこまでできることは何もないはずだ。

現実には復帰した瞬間、目の前のセダンは凄まじい速度で残る距離を通過し、まずハルユキを、そして背後の黒雪姫を跳ね飛ばすだろう。

その順巻でよかった、自分がクッションになれば、黒雪姫には大した怪我でなく済む可能性が低かながらある。ハルユキは先刻からそう考えていたのだ。

しかし、黒書姫は強い決意を秘めた口調で、驚くべきことを告げた。

「キミだけは、必ず助ける。キミにはまだ教えていない、ブレイン・バーストの……（加速）の最大最後の方で」

「え……？」

助ける……？ 主人たるあなたが、道具でしかない僕を……？

ハルユキは息を呑み、激しく首を左右に動かした。

「だ……ダメです!! そんなのダメだ!! そんな力があるなら僕が使います!! それで、僕があなたを守る!! 僕はあなたの駒なんだから……当然僕が守らなくちゃだめなんだ!!」

短い両腕を伸ばし、必死に叫ぶ。

「教えてください……最後の方って、どんなものなんですか! どんなコマンドで使うんですか?」

「駄目だ。このコマンドはレベル以上でなければ使えないし、蓄積ポイントの九十九％を消費するからな。それ以前に——私はキミの（眼）だ。眼が（子）を守らなくてどうする」

「で……でも……でも、でも!!」

「そんな顔をするな。私にも……この状況に、ひとつだけ救いがあるのだから」

「ま……す、すくい……?」

「うん。今この瞬間まで、そして私の最後の言葉としてならば、キミは私の言うことを信じ

てくれるだろうか？」

黒雪姫はそつと両手を持ち上げ、開いた掌を重ね合わせて、自分の胸に当てた。胸を閉じ、唇に雲がはこぶような微笑みを浮かべ――。

ひと言、ひと言、宝石をこぼすがごとく、ゆっくりと言った。

「ハルユキ君、私は、キミが好きだ」

持ち上がった睫毛の奥から、黒い瞳が、無限の輝きを秘めてハルユキを見つめた。

「生まれてはじめての感情だ。まったく制御することができずに途惑うばかりさ。学校にいるときも、家でベッドに横になっても、いつでもキミのことを考えて、うれしくなったり、悲しくなったりしているよ。これが恋というものだったんだなあ……なんて素晴らしい……奇跡なんだろう」

きゅ、と胸の前で両の手を握り締め、黒雪姫はにっこりと笑った。

その笑みは、暖かく、優しく、心地よく、しかし引き裂くような痛みを伴って、ハルユキの胸を貫いた。

信じたい。信じたい。

信じたい――。

アバターの服から溢れた涙が、強すぎるエフエクトでハルユキの視界を歪ませた。

ぐいっとそれを拭って、間近にあるふたつの瞳を見つめ返し、ハルユキは掠れた声で叫んだ、



「どうして……なんて、僕なんです。こんな……こんな、僕を、どうして」

「ン、理由か、理由は教え切れないはあるが……いや、恣に理由などいらないとも思うが、そうだな、じゃあ、きっかけだけ教えよう」

微笑みながら、黒雪姫は両手を伸ばし、ハルユキの肩に乗せた。

「ハルユキ君。私とキミのファースト・コンタクトを覚えてるか」

「はい……もちろん、勿論覚えてます。ローカルネットの……バーチャル・スカッシュの部屋で、あなたは僕に言ったんだ、この先に、加速したくはないか、って」

「そうだったな。あのゲームの、私が出したハイスコアな……」

笑みが、少しだけ悲観っぽいものに変わった。

「あれな、〈加速〉を使ったんだ」

「あ……え!?」

「そうでなければ、とてもあんなスコアは出せなかった。キミの興味を引き、獲得しやすくなるためと思って、どうしても更新したかったのね。……私は……」

そこで少し言葉を切り、黒雪姫は視線を加速世界の空に向けた。

「私は六年前、わずか八歳のときにバーストリンカーになった。以来ひたすらに強さと速さだけを渴望し、敵え切れぬほどの敵を斬り倒してレベル9となり、それでも飽き足らず友の血にまでこの両手を染めた。そんな私ですら、キミが刻んだハイスコアには到底及ぶことはできない」

表情を改め、力強い瞳でハルユキをまっすぐに射て、黒雪姫は鋭く言葉を口にした。

「いいか、ハルユキ君、キミは速い。誰よりも速くなれる。私よりも――俺の王たちよりもね、速いこそがバーストリンカー最大の力だ。いつかキミは、加護世界最速のリンカーとしてあまねくその名を知られるようになるだろう。王たちを倒し、その地平すら越えて、ブレイン・バーストの根源へと達するだろう。そして知る。人に……我々の脳と魂に秘められた、究極の可能性を」

ゆっくりとひとつづつ頷き、黒雪姫はさらに続けた。

「私は……私は、キミがあのゲームをプレイする姿を見て震えたよ。かつてないほど戦慄し、また感動した。人は、これはど遠くなれるのかと。エウレカ……我ついに見出した、停滞した世界を再び加速する真の王を、と胸のうちで叫んだよ」

もう、ハルユキは呆然とその言葉に聞き入ることしかできなかった。

僕が、誰よりも速い……

にわかには信じられないことだった。だが、いまこの状況で黒雪姫が告げる言葉を、一片たりとも疑うことは許されなかった。それだけは絶対にしてはいけないことだった。

「でも、そんなにも強い力と可能性を秘めながら、現実のキミはとてつラジキイルで……切ないほどに痛々しくて、私は胸が引き裂かれるようだった。未来の王に躍きたい。しかし同時に、キミを守って、包んであげたい。そんな相反する気持ちがあるとんだ膨れ上がって……気付いたら、

キミしか見えなくなっていた。悲しいんだ。気付いたのは、ようやく昨日のことだったか」

「きの……どう？」

「うん。キミが、倉嶋君の話をしたときにね。どう言ったらいいのか……感動する、というの  
も生まれて初めてのこととて、自分で自分が割割できなかった。それで、あんな態度を取ってし  
まった。今朝も、だけどな。気付くのが遅すぎたかな……いや、遅かったが、すぎるというこ  
とはないな。こうして……」

ハルユキの両肩に乗せた手にすしだけ力を込め、顔を近づけて、黒雪姫はにこっと笑った。

「告白できたんだから。叶うならば、ちゃんと現実に向き合って言いたかったか」

きらめく凍雪の瞬に、不意に珠のような涙がわき上がり、雪となって目尻に溜まった。

「さあ……そろそろ、お別れだ」

「何を……何をする気なんです。いやだ……お別れなんて、そんな……」

息を吞み、首を振るハルユキに向かって、言い聞かせるように最後の言葉が掛けられた。

「頼んだぞ。強くなれ……そして速くなれ。私のかわりに（土）たちを倒し、頂点に上り詰め、  
私の見たかったものを見してくれ」

「だめだ……だめだ!!」

ハルユキは悲鳴にも似た叫びを上げた。

「そんなのないですよ!! そんな……あなただけ行っちゃうなんて駄目だ!! 僕が守ります

……それができないのなら一緒に行く!! 置いていかないでください……僕は、僕はまだあなたに、何も……何ひとつ……」

鳴咽まじりの声を連らせるハルユキの口を――

そっと近づけられた、黒雪姫の唇が寒いだ、

假想のアバター同士ではあるが、その感触は何よりもやわらかく、何よりも暖かく、何よりも優しかった。

現実世界では数十分の一秒、そしてハルユキの主観では永遠にも等しいキスのあと、ゆっくり唇を離し、黒雪姫は囁いた。

「いつかまた……きっと会えるさ」

さっ、と立ち上がったその軌跡に、零れた涙の粒が銀の輝きを連ねた。

迫りくる乗用車に向かって、毅然と立ちほだかる黒雪姫の背中には、凄まじいほどの意思力がオーラとなって立ち上っていて、ハルユキは動くことも、声を出すこともできなかった。

両手を大きく広げ、背筋をびんと伸ばし――

黒雪姫は、漣と声を響かせた。

「フィジカル・フル・バースト!!」



バアア……………」

と、眩い白光に包まれて、黒雪姫のアバターが産声した。

何だ、何が起きたんだ。

混乱と焦燥、そしてそれらを圧倒するひとつの名づけられない感情が露発し、ハルユキは頭を振り絞って叫んだ。

「先輩!!」

再び涙が溢れ、歪んだ視界に平衡感覚を失って、後ろに数歩よろめく。

そして、ハルユキは信じられないものを見た。

黒雪姫が——青い透過エフェクトのかかった、現実の黒雪姫の体が、動いている。

迫りくる乗用車から、現実のハルユキを挟んでさらに後方に立っていたはずの黒雪姫が、現実世界における走行の一例ほどの速度ではあるが確かに連続的な動きで足を前に出し、地面を蹴り、前進していく。

こんなことが——あるはずがない!!

ブレイン・バースト・プログラムは、心拍を発生源とする量子的信号を一千倍にオーバータロクシ、使用者の意識のみを加速する。

その影響は、逆に言えば、肉体には一切及ぶことはない。ゆえに加速しても、体はもちろん目線すら動かすことはできない。だからプログラムは加速と同時に、使用者の意識をフルダイ

ブさせて肉体と切り離し、ソーシヤルカメラから生成した擬現実（ミミ）につなぐのだ、

なのに今、生身の黒雪姫は、加速中のハルユキからも明らかに視認できるほどの速度でその体を動かしている。水色の全身のそこかしこが、時折流れるようにブレるのは、ソーシヤルカメラの撮影速度を超えているせいだ。

つまり――現実世界の彼女は、常人の百倍という超スピードでダッシュしているのだ！

これか、ブレイン・バースト最大最強の力なのか。意識だけではなく、肉体全てをオーバークロックする、まさに緊縮のコマンド。

そんなことをして、体が無事で済むはずがない。

突進する黒雪姫の表情には、毅然とした決意とそしてもうひとつ、何かに全精力を振り絞って耐えているかのような強張りがあった。

それはおそらく、激痛だろう。

本来有り得ない速度で駆動される筋肉と関節が、いつせいに悲鳴を上げているのだ。

しかし、黒雪姫は止まらない。

一步、二歩、三歩目で、現実のハルユキの左横に重んだ。

もう、荒谷の運転する車のフロントバンパーは、ハルユキからはんの八十センチほどしか離れていない。

黒雪姫は両手を持ち上げ、まるで抱きしめるかのように、そっとハルユキの体に添えた。

わずかに力が込められ、真横に押されたハルユキの体が動きはじめ——。

同時に。

全身に凄まじい衝撃を感じ、視界がブラックアウトした。

黒雪姫の動作は優しかったが、現実世界では猛スピードで体当たりされたに等しい。そのショックでニューロリンカーの安全機構が働き、自動的にフルダイブを解除したのだ。

瞬間、間に流んだ視界の中央から、放射状に引き伸ばされるように原色の現実が崩れてくる。

ハルユキは一瞬にしてアバターから生身の肉体へと復帰し、その途端背中から鎧装に叩きつけられて息を詰まらせた。

もう一度空気を吸うことすらも忘れ、眼を見開いたハルユキのすぐ前で——。

両手を差し伸べた格好のまま、黒雪姫が、にこりと微笑んだような気がした。

直後、猛烈と歩道に突っ込んだ白い乗用車が、黒雪姫の細い体を抱え込んだ。

バンパーに両脚をすくわれるようにボンネットに乗り上げ、フロントウインドウにぶつかり、さらに高く跳ね上げられる。

長い黒髪が円弧をえがいて宙に流れ、

夕陽を受けてオレンジ色に輝いて。

そのかたわらを、抜け落ちた直結用ケーブルが、白く舞った。



ハルユキの神けた意識は、そのあと起きた出来事を、三つの色のイメージとしてしか記憶できなかった。

歩道の煉瓦れんがタイルに横たわる、不自然に振れた華奢な姿の——黒。

体の下に、恐ろしいほど大量に広がる血の——赤。

閉じられたままでの輪りんし、血色の失せた頬ほの——白。

止血に使ったネタタイも、ハルユキ自身の手も、瞬とく間に赤に染まった。

店舗の壁に激突した白い車の運転席から、噴笑くうせうしながら這い出してきた荒谷の服も赤だった。赤いランプを瞬かせながらバトカーが駆けつけ、笑い続ける荒谷を座席に押し込んだ。

直後、同じく赤い回転灯を載せた白い救急車も到着し、降りてきた白い男たちがストレッチャーに黒雪姫くろゆきひめを固定した。促されるままハルユキも同乗し、車が猛スピードで走り出して——。そして今、ハルユキは、白一色の廊下の片隅で、E Rの赤い手術中ランプを見上げている。

これから先のことを、ハルユキはまったく考えられなかった。

廊下に浮かんでくるのは、ただ、黒雪姫と出会ってからの四日間におけるあらゆる瞬間の

リブレイだった。

あの時も——あの時も、あのときも、ハルユキには異なる選択ができたはずだった。そしてそちらを選んでいれば、この事態は回避できた。

黒雪姫が差し伸べてくれた手、示してくれた気持ちも、なぜ、ほんの少しだけでも信じようとしなかったのか。頑なに下を向いたりせず、素直に受けとめていれば、道路であんな言い合いなどしていなかっただろうし、接近してくる車にも気付けたはずだ。

……僕は、これまでの人生で何度も繰り返ししてきた間違いのなかでも、いちばん取り返しのつかない過ちを犯してしまった。

待て散った意識のかげらひとつひとつの中で、ハルユキはあらゆる分岐点に通り、違う未来へ進もうとしたが、いかなブレイン・バーストでも過去を変えることだけはできない。

どれほどそうしてランプを見上げていただろうか。

手衝中表紙は点いたままだが、不意にドアがスライドし、ひとりの女性看護師が出てきた。そのまままっすぐに近づいてくる白衣の姿を、ハルユキはただ見つめた。

看護学校を出たて、という感じの若い看護師だった。綺麗にそろえられた前髪の下に、張り詰めた表情を浮かべる相手に向けて、ハルユキの口からはとんだ勝手に言葉が流れ出た。

「どう……なんですか？」

「先生も、余斯塔ップも最善を尽くしています」

看護師の声はわずかに涼れ、強張っていた。

「でも……傷ついた臓器が多すぎるんです。補修用マイクロマシンをフル投入して、どうにか客観の悪化を遅らせている状況です。それで……そのね、ご家族に……連絡を取りたいんですけど、あの子のニューロランカーに緊急連絡先が登録されてないの」

「え……」

言葉が失うハルユキの隣に腰掛けた看護師は、身を乗り出し、それでね、と続けた。

「君が、あの子のおうちの電話番号を知らないかと思つて。君は……あの子の……」

聞いけるような語尾に、しかしハルユキはすぐに答えられなかった。

僕は、あの人の何なのだろう。駒、手先。そんな言葉はもう使いたくない。でも、友達、先輩後輩、いままらそんな言い方もしたくない。

口を開いたハルユキは、一瞬の間のあと看護師が口にした言葉を聞いて、思わず顔を上げた。

「……彼氏くん、なのよね？」

「えっ……な、なんて」

奇跡的に傷ついた様子はなかった黒雪姫の笑顔と、ハルユキの体格容貌を見てそんなふうに推測し得る材料はなにもないはずだ。

反射的に体を縮めたハルユキに、そつと差し出されたのは一冊の小さな手帳だった。

青い合成レザーの表紙に、全てエンブレムが捺されたそれは梅郷中の生徒手帳だ。

「運路光を探してあの子の私物を確認したときに、つい見ちゃったの。ごめんなさいね」

強張った髪にはんのすこしだけ微笑みを浮かべ、看護師は生誕手帳の最終ページを開いた。左側のクリアポケットに、黒雪姫の顔写真入りの学生証。

そして右側に、見慣れた、丸い顔があった。

震える手で手帳を受け取ったハルユキは、固の抜けた表情で写る自分の写真に見入った。あの時の――ラウンジで、ハルユキが黒雪姫の最初の〈告白〉を聞いた時の世界キヤプチャ画像をプリントしたものに違いなかった。

ぼたり、と音を立て、写真の表面にひとつぶの水漬が落ちた。

それが、自分の目から溢れ出たものであることに、ハルユキはしばらく気付かなかった。

「先輩……黒雪姫せんばい」

泣いた声は大きくわなわなしていた。子供のような号泣に変わるのに、時間はかからなかった。う……っ……ああ……うああああ!!」

手帳を胸に抱き、身がかがめて、ハルユキは泣いた。

涙はあとからあとから溢れ、頬を伝って床に落ちた。挟まれるような胸の痛みのおくに、ハルユキは今この瞬間になつてはじめて、自分の本当の気持ちを見つけ出していた。

手帳は五時間近くも続いた。

視界のすみの時刻表示が夕方から深夜へとうつりかわる間、ハルユキはいちど母親に、友達が事故に遭ったので今夜は遅くなるか、あるいは帰らないというテキストメールを送信しただけで、あとはただひたすら椅子に座り続けた。

黒菅煙の家のほうは、学校経由で連絡がついたらしいが、驚いたことに家族ではなく顧問弁護士という男がひとり現れただけだった。

大型ニューロランカーを装着した、自身も機械であるかのような中年の弁護士は、事務的に手紙だけを預めると、ハルユキに一言もくれないことなく十五分ほど立ち去った。長い長い時間が過ぎ、ようやく赤いランプが消えたのは、二十二時を回りうという頃だった。疲労困憊した様子で出てきた若い医師は、廊下にいるのがハルユキひとりであることに多少途惑った様子だったが、それでも丁寧な口調で客室を説明した。

止血には成功したが、臓器の損傷は広範で、いつショック状態に陥ってもおかしくないこと、合成蛋白マイクロナシン群が全力で組織の修復・同化にあたっているが、最終的には患者の体力次第であること。

「……つまりと、現在の客室は重症」と言わざるを得ません。今後十二時間が峠……と思ってください」

厳しい表情で言い終えると、医師はスタッフたちと白い廊下を去っていった。  
一人残ったのは、先刻の女性看護師だった。

ハルユキの手に握られたままの生徒手帳をちらりと見ると、看護師は優しい口調で言った。

「君も……もう、帰って休んだほうがいいわ。明日には、あの子の二家族がどなたか来てくださるってことだから」

「明日じゃ……遅いでしよう」

ハルユキは、この場所から一歩も動く気はないという頑なな態度を示しながら答えた。

「先生は十二時間が峠だつて帰ってきました。先輩ががんばってるのに、誰もそばに居ないなんて、そんなの……酷すぎますから」

「……………そう……。そうよね。おうちには連絡したの？」

「はい。……どうせうちの親、一時くらいまで帰ってこないですけと」

「わかった。じゃあ、毛布もってきてあげるから、ちよつと待ってて」

足早に廊下の奥のナースステーションに去り、すぐに戻ってきた看護師は、ハルユキに薄手のブランケットを渡しながら、しっかりと頷いた。

「だいじようぶ、あの子はきつとよくなるわよ。あんなに可愛いんだし……君みたいな素敵なお嬢さんもいるし。楽しいこと、全部これからだもんね」

本当に——あなたが思っているより何倍も（全部これから）なんだ。（シアン・パイル）を倒し、王たちのレギオンを一つずつ壊滅させて、あの人が目指した場所へ行くんだ。もちろん、僕も一緒に。

瞬間的にそう思いながら、ハルユキは言った。

「あ……ありがとうございます、あの……先輩には、いつ会えますか？」

「今は無理ね、マイタロマシン・オペレーション室はエアシールされてるから。でも、院内ネットワーク経由で映像だけは見られるわ。いまだけ、特別よ」

看護師は微笑み、空中で指先を離らせた。さつ、と何かを弾くしぐさと同時に、ハルユキの視界にアタセスゲートが表示される。

グローバルネット切断中なのに、看護師のニューロリンカーと無線交信したことにハルユキは少し驚いたが、すぐにそれが病院のローカルネットを介したものであることに思い至った。

アイコンをクリフタすると、動画ウインドウが開いた。画面は薄暗く、不鮮明だったが、目を凝らすと中央に映る異様なかたちのベッドに気付いた。

上面が半分だけ開いたカプセルのようだ。内部には半透明な液体が満たされ、そこに浸された白い体が、肩のすこし下まで見て取れる。

両腕と口に繋がれたチューブが落々しい。輪は閉じられたままびくりともしない。

「先輩……」

ハルユキは思わず囁き声で呼びかけた。

いま、あの華奢な体の内側では、無数のマイタロマシンと本人の生命力そのものが、巨大な損傷と戦っているのだ。その戦いには、ハルユキは何の助力もできない。唯一、祈ること

のはかには何も。

「大丈夫よ。きつと助かるわ」

看護師はもういちど繰り返し、ハルユキの背中をそつと一度きすると、体を起こした。

「状態は詳細にモニターしているから、何かあったらすぐ来るわ。君も少し休みなさい」

「はい。あ……あの、ありがとうございます」

立ち去ろうとする看護師に、そう礼を言い、頭を下げかけたハルユキは――。

視界右側に表示された動画ウインドウの、ある一箇所にふとした引っ掛かりを覚えた。膨大（びようだい）な仮想ゲーム体験で磨かれた勘（かん）が、見るべきもの、考えるべきことの存在を囁（ささや）いている。

何だ――いま、僕は何を見たんだ？

肩までが露（あら）わになっっている黒雪姫（くろゆきひめ）の裸身。しかしたった一つ、身につけたままのものがある。半透明の液体に沈んでよく見えないが――あれは、あの首の後ろの黒いものは、ニューロランカーだ。そして、その直結コネクタに繋がる、一本の細いケーブル。酸欠チューブと平行してベッドの外に伸び、機（き）らの大型機械に接続されている。

「ちよ……ちよつと待ってください」

早口で呼び止められた看護師は、首をかしげながら振り返った。

「どうしたの？」

「いえ、その……黒、いや先輩のニューロランカーは、装着されたままなんですか？」



「そうよ。廳役のモニタリングをしているから」

「じゃあ、あの……ケーブルで繋がってる機械は、スタンドアローンじゃなくて……」

「勿論、院内ネットに接続しているわ」

——なんだって？

息を呑むハルユキを見て、訝しげな表情になった看護婦は、安心させるように微笑んだ。

「どうしたの、セキユリティを心配しているの？ 大丈夫よ、院内ネットの医療レベルはものすごい助壁の向こうなんだから。あの子に悪さできるハッカーなんていないわよ」

じやあね、と手を振り、ナースステーションに消えていく看護婦の背中に、ハルユキは内心で呻くように告げた。

——普通は、そうだろう。でも、アレは、普通じゃないんだ。国内最強の助壁を備えているはずのソーシヤルカメラネットに容易く侵入し、リアルタイム映像を送るアレ……。

ブレイン・パーストだけは。

廊下に独りになったハルユキは、左手にブランケットを抱えたまま、とざりとベンチに腰を下ろした。

黒雲殿のニューロシンカーは、グローバルネットからは完全に切断されている。しかし、治療のためとは言い直結によって院内ネットには接続されてしまっている。——つまり、

震える声で、ハルユキは呟いた。

## 「バースト・リンク」

脚座にあの音とともに、世界が凍った。

ブタアバターの姿でよりりと立ち上がったハルユキは、折るような気持もて假想デスタトゥ  
ブ左側に重ぶアイコンのなから、めらめらと燃え上がる日マークをタリクタクした。

ブレイン・バーストのコンソールが起動し、マッチングリストが開く。

サーチング表示に続き、リストの一番上に、《ヘルパー・タロウ》の名が出現する。  
そして、わずかな間を置いて——《フラック・ロータス》の名前も。

「う……ウソだろ……」

ハルユキは叫んだ。

自分は、ニューロリンカーを操作して院内ネットを切ればマッチングリストから消えること  
ができる。だが、脳波モニタリング中の黒雪姫はそうは行かない。

もちろん、ドロイバルネットに繋がっているわけではないので外部から無制限に乱入される  
ことはない。しかし、もしこの病院内にバーストリンカーがいれば——そしてそいつがブレイ  
ン・バーストを起動し、《フラック・ロータス》を見つけて対戦を挑めば——。

意識のない黒雪姫は、ただ睨られるしかない。

いや、まさかそうそう都合よく、同じ病院にバーストリンカーが居たりするわけもないだろ  
う。この時間ならもう人の出入りはないはずで、もし現在ハルユキと黒雪姫以外のバーストリ

ンカーが院内ネットに接続していれば、そいつの名前もリストに出現していなくてはならない。だから、見る必要はないんだ。

ハルユキは自分に言い聞かせようとした。しかし、アバターの丸っこい手に滲む汗の感触は一向にまろうとしない。

ちがう——まだだ。まだ僕は何か見落としをしている。

もしも……加速世界最大の賞金首である《フラタ・ロータス》が大怪我を負って入院していること、そしてその病院までも知りうる立場のバーストリンカーがいたら？

いるわけないそんな奴、と思考を続けようとして、ハルユキは深い戦慄と共に目を見開いた。いる。たったひとりだけ、それが可能な敵が。《シアン・バイル》。

チユリのニューロリンカーに仕掛けられたウイルスまでしかその正体を辿っていない謎の敵。現段階では、梅郷中の誰か、としか言えない。

そして、思雪姫の事故はもう学校に連絡されているのだ。その原因が、保釈直後の荒谷が無免許運転の車を使っ込ませたこととくれば、これはもう大ニュースだ。今頃この話題は、原

原の大事のように梅郷中の生徒のあいだを駆け巡っているに違いない。

病院までは、まだ特定されていないだろう。もし下級生女子の暴行者、あるいはフアンタラズ会員などが入院先を知れば今頃山ほど押しかけてきているはずだ。

だが——教師はもう知っている。となれば、生徒に広まるのも時間の問題だ。見舞いの生徒

たちが大勢して現れ、その中に《シアン・バイル》が混じっていれば、特定は困難だ。

止むを……得ないのか。

ハルユキはがっくりと肩を落とし、青く凍る現実の自分の隣に座り込んだ。

黒雪姫は、いま生命の危機と戦っているのだ。考えようによっては、《対戦》どころでは無いのもまた事実だ。

幸い、同じ相手に対戦を挑めるのは一日一度の制限がある。黒雪姫の容態が回復するまで、《シアン・バイル》に二、三度敗れポイントを取られるのは仕方がない――。

いや――黒雪姫が僕は!! あの時、黒雪姫は何と言った!?

ハルユキは胸を握り締め、がばつと立ち上がった。

ハルユキを救うために使用した最終コマンド、《ファイナル・フル・バースト》。

意識だけでなく生身の肉体をも加速するというその超絶的効果の代償は、バーストポイントの九十九%を失うこと。

いま現在、黒雪姫のポイントが消費寸前なのだ。恐らくたった一度でも、レベル的には格下の《シアン・バイル》に敗れば、呆気なくゼロになってしまうほどに。

そして、その瞬間、黒雪姫のブレイク・バーストは強制アンインストールされてしまう。

それは、あの人間にとっては……ただレベル10の先にたどり着くために戦い続けてきた黒雪姫にとっては、ほとんど死と同義ではないのか。

だめだ、それだけは絶対にだめだ、《シアン・パイル》には、一度でも黒雪姫と対戦させるわけにはいかない。

黒雪姫は、命を賭して守ってくれた。

だから今度は、僕が守るんだ。あの人の半身を。

たった今から、一瞬もせず、病院のエントランスを監視しつづける。全ポイント消費を覚悟で、梅郷中の生徒が現れるたびに《加速》し、《シアン・パイル》を見つけ出し捕獲する。

そして――倒す。ポイント枯渇寸前の奴を倒して、永遠に加速世界から葬り去る。

「守る。絶対に、守ります」

ハルユキは、自分ひとりだけの青い世界で、声に出して言った。

「なぜなら……僕は……。僕は、あなたに言わなきゃならない事があるんだ。もう一度会えた、その時に。だから、今度は、僕が戦います」

青い壁の向こうに横たわっているはずの黒雪姫に視線を向け、ハルユキはしっかりと告げた。

バーストアウトのコマンドとともに現実に戻帰したハルユキは、ベンチの上で膝を抱えて横向きに座り、ブランケットを体に巻きつけて、じっと座下左奥のエントランスを監視した。

病院の入り口はほかにもあるが、院内ネットワークに接続するためにはエントランスでニューロティンカーを認証せねばならない。だから、《シアン・パイル》は必ずあそこに戻れるはずだ。

時刻は夜十時半。

面会時間もとうに過ぎていているこの時間に現れる可能性は低いが、相手も追い詰められている。確実に黒雪姫の意識がない状況を狙うなら、病院の名を知り次第襲ってくることもあり得る。

ハルユキはニューロサンカーを操作し、管轄アラームを最大音量でセットした。これで、眠りそうになったら死ぬほどやかましいベルが鳴ってたたき起こしてくれる。

この夜はど進み方の遅い時間を過ごすのは、ハルユキの人生で初めてのことだった。

しかし、翌日はもちろん眠いと思うことすらなかった。ハルユキは見慣れた服を、ほとんどの時間セントランスの薄闇に向けつづけ、そしてたまたに小型化したE.R.の映像窓に走らせた。

カプセルベッドに横たわる黒雪姫の白い体はびくきとも動かないが、そこでいま必死の喊いが行われていることをハルユキはありありと感じた。

がんばれ。がんばれ。

ハルユキは、映像を視るたびに、心のなかでそう念じた。自分とあの人は、互いのニューロサンカーと院内ネット、そして、フレイン・バースト・プログラムの通じて繋がっている。だから、揺りもきつと届くはずだ。ハルユキは、疑いもなくそう信じた。

午前一時頃、心配顔の看護婦さんがコーヒーマシンの紙コップ片手に種子を見にきてくれた。ミルクと砂糖を断り、生まれてはじめて飲んだブラックコーヒーマシンの味は舌を刺すほど苦かった。

午前五時、エントランスに最初の曙光がほんのりと差し込んだ。ハルユキはしばし迷ったあと、ダッシュでトイレに行き、人生最後の処理時間に出てくるとふたたびベンチに丸くなった。午前六時、ちらほらとフロアを行き交う職員が増え始め、ハルユキはひととき警戒を強めた。午前七時、業務を終えた夜勤スタッフが陸々と帰宅していく。あの看護師さんも、二杯目のコーヒートゥンドイツチをハルユキに差し出し、暖かい言葉を残して去っていった。

午前八時半――

夜間受付に替わって、病院の正面出入り口の自動ドアが開放された。

それを持っていたかのように、数人の、主に年配の患者らがエントランスに入ってくる。

ハルユキは、一瞬覚えてきた気がする面影をいっばいに見聞き、じっと人の流れを睨んだ。

いかに入学から半年も経っており、そして一学年三クラスしかない小規模な学校だと言っても、さすがに舞舞中の全生徒の顔を覚えてはいるわけではない。確信のない若者の顔を見たときは躊躇せず加速し、マツチンダリストを確認せねばならない。

集中力をぎりぎりまで張り詰めたハルユキの視界のかたすみで、デジタルの時刻表示が、あざ笑うかのようにゆっくり、ゆっくりと数字を変化させていく。

三十五分、四十分。

黒雪姫はまだ重篤状態を脱しないのだろうか。医師が告げた十二時間のうち、すでに十時間以上が過ぎ去っている。

早く意識を回復してくれ。そして麟モニタリンドが解除されてくれ。

ハルユキは懸命に祈った。

もういちど——もう一度、二人きりの加速世界であの人に会いたい。

そして今度はそうなんだ。自分の気持ちを、心の底から打ち明けるんだ。

八時、四十五分。

ハルユキは、ついに、警戒について初めて視線の先に見覚えのある顔を確認した。

一瞬、息を吞み——次いで、ふつと長く吐き出す。

見覚えのあるところではない。世界で最も長い時間見てきた、二つの顔のうちの「一つだ」。

すらりとした容姿のいい長身を、大人びたベロアのジャケットとチノパンに包んでいる。エア

リー感のある髪が、朝の光に透けてブラウンに輝く。

来てくれたのか……。

ハルユキは肩の力を抜き、少し顔を綻ばせた。

「おーい、タター、こっちだ！」

廊下からエントランスホールに、ハルユキの、病院で出すにしては少し大きすぎた呼びかけ

が届いた瞬間、タタム——警拒武は、踏み出しかけていた右足をびたりと停止させた。

どうやら向こうは、まだハルユキを見つけていなかったらしい。視線を左右に走らせて、よ

うやくエントランスの一番奥から緊急救命室に繋がる廊下にまっすん向き直った。



ベンチから降り、もう一度手を振ったハルユキと目を合わせ――。

タタムは、少しだけ首を傾け、数回激しく瞬きをして、  
にっこりといったものもある、快活な笑みを浮かべた。

ネイビーブルーのジャケットの右腕をさつと挙げてみせてから、その指先でとんとんと自分の青いニューロリンカーをつつく。

院内ネットに認証されるまで待つて、という意味だと、ハルユキはすぐに察した。同時に、相違わず几帳面な威厳（オウゴン）な面（オモテ）を、と微苦笑する。

来院目的が受診、見舞いにかかわらず、エントランスから奥に進むにはニューロリンカーを病院内ネットにサインインさせるか、受付で身分証を示してタダブレイトをもらう、というのは全国の病院共通の規則だ。

しかし、厳重な認証が終わるまでのたった二十秒を、エントランスに立って待つか、移動しながらで時間を節約するかは、大した違いではない。現にハルユキが昨夜ここに来たときは、一瞬たりとも立ち止まらず巨匠前まで走ったので、認証が終わったのは照雪姫（テラユキ）がドアの向こうに消えてからだった。

しかしタタムはそんな些細な規則違反でも観す気はないようだ。ハルユキに視線を向け、もどかしそうな顔をしながらも、エントランスの真ん中に立ってサインイン完了を待っている。と、不意に、何かに気付いたというふうに、タタムがくると体を横に向けた。

視線を自動ドアのほうに流し、誰かに大声で呼びかけるときのように、左手を口元に添える。チユリが来たのかな、とハルユキは思い、自分も正面出入り口の向こうを見送ろうとした。タタムから目線が離れる、その寸前。訪れた、かすかな違和感。

あの、ハルユキと違って品行方正なタタムが、病院で大声を出すだろうか。

メガホンがわり、というよりも、まるで——自分の口を、そこから発せられる言葉を、ハルユキに、隠そうと、するかのような。

瞬間、違和感が瞬間に変わった。来てできた針が、ハルユキの脊髄をまっすぐに貫いた。目を見開き、棒立ちになりながらも、脳裏にいくつかの思考が同時に閃く。

僕は——なぜ暇が、(シアン・パイル)が、梅郷中の生徒の誰かだと判断したう。

もちろん、チユリのニューロリンカーにウィルスを仕掛けたからだ。チユリを踏み台にして、学内ローカルネットのどこから跳躍のように黒雲姫を襲っていたからだ。

でも、もし、あのバックドアがダローバルネットからのアタセスのために造られたものだとしたら？ その場合、客疑者は梅郷中内帯ではなく、全国に広がってしまう。

しかし、同時に新たな収り込みファイルも出現する。

なぜチユリなのか？ もちろん、接触しやすいからだ。

学外の人間で、チユリに最も近い者。チユリのニューロリンカーと直結できるほどにそばに居る、誰か。その条件に当てはまる人間は、一人しかいない。いまこの瞬間、わずか二十メ

―トル先に立っている―

思考がそこにまで到った瞬間、ハルユキの口が自動的に動き、コマンドを送らせていた。

「バースト・リンクタ!!」

―チユリの幼馴染であり恋人でもある少年、タム。

バシイイイイイッ!!

冷たく乾いた雷鳴が世界を凍らせた。

視線の先のタムもまた、左手を口元に掲げた格好で、青く固まっている。

しかも、実際はそうではないのだ。あの掌の中で、タムも同時にコマンドを駆えている。

そして意識は、ハルユキとは別の連結空間で加速している。

お前が、お前だったのか。まさか。うそだ。何で。何でだ。

脳裏で支離滅裂な絶叫を響かせながらも、ハルユキのアバターの右腕は、可能なかぎりの速度で仮想デスタクトアップ上に回っていた。

今この瞬間、タムも同じ行動を取っているはずだ。ブレイン・バーストのコンソールを起動し、マッチングバーストの更新を待つ。そして、触れなば落ちる果実、(フラック・ロータス)の名前をトリックし、対戦を申し込む。

それよりも先に、ハルユキは(シアン・バイル)と対戦しなくてはならない。

ハルユキは歯を食いしばり、目を見開いて、マッチングバーストのサーチング表示を凝視した。

ばつ、と一番上に自分の名前、《シルバー・クロウ》。

次に、守るべき最愛の人、《フランク・ロータス》。

そして最後に、戀すべき敵の名前が、ついにハルニキの眼前に初めて現実の文字列として出現した。《シアン・バイル》。

間に合え ― フロ

全身全霊の気合を込めながら、ハルニキは超高速で名前をクリフタし、ポップしたウインドウからデュエルのコマンドを叩いた。

バキバキバキバキッ

一瞬の間に続いて、世界に響き渡ったのは、無数の金属塊が軋むような異質な震動だった。

エントランス正面から差し込んでいた、爽やかな朝の光が気味の悪い黄色へと変質する。

周囲の床や壁が、ハルユキの足元からどこか生物めいたぬめりや質感のある銅色の金属に覆われていく。柱は昆虫の腹のように節を作ってよじれ、天井には奇怪な眼珠に似た突起が幾つもボコボコと浮き上がる。

あれほど清潔だった最先端病院の内部が、古典サイバーパンク作家の悪夢のような有機金属的汚濁に包まれるまでに、数秒とかならなかった。

息を詰めて立ち尽くすハルユキの体が、四肢の末端から白銀に輝く装甲に覆われはじめ、同時に針金のように細く絞られていく。

腰から腹、胸も滑らかな銀へと変わり、最後に頬も丸いヘルメットに包まれる。

桃色フタアバターから、デュエルアバター（ヘルパー・タロウ）へとハルユキが変身したのとは同時に、ぎゅっ！と音を立てながら、視界上部に二本の体方ゲージが伸びた。

ゲージの間に、1800の数字。

そして最後に、中央にこうつと炎が燃え上がった。その奥から出現した（FIGHT!!）の文字が、真っ赤に輝き、爆散した。

減少を始めるカウントをもちろしと見て、間に合った、と息をついてから、ハルユキは改めてぬらつく通路の先、タタムが居た場所を見やった。

まさに同じ所に側面を向けて立っていたのは、思いもかけぬ姿のデュエルパイターだった。あれが……タタム!?（シアン・バイル）だって!?

ハルユキは驚愕のあまり、思わず半歩右脚を引いた。

巨大だ、いや、身長はそこまではない。中一で百七十五センチもあるタタムより、さらに五センチほど高いだけだ――、と言ってもせいぜい百五十五ほどしかないシルバー・タロウからすれば見上げるようだが。

しかし、何より圧倒的なのは、シアン・バイルの全身のとてつもない厚みだった。

太っている、というのとは違う。まるでプロレスラーのようにこつこつと筋肉の盛り上がり、た四肢と体幹、それを、メタリクタブルーのびっちりとしたボディースーツ型装甲が包んでいる。

足にはダークブルーのこついブーツ。左手にも同色の巨大なグローブ。

まるで、アメリカンコミックタのマッチャコ・ヒーローだ。すらりとしたスリムなタタム本人とは、イメージが百八十度違だ。

どうしようもなく威圧され、立ち尽くすハルユキに。

ゆっくりと体を左に回したシアン・バイルの視線が、正面から注がれた。

シアン・バイルの頭部は、そこだけはスマートな顔鏡形のマスクに覆われている。顔面には、横に細長いスリット状の隙間がいくつも開き、中央を縦に一本の支柱が貫いている。見ようによつては、どこか剣道の面を連想しなくもない。

一本のスリットの奥で、突然どカッ! と青白い両眼が鋭い形に輝いた。左胸がゆっくり持ち上がり、ずしりと床を踏みつける。溜まっていた黏液が、ぼしやりと左右に飛び散る。

さらにもう一步左胸を引きながら、ハルユキの目は露わになったシアン・バイルの右腕に吸い寄せられた。あれは——何だ?

左手のようなグローブではない。肘のところから、ぶっといバイブに接続されている。

バイブは、直径十五センチ、長さ一メートルはあるだろう。しかも開口部から、内蔵されているらしい尖った金属棒の先端が、ざらざらと剣呑な輝きを放っている。

シアン・バイルの属性は、その全身を包む装甲の色からしても、《近接の青》だ。しかも、黒雪姫にいく限りなく純色のブルーに近い。ならば、あの鋭い棒は飛び道具ではないはずだ。

と思いつつも、ハルユキはさらに一步下がらざるを得なかった。

立ち尽くす蠢蒼なシルバー・クロウをいたぶるように、シアン・バイルはゆっくり一步、また一步と有機金属の通路を詰めてくる。と、不意にその動きが止まった。





スリットの並ぶマスクが、ぐらりと南田を見回す。

その奥から流れ出たのは——陰々と正んでいるが、たしかに長年聞きたれた、親友タタムの爽やかな声だった。

「ふうん、これは（風氣）ステージかな。僕も久しぶりに見ると、個性は何だったかな？」

肩託のないその囁きに、ハルユキは思わず口を開いていた。

「た……タタ……」

ズギヤアアアッ!!

突然、振り回されたシアン・バイルの右腕の鉄棒が、廊下の金属壁に食い込み、醜く引き裂いた。飛び散った鉄片と粘液、そして潰された名も知れぬ小虫がぼたぼたと床に落ちる。

ハルユキは言葉を呑み込み、びくんと地面上がった。

その様子をちらりと見て、シアン・バイルはさらに快活な声で続けた。

「さすがに硬いな。ステージの破壊はちよつと難しいかもね」

ずしん。歩行が再開され、青い巨軀がのしかかるようにハルユキの眼前に迫る。

「ハル……、ハル。相変わらず復讐デスタトップの操作が速いなあ。あとはデユエルボタンを押すだけだったのに、その直前で乱入されちゃったよ」

「タ……タム……」

——ほんとうに、お前なのか。なんて、いつから。

一体いつから、お前はバーストリンカーだったんだ。

胸中に渦巻く疑問を口にする前に、シアン・バイルがさらに言葉を出した。

「まさか、君がバーストリンカーになるなんて……驚いたよ。昨日はさすがにちょっと冷静にやいられたかったな。親友に、あんな裏切られかたをするなんてね、ハル」

「た……タタ……。ち……違うんだ。あれは……」

擦れ声で口走ったハルユキの言葉を、再び鉄棒が壁に叩きつけられた大音響が盛き消した。

「……どうだった、ハル？ チーちゃんのパッドで直結した感じは？ 激きしめた感じはどうだった？ 僕のことを考えながら触ったチーちゃんの体はどうだったんだい？」

——タタムじゃない。ハルユキは声に出さずにそう叫んだ。

あいつは僕の知っているタタじゃない。タタはあんなこと言わない。いつだって明るくて、爽やかで、負の感情というものを一切見せない。それがタタムなんだ。

シアン・バイルは別の人間だ。きつと、タタムのニューロシンカーにもパッドアを作ってどこか遠くから接続しているんだ。

ハルユキは、懸命に自分にそう言い聞かせようとした。

しかし同時に、あのととき感じた気配が、

チユリと直結し、彼女のニューロシンカー内にウイルスを発見したとき、その奥に潜んで目を見ひらき、耳をそばだてていた何者かとまったく同質の気配が、目の前の青いデュエルバ

ダーから職務に立ち上っているのをハルユキは強く意識していた。

そして、もしかしたらそれはすつと昔、三人が小さな子供だった頃から、ふざけ合うハルユキとチユリにときおりタタムがちらりと向けてきた視線と同じものであるのかもしれない。

「タタ……、お前なのか」

ハルユキが銀面の下から発した言葉は、自分でも意外なほど鋭く、強く刺さった。

「お前がチユのニューロリンカーにウイルスを仕掛けたのか。チユに隠れて傍聴して、メモリや視聴覚を好き勝手に覗いてたのか」

「ウイルス、なんて言って欲しくないな」

ハルユキの、ほんの五メートル先で足を止めた巨大なアバターは、それだけはタタムらしいスマートな仕草でひらりと左手を広げた。

「チーちゃんは僕の彼女だよ。だから当然直結だってするさ。そして直結するってことは、自分のニューロリンカーを相手に差し出すのと同じことだ。パスワード認証を迂回させ、ローカルメモリの奥底までさらけ出して、どのファイルを見られようと、どんなプロタラムをインストールされようと受け入れるってことだよ。違うかい？ ハル、君だって……」

シアン・バイルのマスクを横切る細いスリットの奥で、見えない顔が歪んだ笑いを浮かべるのをハルユキは睨じた。

「君だって、チーちゃんと直結して、内緒でメモリを盗ったじゃないか？ しかも、彼氏でも

なんでもないのにさ。チーちゃんの不機嫌さにつけこんで汚い真似をしたのは君のほうだろ？」

「そ……それは……」

「君は昔からそうだよ、ハル」

穏やかな声でそう言いかけたシアン・バイルの右腕の壁を、奇怪な形の大きな金属虫がガサガサと通り過ぎようとした。

シアン・バイルは何気ない仕草で右腕の巨大針を持ち上げ、軽く虫の背を貫いた。壁に留められた虫はギイギイと啼きながら、逃げ出そうと無数の肢を激しく振り回す。

「ずっと、ずっと昔からチーちゃんに、僕ってかわいそうだろう？ 憐れだろう？ だから優しくしてよ。もっと構ってよ。そう言い続けてきたんだ。言葉じゃなくても、態度で、目つきで……いや、君という存在そのもので」

ふじり、と溜った音を立てて針がさらに虫の殻に沈み込んだ。緑色の液体が飛び散り、仮想の虫はいっそうジタバタともがき始める。

「女の子って解らないよね。チーちゃんは、僕に手を引かれてるときよりも、ぶつぶつ文句言いながら君の手を引っ張ってるときの方がずっと楽しそうだった。君の面倒を見て、世話を焼くのがとっても幸せそうだったよ、昔から、……知ってたかい？ チーちゃんは、どこに行くときも必ずてっかいタオル地のハンカチ持ってたんだよ。汗かきの君のためにね」

ばちやつ!!

と情氣をふるう言を立てて虫が粉砕され、濃緑色の殻と肢が粘液とともに飛び散った。

針からばたばたと虫の体液を垂らすシアン・バイルに、半ば呆然とハルユキは問いかけた。

「だからか……？　だから二年前、お前はチユに告白したのか？　あんなふうに……焦るみたい……」

「みたい、じやなく焦ってたさ。このままなら、チーちゃんは一生君の面倒を見ようとするであろ、ってね。ハルがアーカイブしてた、人骨のマンガみたいじゃ。『あなたにあたしがいい』とダメだから結婚してあげるわ』って。——ああ、もしかしたらあれも、チーちゃんを誘惑する作戦だったのかな？」

はははは、とシアン・バイルは愉快そうに、しかしぞつとするようなディストーション・エコーのかかった笑い声を上げた。

違う、ちがう——。

タタム、お前は間違ってる。チユリは、捨てない僕の世話を焼くことを楽しんでたりなんか絶対してなかった。本気で悩んで、苦しんでたんだ。

だが、その思いをどう言葉にすればタタムに届くのか、ハルユキには判らなかつた。物事の表層を見れば、タタムの言うことはある意味では事実だからだ。

立ち尽くすハルユキに向かって、さらに一步、シアン・バイルの足が踏み出された。

二年前、チーちゃんが僕を選んでくれたときは嬉しかったなあ。チーちゃんもようやく解っ

てくれた、って思ったよ。ハルの両側を見て苦勞するよりも、僕の隣で幸せになったほうがずっといい、ってことをさ。それが……現実的判断ってものだろう。」

「現実……的？」

「いつまでも子供じやないんだ、だろ？」

それは昨日、ハルユキがチユリに言った言葉だ。シアン・パイルは顔色に染まる金属針の先端を、同僚を束めるように空中に持ち上げた。

「チーちゃんだって支の子……いや、女だよ。友達に自衛できる彼氏、幸せな結婚、満ち足りた生活、そっちのほうがずっと《幸せ》だっていつかは気付くさ。だから僕もがんばったよ。死ぬほど勉強して今の学校に入っだし、毎日走りこんで体も鍛えた。ハル、君が下らないゲームをしたり、ぐうぐう寝てるあいだにね」

「お前……本気で言ってるのか」

ハルユキは、思考がまとまらぬまま、ほとんど反射的にそう叫んだ。

「本気で、チユが打算でお前を選んだと思ってるのか!?」

「打算なんて言い方、好きじゃないな。物事の公平な見方だよ」

ふふふ、とシアン・パイルはもう一度笑った。

「チーちゃんには幸せになる権利がある。成績は学年一位で、剣道では都大会優勝の僕と付き合って幸せになる権利が」

「……………」

ハルエキは鋭く息を吸い込み、ぐっと溜めた、やほり、これはタカムじやない。

これがタカムの本性だとはとても思えないし、思いたくない。何かタカムを弄めたのだ、その一端が、ハルエキとチエリの関係であることも確かだろう。チエリはタカムと付き合いつつながら、ハルエキに気持ちを置き続けた。それがタカムを追い詰めた面もあるのだろう。

しかし——それよりも大きくタカムを変えたのは、おそらく。

「……違ひだろ、タカ」

ハルエキは銀のマスクをもたげ、まっすぐシアン・バイルの鋭い眼を見た。

「学年一位も、優勝も、お前の力じやない。ブレイン・バーストの……（加速）の力だ、いつからだよ、いつからお前はバーストリンカーだったんだ」

しばし、沈黙が煉獄ステージを覆った。

小虫の群れがキチキチと足元を走り過ぎ、時折壁に開いたヒダの間から生き物のように蒸気が吐き出される。

1800から開始されたカウントは、すでに二百秒が経過しようとしている。百の桁が5になるの同時に、シアン・バイルが言葉を発した。

「僕の力だよ」

す、と右手の針をまっすぐハルユキに向けてくる。

「（加速）は僕の方だ。ほんの赤ん坊の頃から、ニューロリンカーで競っていうほど知育ソフト漬けになって適性をつちかった僕の方なんだ！ 僕がバーストリンカーになったのは、まだたったの一年前さ。剣道部の主将が僕の（威）だ……かの（青の王）の側近なんだよ。期待されてるんだ僕は。闘術隊の候補生なんだ、なのに……」

ガギヤアアアアン！！

大きく振り回された右手が、壁に幾つめかの巨大な傷痕を刻みつけた。

「いままさか！！ 今更バーストリンカーになっただって？ それで僕と対等になったつもりかい、ハル？（加速）能力で自信がついたから、収めてチーちゃんを取り返そうとでもいうのか？ ダメだよ、ハル。君は僕には勝てない。加速でも、スボーツでも、チーちゃんの気持ちは……そして勿論、この加速世界でもね。解らせてあげるよ。僕の力を……君のその、ひ弱なデュエルアバターに！」

ぴかあっ！！ と、シアン・バイルの両眼が凄まじい光を迸らせた。

本気だ。タタムは本気で戦う気なんだ。

言葉を尽くせば解ってくれる、という気持ちはまだハルユキの中にあつた。チユリの、そして自分の本心を説明したい。こんな争い方はしたくない。

しかし、ここでハルユキが負ければ、



シアン・バイルは改めてブラツク・ロータスと戦うだろう。そして意識のない彼女を狩るだろう。その瞬間、黒髪姫はポイントを全て失い、同時に加速能力をも喪失する。

それだけは、何があろうともそれだけは防がなければならない。

「……タタ。たしかにお前はすごいよ。勉強もスポーツもできるし、かつこいい。オレの持つてないものを、全部持つてる」

顔を驚け、声を押し殺してハルユキは呟いた。

しかし直後、正面からシアン・バイルを見据え、鋭く叫んだ。

「でもバカだ。大黒屋野郎だ、お前は！」

「……なんだって？ 僕が、バカ？」

「そうさ、だからオレには勝てないー 忘れたのか？ 昔から、どんなゲームでもお前がオレに勝てたことがあったかよ？」

「……ハル、ハル」

笑いの混じった、しかし凄絶な響きのある声。

「なら、たった今……君は最後のブライドまでなくすんだ!!」

どっ!! とシアン・バイルのブーツが床を蹴った。

二メートル近い巨体が、それにそぐわぬ凄まじいスピードで距離を詰めてくる。

しかし、さすがにアッシュ・ローラーのバイクの突進に比べれば遅い。

すり抜けるんだ。そしてもっと広い場所に移動する。エントランスホール……いや、扉上だ。ハルユキは意識をシアン・バイルの右手に集中した。相手は近接型、あの針の間合いに入らなければダメージは受けない。

さうつ、と右腕を引き絞るシアン・バイルの動きを見てから、ハルユキはその逆側を抜けるように自分もダッシュした。

ほとんどそれだけが取り得であるシルバー・クロウのスピードは、相手にも予想外だったようだ。わずかな驚きの気配とともに、右腕が弧をえがいて突き出されてくる。

——かわせる!!

ハルユキは攻撃の軌道を予測しながら、姿勢を低くしてシアン・バイルの左胸すぐ横を突っ切ろうとした。

ガシユン!!

思いがけない音が響き渡ったのは、そのときだった。

眼を見開いたハルユキの視界すみで——シアン・バイルの右腕を作る太いパイプの後端から炎が噴出し、

先端から、ざらりと輝く太い鉄針が、視認できない速度で撃ち出された。

飛び道具ではなく、ただ密着く伸びる仕掛けのようだったが、しかしその間合いは充分にシルバー・クロウを登らせていた。

バキーン!! という嫌な破壊音を、ハルユキは自分の体を通して聞いた。

同時に衝撃、そして痺れるような鈍痛。

鉄針の先端が、自分の左肘を貫き、腕をその箇所から分断するのをハルユキは見た。

《パイル》とは《杭》の意であることを、ハルユキは遅まきながら思い出していた。

火花の尾を引きながら床に落下した腕は、たちまち千の小片へと砕け散り、消滅した。

視界左上の体力ゲージが、たった一撃でぐくんと三割弱ほども減少する。

しかし、開始早々受けた大ダメージを惜しんでいる余裕はハルユキにはなかった。体勢をく

ずし、背中を壁下の壁にがりがり擦って転倒をこらえるあいだにも、突き出されたままでのシア

ン・パイルの右腕から伸びる凶悪な鉄針——いや鉄杭が再度収納されていくのが見えたのだ。

杭が発射筒にリロードされた瞬間、もう一度あの恐るべき攻撃が襲ってくるのは明らかだ。

攻撃の属性はおそらく《貫通》。

メタルカラーのシルバー・クロウは耐性を持っているはずだ、なのに一撃で腕を引き千切ら

れるとは、当たり所が悪かったのか、三レベルのステータス差が出たのか、あるいは単純に、

シアン・パイルの強さなのか。

そのようなことを一瞬のあいだに考えながらも、ハルユキは姿勢を立てなおし、大きくジャ

ンプして距離を取った。

そのまま後ろを振り返ることなく、全力でエントランスホール目指してダッシュする。

「ハハハ―なんだ、いきなり逃げかい、ハル!!」

背後で響く走んだ笑い声に追いついてられるようにホールに飛び込むと、ハルユキはさっと視線を周囲に走らせた。

特合スベースにならぶ長ベンチは、まるで中世の拷問具のように軋を生やした鋼鐵に変わり、右手の受付カウンターには網びた鉄条網がまきついていている。当然ながら人の姿はない。

そしてカウンターの奥に、探していたものがあつた。エレベータの扉。

《世紀末》ステージでは、建物内部は進入不可だったゆえ当然エレベータも機能していなかったであろうが、こうして案内が詳細に再構成されている《複線》ステージならば動くかもしれない。

駆け寄つたハルユキは、盤のような鉄格子になつてしまつた扉の脇の、ドクロを模したボタンを折りつつ叩いた。はたして、ガツ、チャーンと重々しい金属音とともに鉄格子が左右に開いた。よしっ、と右手を握る。

背後からは、ずしんずしんというシアン・パイルの足音が刻一刻と近づいてくる。

抽房めいたエレベータの箱に飛び込むと、右手でRと刻まれたボタンを、ガチャガチャ連打する。早く、早く動け。

じらすようにのろくさした速度で鉄格子が閉まつたその連続、がしやっ!! と何かが扉を叩いた。格子の、五センチほどの隙間から顔を出すのは、ざらりと光る鋭い笑顔。

「……っ!!」

ハルユキは意識を上げそうになるのをこらえ、唼唼に飛びのいて背中を壁に押し付けた、ガシュン!!

格子をわずかに押し曲げながら発射された鉄杭は、シルバー・クロウの薄い腹部の、ほんの敵より先であやうく止まった。

因循な動きがずるりと引き抜かれるのと同時に、ようやくガタゴトと箱が震動し、エレベータは上昇をはじめた。

「ハハハハ　ハハハハハ!!」

足元から追いつがつてくる粘つく嘲笑を、ハルユキは右足を強く踏んで引き割がした。

屋上にまろび出たハルユキは、荒く息をつきながら、ぐるりと視線を一周させた。

「……………」

思わず眼を見開く。

《煉獄》ステージの空は気味の悪い黄色の光に満たされ、そこをどす黒い雲が生き物のようにならわっている。周囲の、もとは格闘場の中心部であるはずの街並みは、一様に生物めいた奇怪なフォルムへと変容し、赤黒い鈍び色がぬらぬらと光る。

彼方に見える、槍のような尖塔群は新宿都庁と周囲の高層ビルだろうか。

このステージというのは、いったいどこまで広がっているんだろう。などという考えたそのとき、ハルユキはふと気付き息を詰めた。

人が居る。

いや、人、と言うには奇抜すぎるシルエツト。周囲の、病院よりも高い建築物の屋上に三々五々並び、ハルユキを見下ろしている。見知らぬパーストリンカー——観戦者たちだ。

なぜ？ と一瞬驚愕してから、ようやく思い至る。

ハルユキはドローパールネットを切り離しているが、もう一方の対戦者であるタタムが、おそらく対戦開始直前にドローパール脱脱したのだ。他人に乱入される危険をおかしてまで何故そんなことをしたのか、その理由は不明だが、ともかくそのせいでこのステージは外部に開放され、シアン・バイルとシルバー・タロウを自動ゼヤラリー登録しているパーストリンカーたちが出現しているのだ。

しかし、たとえゼヤラリーがいようといまいと、状況には大差ない。

視界に表示されている水色の矢印カーソルが、微震動しながらゆっくりと向きを変え始める。シアン・バイルもまたエレベータに乗って屋上を目指している。

ハルユキは、広大な屋上を十メートルほど移動してからエレベータの扉に向き直った。この場所てなら、庭下と違って回避のためのスペースが充分にある。

シアン・バイルの鉄杭のリーチも、すでに身をもって把握した。右足の向きにさえ気をつけ

ていれば、かわすことは可能はずだ。恐れるな。やるしかないんだ。

自分に言い聞かせるハルユキの視線の先で、がしやんと停止したエレベータの扉が、ゆっくり左右に開いた。

箱いっぱい押し込められた巨体を揺るようにして、シアン・バイルは屋上に足を踏み出すと、スリットの奥の両眼を薄く光らせた。

「……なるほどね。ここでなら、ちよみちよみとヒットアンドアウェイできるって作戦かい、ハル……いや、シルバー・タロウ」

「下だとお前のガタイが暑つくるしかったからな」

「あはは、まさか君にそんなこと言われるなんてね」

くっくっ、と喉声で嗤いながら、シアン・バイルは、ずっと前進を始めた。

ハルユキは姿勢を低くし、間合いを測った。

あいつはまだ、シルバー・タロウのスピードを見逃れていないはずだ。勝機はそこにしかない。向こうの眼が慣れる前に、何としても勝ち切るのだ。

重そうなブーツが四季目を踏み出し、接地するす前、ハルユキは全力で床を蹴った。ギュンツと耳元で空気が鳴り、青い巨体が瞬時に近づく。

一直線に突進するハルユキを、シアン・バイルの右腕が阻害しながら追跡した。

——ここだ!!

ハルユキは、不意に左脚を踏み切り、進路を右に振った。がしゅっ!! というあの喧嘩とともに、鉄杭が超高速度で撃ち出される。発射を見てから反応するのはほとんど不可能だが、当たり判定の先読みなら……できる!

派を捲いてシアン・バイルの左側面に回りこむハルユキの、左頬す前で鉄杭の先端が停止した。焼けるような熱を頬に感じながら、ハルユキは右脚で思い切り床を蹴り――。

「うい……らあっ!!」

右拳をがらあきの脇腹に叩き込んだ。どうつ、と強い手応え。青い巨脈が揺れる。

まだ――いける!!

向き直ろうと体を回すシアン・バイルの背中を追うように、ハルユキはさらに一歩ダッシュし、今度は右回し蹴りを敵の左ふくらはぎに撃ちこんだ。ぐらり、と体勢を崩すところに、追い打ちの左膝蹴りを背すじの中央へ。

ドポオッ!! という重い震動。巨体がくの字に折れ曲がる。

よろよろと距離を取ったシアン・バイルが、憎憎しげに唸った。

「ぐっ……、さ……さすがにゲームは得意ってわけかい、ハル。でも、そんな軽い技じゃ効かない……よ!!」

ぶん、と振り回された左拳をぎりぎり回避し、勢いのまま体を反転させ、右の踵を無防備に突き出された首筋に埋め込む。



「ッダウウウッ!!」

タタムの声で発せられる潰れた悲鳴に耳を塞ぎ、ハルユキはさらにラッシュを続けた。両脚と右拳だけでなく、干切られた左腕までも使って途切れることなくコンボを繰り出す。いつしか、自分の口からも悲鳴じみた叫びが漏れていた。

「この……バカ野郎!! 大馬鹿野郎!! チュはなあ!! チュはお前に、学年一位とか、都大会優勝とか、そんなことこれっぽっちも求めちゃいないんだ!!」

苦し紛れに放たれる前蹴りを踏み台にして高くジャンプし、シアン・バイルのマスクを掴んで自分の額甲ヘルメットを思い切り叩きつける。

びきっ、と破壊音が響き、青いマスクの一部が砕け落ちる。

バランスを崩し、背中から床に倒れたシアン・バイルの胸に馬乗りになり、ハルユキはさらに右拳を亂打し続けた。

「チュはただ、お前がお前のままでいることだけ望んでたんだよ!! あいつに過去ばかり見させてるのは、昔に戻りたいって思わせてるのはお前だタタム!! オレたちのなかでただ一人変わっちまったお前なんだ!!」

何も考えず、激情のままに叫んだ言葉だった。

しかし、ハルユキの声が響いた途端、ひび割れたスリットの下でシアン・バイルの両眼がぞつとするほど強い冷光を放った。

「ちよ……うしに……」

突然、ぐいっとシアン・バイルの太い両腕が自分を守るように交差された。しかし、それが防衛動作でないことにハルユキはすぐには気付けなかった。

「潤子に乗るなアアアアアアアアアアア!!」

両腕が左右いっぱいに広げられると同時に、シアン・バイルの胸から腹にかけてのボディスーツの表面に、ぽここここっ! と音を立てて鋭い杭の先端が十本以上も突き上がった。

何だ!? まずい――回避――

しかし、ハルユキが両脚で地面を蹴り飛び退こうとしたその瞬間、

「――(スブラッシュ・ステインガー) アアアアア!!」

ズドドドドドドウッ!!

重機関錠じみた連射音とともに、至近距離から数本の杭がハルユキめがけ射出された。

「っくおねお!!」

頭と胸の真ん中に飛んできた杭はどっぴか回避した。しかし直後、左肩、左脇腹、そして右膝に凄まじい衝撃を受け、ハルユキは襦袢のように高く吹き飛ばされて背中から屋上の床に落下した。

「ぐっ……はっ……!!」

喉から悲鳴まじりの空気が押し出される。視界はちかちかと瞬き、鈍く重い痛みが全身を襲

け返った。これが、ニューロリンカーから与えられた仮想のダメージだとは信じられない。

「いったい——今のは？」

右腕をつつぱり、どうにか上体をもたげたハルユキの視界の先で、シアン・バイルが一足先にのっそりと立ち上がっていた。

「く……ふ、ふふふふふ」

どこかの蟻<sup>アリ</sup>が外れてしまったような、小刻みな笑いか青いマスクの下から漏れた。

「くふふふ、随分と……元氣よく小突きまわしてくれたじゃないか。ちよっとだけ驚いたよ。でも……所詮は煩わしい小虫だったね。わざわざ僕の必殺技<sup>キル・テック</sup>ゲージを溶めたようなものさ」

「必殺……技……」

味きながら、ハルユキは改めて視界上程のゲージを確認した。

左右に伸びる太い体力ゲージは、シアン・バイルが残り六割。ハルユキのラッシュで、言葉以上のダメージは受けている。しかしハルユキのほうは、先ほどの杭<sup>杭</sup>の乱射をまともに食らったせいで、もう三割ほどしか体力がない。

そして、二人の体力ゲージの下にもう一本、細い緑色のゲージが伸びている。

これは、シアン・バイルのほうは七割ちかくが明るい色に発光している。対してハルユキのものはほとんど満タンに近い。

「おいおい、初めて聞いたようなことを言うなよシルバー・タロウ」

くくくと笑いながら、シアン・バイルがゆっくりと前進を開始した。

「必殺技の応酬こそ（対戦）の華さ、さっきの（エスブラッシュ・スティンガー）は僕のレベル2必殺技だ。強い小虫を撃ち落とすのにうってつけだったろ？ おや、そういえば君のゲージもいっぱい溜まってみたいじゃないか。どうぞどうぞ、君も好きなだけ使ってくれよ」

ハルユキはざりりと胸を噛み締めた。

シルバー・クロウに与えられた必殺技は、リーチがないに等しい（ヘッドバット）だけで、射程の長いシアン・バイルの技にはとても対抗できない。しかもモーシロンが長いうえに見えて、発動準備中を撃ってくれと言わんばかりだ。

……くそっ、必殺技なんて必要ない。僕には拳と足、そしてスピードがある。

視界の揺れが取まると同時に、ハルユキは素早く立ち上がり、右腕に力を込めた。しかし。

聞こえたのは、バギヤッ、というおぞましい破壊音と。

自分の体がガシャッと呼び地面に落下する金属音だった。

慌てて下に向けた視線の先にあったのは、散弾銃に貫かれ、膝から砕け落ちた、銀色の細い脚――。

「あはっ、あははははは!!」

けたたましいシアン・バイルの嘲笑。

「とれちやったよ脚!! なんて跳いんだ!! それでもメダルカラーかい?」

その声は、ハルユキの意識には届かなかった、

しまった、しまった!!

脚を失っては、もう走れない。回避も、ダウシユも、それ以前に移動さえ覚束ない。

運び寄るバニッタの気配が、体の底をすうっと冷やす。

まずい、だめだ、ここで負けるわけにはいかないんだ、先輩を、僕は絶対守るんだ。

ズシン。

すぐ近くに踏み下ろされたブーツが、ハルユキの千切れた脚をガラスのように砕いた。

見上げた視線のはるか先で、青白い二つの眼がすうっと細められた。

「……結局、こうなるのさ、ハル」

かすかな囁き声。

「君はそうしてるのが似合ってるよ。なのに、さっきは随分言いたい放題言ってくれたじゃないか? まるで、チーちゃんのことを、自分ひとりが理解してるみたいにな?」

「……してるさ、少なくともお前よりは」

「なら、僕のことはどうだい? 少しは考えてくれたことがあるかな? チーちゃんと二人でいるときに、突然哀しそうな顔をされて……それが、君のことを考えてるからだと思ったときの、僕の気持ちを考えてくれたことがあるかい、ハル?」

一瞬言葉を切り、ぐつと顔を寄せ、シアン・バイル——タカムは決定的な一言を口にした。

「君がそんなだから」

どこか優しいときも思える声（こゑ）だった。しかしその言葉はハルユキの胸を巨大な鉄柱のようにはしく抉った。

「君がそんなふうだから、僕もチーちゃんも君というドロドロの沼にすっぽり嵌ったまま抜け出せないんだ、もう消えてくれよハル。そして僕とチーちゃんを自由にしてくれ」

ずしん。

今度の一步は、ハルユキの無事なほうの脚を靴底に捉えた。

がばつと上体を起こし、右腕の発射筒を高く掲げたシアン・バイルは、その先端で空中に複雑な軌道を描いた。それにつれて、発射筒から肩までが、鮮やかな青い光に包まれていく。

突然、太い音を立てて発射筒が三倍ほどの太さに拡張された。

その奥から、じやきりと顔を出したのは、先端が平らになった、巨大なハンマーというべきものだった。

もう動くことも、思考すらもできないハルユキに、ハンマーの打撃面がぴたりと向けられた。

「さあ——もう終わりにしよう、ハル。何もかも」

この対戦も、そして僕たちの見せ掛けの友情も。シアン・バイルの両眼がそう告げていた。直後、ハンマーの先端が凄まじい光を放った。

「——（スパイラル・グラビティ・ドライバー）!!」

ギニアアアアッ!!

無数の歯車が立てるような機械音と同時に回転しながら、撃ち出されたハンマーを、ハルユキは懸命に回避しようとした。しかし片脚を靴底でがっちりホールドされ、逃れることはできなかった。直後、巨大な鋼鉄が、ハルユキの胸を押し潰した。

白銀の装甲が砕ける甲高い轟鳴と、背後の床が粉砕される重低音の二重奏。

声を上げることもできぬまま、ハルユキは床ごと階下に叩き落とされ、病院の一階下のフロアに激突した。

しかしハンマーはそこでも止まらず、さらにハルユキごとその床もぶち抜き――。

ばごっー ばごんっー ばごあっ!!

と立て続けの破壊音を響かせながら、病院の五フロア全てを貫通して、ハルユキを一階の床に埋め込んでからようやくその動きを止めた。

ちか。ちかっ。

朦朧とした暗闇のなか、視界の左上でなにか赤いものが瞬いている。

それが、一割弱にまで減少した体力ゲージであることに、ハルユキは数秒かかって気付いた。ゲージを閉りきれなかったことを惜しむように、シアン・パイルのハンマーの先端はしばらくハルユキの胸に食い込んでいたが、やがてすると逆回転しつつ引き戻されていった。

ばらばらと瓦礫をこぼしながらハンマーが去ると、ハルユキの目の前には流か屋上まで続く小さな穴が残された。その奥から、かすかにシアン・バイルの声が響いた。

「あーあ、ちよっと残っちゃったな。まあいいが、どうせあと五、六分だし、探しに行つてトドメを刺す前にタイムアップかな。それにこの後、本命の《ボス討伐》に挑戦しないといけなしね。——さて！」

声の調子が変わる。語るような——あるいはどこか、細びるような響き。

「見てくれたかな、観戦者諸君——とくに青のレギオンの皆!! 僕はまだまだ役に立ちますよ——この上の《無制限フィールド》でだってちゃんと戦えます——ちよっとポイントを使いすぎたからって、捨てるには惜しいはずだ、でしよう!?」

タタ——、タタム……。お前は……。

ハルユキは、壊れた人形のように暗い穴の底に転がったまま、頬を熱い液体が伝うのを感じていた。それは涙だった。しかし、自分が何に對して泣いているのかはよく解らなかった。

おそらくは、気付かぬうちに壊れ、完全に損なわれてしまった、大切な何かのために流れている涙なのかもしれない。

負けてはいけない戦いだったのに、ハルユキ自身のために、タタムの、チユリのために——そして黒雲姫のために、どうしても勝たなければいけなかったのに。

巨大な悔恨の痛みを抱えながら、ハルユキはゆっくりと体を起こした。全身から、ひび割れ



た髪甲の欠片が雨のように零れ、散った。

もうこれ以上、立ち上がる意味はなかった。決定的な敗北を受け入れ、ブレイン・バーストを知る以前の自分に戻るべく、ハルユキはその場で膝をかかえ、タイムカウントがゼロになる瞬間だけを待とうとした。

視界が閉ざされる——その寸前。

薄暗い部屋の片隅に。

あの人の姿が、幻のように浮かび上がった。

それは、黒い茨で編まれたベッドだった。

咲き誇る無數の、漆黒の花弁に囲まれるように、華奢な姿が横たわっている。

闇より黒いドレス、銀のふち飾り、襟元に置かれた日傘。そして、広がる艶やかな黒髪と、薄紅のなかで青よりも白く輝く肌。長い睫毛は密やかに伏せられている。

幻覚を見ているのか。

そう思いながら、ハルユキは失われた右腕を引き折り、ゆっくり、ゆっくり茨のベッドに近づいた。しかし、どれほど附近に近づいても、黒雪姫のアバターが掻き消える様子はない。

ベッドの縁に、崩れ落ちるように右手を突いてから、ハルユキはようやく悟った。

ここは、この場所は、現実の黒雪姫が治療を受けているERのマイタロマンン室なのだ。

そして黒雪姫のニューロリンカーは院内ネットに接続していた。だから、ハルユキが加速対戦を開始した途端、自動観戦モードが起動して彼女をもこのステージに誘ったのだ。

「……先輩」

かすれた声で呟きながら、ハルユキはぼろぼろの右手を伸ばし、そっと黒雪姫の頬に触れた。言葉は、あとからあとから、堰を切ったように溢れた。同時に、再びの涙も。

「僕は……僕は、あなたを守れなかった。あなたの夢を、希望を守れなかった。あなたの期待に応えられなかった」

半ば砕けたヘルメットのヒビから滲った涙が、ぼたりぼたりと黒雪姫の頬に落ち、極小の輝きを散らして消えた。

「変われるって……そう思った。あなたの言葉で、あなたの優しさ、あなたの気持ちで変われるって……。でも、だめでした。アバターのせいじゃない……。たぶん、このアバターは、僕の《諦め》を映して創られたんです。こいつを、シルバー・タロウをこんなふうにしてしまったのは僕だ。空を見ようとせず、下だけ向いて、誰いづくばって生きてきた僕なんだ」

ハルユキはそっと体を伏せ、黒雪姫の肩口に結んだ。

「行きたかった。あなたがいる場所に……。あなたが軽やかに羽ばたく、涙が高い空に、高く……高く……涙溜みたいな現実を抜け出して……。あなたと一緒に……」

嗚咽とともに、ハルユキは最後のひと言を絞り出した。

「飛び、なかった」

——とくん。

まるで、声に伝つたえるように、かすかな音が聞こえたのはその時だった。

とくん。とくん。

音の源は、ハルユキの頬ほと触れ合う黒雪姫の胸だった。その中央から、小さく、傳つたく、しかも確かに刻まれるリズム。鼓動。

加速中のいま、現実の心臓の拍動音が聞こえる訳はない。しかし幻聴げんしやうでは有り得なかった。懸命に耳を澄すませ、聞き入って、ハルユキはふと悟った。

これは、黒雪姫の意志から発せられる響きだ。いま、黒雪姫は必死に戦っている。生と死のふちで、踏みとどまろうと懸命に抗かっている。その強い意志が、鼓動となって仮想の戦場に響いているのだ。

「……そうだ、……」

ハルユキは呟ささいた。同時に、新たな涙が溢あふれ、熱く満みった。耳の奥に、かつて聞いた黒雪姫の言葉がかすかに響いた。

——強さというのは、結果として勝利することじゃないぞ。

僕は、強いということの意味を、まるで知らなかった。知らずに羨み、諦めていた。

「強きは、ただ（勝つ）ことじゃない……」

たとえ無様でも、滑稽でも、最終的に敗れ、地に倒れて、泥に坐れるのだとしても。

黒雪姫は――ブラッタ・ロータスは、王たちとの死闘を生き延びたのも、二年ものあいだ狭いネストに息を殺して潜み続けた、でも、それは卑怯だからでも、驕弱だからでもない。諦めなかったからだ、決して情こうとしなかったからだ。

「……ただ（抗う）こと。倒れてなお空を見続けること……それだけが強きの証なんだ。そうですよね……先輩」

答えはなかった。

しかしハルユキは、自分の胸の奥深くにも、力強い鼓動が生まれるのをはっきりと感じた。心臓の拍動は、信号となって脳を駆動する。

そしてまた、魂を、意志を、道境に立ち向かう精神を加速する。

この響きが胸にある限り――

「僕は、まだ立てる……まだ、戦える!!」

自分に、そして黒雪姫に向けて、ハルユキは叫んだ。

右手でベツドの縁を握り、左膝に力を込めて、よろけながら立ち上がる。

全身から、微細な破片が舞きながら舞い落ちた。しかし、胸の奥から生まれた熱は、傷だら

けの四肢の隅々までに溢れ、激しく震えた。

突如――

装甲の亀裂から、強烈な白光が幾筋も透った。

同時に、貫通の装甲が大きく砕け、吹き飛ぶ感覚が訪れた。ハルユキは目を見開き、体を倒け反らせた。

目の前の少し離れた壁に、大きな鍋がある。現実世界では隣のモニター室と繋がるマジックミラーだったのだろうか。いまは、ヘッドと同じく黒い錆鉄の衣に纏取られた巨大な壁面に変わっている。

その中央に、灰のベッドと、横たわる黒い蛇。そして立ち上がった自分の姿が映っていた。

全身の装甲は酷いありさまだった。左腕と右腕は半ばから千切れ、胸には放射状に深いヒビが入っている。ヒビは背中にも達し、破砕音はそこから響いているようだ。細い火花が走るたびに、小さく砕けた装甲が飛び散る――。

「……………」

ハルユキは、何か白く輝くものが、背中の左右からゆっくり、ゆっくりと伸びはじめるのを、呆然と見つめた。

鋭い三角形の、薄い金属片のようだ。刻――？

そう思った瞬間、伸び切ったふたつの金属片が、しゅらっと涼やかな音を立てて半円状に

広がった。折りたたまれていた薄い金属のフィンが、最初の剣状突起の先端を支点にそれぞれ十数近くも展開している。

これは――武器ではなく……。

――翼。

ハルユキが呆然としていたのは、僅か一秒足らずのことだった。

熱い!!

背中全体に凄まじい熱気を感じ、ハルユキは弾かれるように体を起こした。

身もたえながらよろよろと膝立ちで数歩後ずさり、腕で肩を抱いて小さく体を縮める。

温度、というよりも、純粹なエネルギーの塊が背中に密閉され、行き場を求めて渦巻いていくように思えた。

「――!!」

だめだ、もう抑えていられない。

弓なりに全身を反らせ、真上を向いたハルユキの視線の先に――。

つい数秒前、自分自身が建物に穿った巨大な孔が見えた。そして、その黒く深い空間の彼方にぼつりと見える小さな黄色い光も、遥かな空へと続く回廊。

呼んでいる。



無意識の動作で、ハルユキは押けた左腕を高く掲げ、無事な右腕を体側に引き絞った。肩甲骨の先で荒れ狂うエネルギーが、一気に密度を増し、圧縮される感覚。

一瞬だけ戻した視線で、懐たわる最愛の人の姿を捉えてから。

ハルユキは、再び真上を監視した。

「行つ、けえええっ!!」

絶叫とともに、右腕をまっすぐ突き出す。

どおうっ!!

暴発じみた衝撃とともに、銀の光が暗闇を切り裂いた。

一瞬ののも、ハルユキの全身は、放たれた矢のように一直線に飛び上がった。

ぽっ、とつたつたつた……

病院の一フロアを通過するたび、空気が耳元で唸る。

わずかに微妙で暗い回廊を貫いた銀のアバターは、屋上に穿たれた大穴から飛び出すと、さらに高く高く飛翔した。きいいいん、と背中金属フィンが高速震動する。そのエネルギーは小さな体を圧倒的な勢いで加速し、仮想の重力など全々断ち切つて、どこまでも、どこまでもハルユキを押し上げる。

たちまち、目の前に濃密く黒雲が迫った。

突き上げた右拳が分厚い塊に接した瞬間、ぱっ、と音がして円状に雲が押し分けられる。



黒いトンネルを貫き、さらに上昇するハルユキの視界に、薄黄色の眩い光が溢れた。雲海を抜けた直後、ハルユキは両手足を広げ、加速を収めた。甲高い震動音がビッチを落とす。飛行機が離陸を終えたときのようなふわりとした浮遊感が訪れる。

ゆるやかにホバリングしながら、ハルユキはぐるりと体を回した。

「……ああ……」

思わず、ため息まじりの声が漏れる。

想像を絶する光景が、眼下に広がっていた。うねりながら流れる雲海の切れ目から、どこまでも続く鈍い色の巨大都市が一望できる。振れた尖塔群に変化した新宿副都心、その向こうの深い森と、そそり立つ魔城めいた建築物は皇居だろうか。

反対側を見ると、杉並から三鷹、八王子へと続く市街がどこまでも連なり、彼方には奥多摩の山々、さらにその奥で雲海を貫いてそびえる険峻な高峰は、おそらく富士山。

最後に南を眺めたハルユキは、さらさらと輝く灰色の平面を視界に捉えた。

海。東京湾だ。そして——果てなく広がる、太平洋。

無限だ。

「この世界は……無限だ……」

呟きながら、ハルユキはゆっくり、ゆっくりと降下を開始した。

背中からばふっと雲海に沈み込み、その底を抜けて、地上へと近づく。

街並みのダイテイルが詳細に見渡せる高度まで落下したところまで、フィンを一度強く震動させ、再度ホバリング。

姿勢を戻したハルユキの真下、ほんの三十メートルほどのところに、病院の屋上があった。あれほど広大と思えた対戦フィールドが、いまは両手で握めそうなほどに小さく見える。そして、その中央に穿たれた大穴の縁に立ちつくし、こちらを見上げる青い巨人の姿も、また、

シアン・バイルは、たっぶり三秒近くも、魂を抜かれたようにハルユキを眺めていた。その左手がかすかに持ち上げられ、しわがれた声が漏れかけた。

「は……ハル……」

しかし言葉は、不意に巻き起こった、どおおおっ！ という響きに掻き消された。

声だ、病院を取り囲む建物の屋上に陣どり、シルバー・クロウとシアン・バイルの対戦を見守っていたギヤラリーたちが、一斉に喚き声を上げたのだ。

「落ちて……落ちてこないぞ!? 完全に静止している!!」

「ジャンプじゃない……飛んでるのか!? ウソだよ!?」

「飛行アビリティ」だ……ついに現れたんだ、あの羽を見ろって!! あれは（飛行型アバター）だ!!」

ハルユキは、なぜギヤラリーたちがこれほど大騒ぎするのか分からなかった。唖然として見下ろす先で、数人に及ぶデュエルバターが、ある者はより高い地点を目標して移動し、ある

者はコンソールに指を走らせている。

「データはないのか！ あいつはどここの誰なんだよ!? 所属レギオンは……〈現〉は誰だ!?」

「と、とりあえず本部に連絡だ！ お前、落ちて知らせにいけ!!」

「冗談じゃない！ この先を見逃せるかよ!!」

時の機をつついたような瞬ぎを鎮めたのは――不意に放たれた、凄まじい絶叫だった。

「オッ……オオオオオオオオ!!」

両手足を広げて、シアン・バイルが吼えた。大気をびりびりと揺らす震動が、遠く上空のハルユキにまで届く。

「駄目だ！ 駄目だ駄目だダメだダメだダメだあああああ!!」

がしゅっ!! と機械のような音を立てて、右腕の発射筒がまっすぐハルユキに向けられた。

「お前が!! お前が僕をッ!! 見下ろすなあああアアアアアアアッ!!」

血を吐くような叫び。

同時に、ぎいいいいんっ!! と金属音が響き、破壊された鉄杭が幾筋もの光を振り散らした。

両脚を広げて腰を落とし、左手を発射筒に添えた姿勢を取ったシアン・バイルの必殺技ゲー

ジ残り四割が、一気にくっくと消滅する。

恐らくはシアン・バイルの最終攻撃であろう技に阻撃されたハルユキは、一点にホバリングしたまま、そっと右手を持ち上げ、拳を固く握り締めた。

自分に与えられた真の（必殺技）を、ハルユキは今ようやく悟っていた。

（パンチ）。そして（キック）。

それらは通常技であると同時に、必殺の超攻撃でもあったのだ。

握った拳を大きく後方に引き絞り、ハルユキは全てのフィンをいっばいに振上げて体の向きを変えた。一直線に、腰下のシアン・バイルへと。

「お……ちいいい、ろおおおっ!!（ライトニング・シアン・スパイク!!）」

技名の絶叫と同時に、シアン・バイルの右腕から、一条の光線と化した鋼針が発射された。対するハルユキは、ただ拳を構えながら、両の羽の全推進力を解放させた。

「うっ……おおおおおお!!」

どおおおっ!!

ロケットエンジンに点火したかのように、シルバー・タロウの体はひとつの光弾となって突進した。

視界の左すみで、緑の必殺技ゲージが一気に減少をはじめた。同時に、右拳を包む白い光が、際限なくその輝きを増す。

「ハルウウウウウウウウ!!」

タタムが叫んだ。

「タタ————」

ハルユキも叫んだ。

キイイイイン!!

ブレイン・バーストの加速を超える（超加速）感が背後から押し寄せ、ハルユキを包む。

世界の色が変わる。

地上から殺到するシアン・バイルの言い掛、その先端一点の煌きを、ハルユキは確かに見た。

予測される製造が、視界に灯のように浮き上がった。

技の名のとおり、まさしく雷閃のとき一撃で、ハルユキの魂の速度が凌駕したのだ。思

覚感が見出し、創じた、真の（加速者）の力が。

見える……見えます、先輩!!

ハルユキは思念で叫んだ。

槍の速度が落ちていく。

対するシルバー・タロウは、存在そのものが光になってしまったかのように、際限なくその

スピードを増す。

両者が接近し、交錯する——その瞬間、ハルユキはわずかに突進軌道を右にスライドさせ

た。

ざしゅううつり

槍がヘルメットの左側面を擦め、通り過ぎ、凄まじい火花を散らした。

直後、

ハルユキの（パンチ）が、シアン・バイルの胸板の中央を、深く、深く貫いた。  
ずがああっ!! という轟音とともに、屋上の床に深い轍を刻みながら、両者は一体となって  
吹っ飛んだ。

鉄槍の櫓に激突し、それをバラバラに粉砕して、空中へと墜り出る。

「っ……おおっ!!」

ハルユキは一声吼えて、金属フィンを羽ばたかせた。

ぐうっと力強い揚力が全身を包む。右腕の根元までをシアン・バイルの体に埋め込んだまま、  
ハルユキは軌道を上向け、高く、高く上昇した。

数秒で雲海を貫き、黄色い空へと飛び出す。

加速を認めホバリングへ移行したそのとき、衝撃で一瞬気を失ったらしいシアン・バイル  
が、ハルユキの肩口に乗せたマスタの下で嘆き込むような音を立てた。

「あ……ふ……」

びく、びくんと巨体を震わせてから、のろりと顔を上げる。

直後に漏れたのは、これまでの怒鳴の怒声かうそのような細い悲鳴だった。

「う……わっ……!? と……飛ん……て……!?」

マスタを左右に振りながら、さらに叫ぶ。

「やめろハル……っ お……落とすなッ!! 今落ちたら……ま、負けッ……」

両者の体力ゲージはともに直ッ岸に染まり、その幅が糸のように細くなるところまで減少していた。シアン・バイルは、もがくこととして落下するのを恐れてか全身を硬直させ、声の調子を曇<sup>こも</sup>らせるようなものに変えた。

「ま……負けたら……レベル1の前前に負けたら、ポイントがゼロになっちゃうんだッ……前はいいだろ、どうせ4、5ポイントしか減らないんだから! 頼む、ここは譲<sup>や</sup>ってくれハル! いまブレイン・バーストを失<sup>く</sup>すわけにいかないんだよ!!」

「タタ……タタム……」

呻<sup>うな</sup>くように呟<sup>ささ</sup>きながら、ハルユキは、シアン・バイルを貫いたままの右手を強く握った。

何を——何を今更!! お前は黒<sup>くろ</sup>書<sup>しや</sup>姫<sup>ひめ</sup>のポイントを全て奪<sup>うば</sup>おうとした……あの人のブレイン・バーストを、たった一つの望みを消し去ろうとしたんだぞ!!

いま、腕の角度を少し変えるだけで、シアン・バイルの巨体は支えを失い、轟<sup>とどろ</sup>か地上へと落下する。タタムは軸<sup>はし</sup>というポイントを失い、同時にブレイン・バーストを強制アンインストールされる。そして——もう二度と、ローカルネット圏外から黒<sup>くろ</sup>書<sup>しや</sup>姫<sup>ひめ</sup>を望<sup>のぞ</sup>うなどという真似<sup>まね</sup>はできなくなる。

ハルユキは、割れ砕けるほど奥歯を噛<sup>か</sup>み締<sup>し</sup>めた。

ぶるぶると全身が震え、一瞬<sup>ひとしじ</sup>の衝動<sup>しょうどう</sup>が頭からつま先までを駆け抜け、止った。

食いしばった歯の隙間から押し出した声は、自分のものではないかのように割れていた。

「……認めるか、タク」

「……………な、何を……」

「お前は、この加速世界じゃもう絶対オレには勝てない。それを認めるかタク!!」

一瞬の沈黙。

密着した体を通して返ってきた言葉は、何かが抜け落ちたかのように静かだった。

「……………ああ、そうだね……やっぱ、僕は君に勝てなかった。昔一緒に遊んだ、いろんな

ゲームと同じように……」

ハルユキは大きく息を吸い、吐いた。そして、同じように静かな声で言った。

「なら……オレとお前は対等だ」

「……………な、何を……………」

「現実世界じゃ、オレは何一つお前に勝てない。でも、この世界ならお前はオレに勝てない。

オレたちは対等の存在だ、だから……、だから」

言葉を切り、シアン・パイルのマスクの奥の青白い眼を見つめてハルユキはその先を続けた。

「だから、お前は、オレの味方に……仲間になれ、タク。オレと同じように、これからはあの

人の配下として戦うんだ」

タカムが絶句し、銀く喰いだ、しばらくして、掠れた呻き声が細いスリットの下から漏れた。



「……バカな、ハルも知らないわけじゃないだろう。君の親……僕が所属レギオンにも隠して狩ろうとした《フラック・ロータス》は、加速世界最大の反逆者なんだぞー　つまり……あの人と一緒に戦う、つてことは……」

「そうさ、《純色の六王》を全員倒すんだ。どどる必要なんかあるもんか。いいことを教えてやるよ……あのな、本来ゲームっていうのは、そういうモンなんだぜ」

言い放ったハルユキに、タタムは長い沈黙で応じた。

数秒後に発せられた言葉は、どこか自虐的な笑いを帯びていた。

「……ハル、君は信じられるのかい？　たとえここでうんと言ったところで、今更僕の言葉をどんな根拠で信じる気なんだ？　所属レギオンの規則を破り、ブレイン・バーストのルールを破り、そしてたった二人の友達を両方裏切った僕の言葉を？」

「これから、二人でチユに全部話す」

即座に切り返したハルユキの台詞に、タタムは何度目かの贅言の息を漏らした。

「え……？」

「ブレイン・バーストのこと、オレたちが戦ったこと、そして……オレとお前が隠し続けてきた気持ちも、全部あいつに打ち明けるんだ」

ハルユキは視線を遠く無限に続く空に向け、ゆっくりと言った。

「オレたちは、多分そこから始めなきゃいけないんだよ。今まで二人とも、隠しちゃいけない

ことを隠し続けてきた。疑わなくていいことを疑ってきた。どこかで……やり直さなきゃいけなかったんだ」

「……………やり直せる……と、ほんとに思うの、ハル？ 僕は……僕は、チーちゃんのニューロシンカーに……」

震える声でそう言うタタムの背中を、千切れた左腕で軽く叩く。

「死ぬほど怒るだろうな。怒鳴って、暴れて……でも、最後には許さる、あいつなら」  
ゆっくりと下降を始めながら、ハルユキは笑いを含んだ声でそう言った。

病院の屋上に戻り、シルバー・クロウの右腕から解放されたシアン・バイルは、よめめくように散歩下がつたあとどきりと床に座り込んだ。

ハルユキはちらりと残り時間を確認した。あと二分と少して、長かったこの対戦も終わる。念のためゲージをタリタタとして確認したが、残り体力は反方まったく同じ数値だった。このままタイムアウトすればリザルトはドロイーで、ポイントの移動は発生しないはずだ。

立てた両脚のあいだに頭を垂れ、身動きしないシアン・バイルをもう一度見て、ハルユキは内心で考えた。

僕は……間違っていたのだろうか？

あそこで容赦なくタタムを地面に振り落とし、彼がこの対戦のあと約束をたがえて悪魔殿を

疑うという可能性を、完全にゼロにすべきだったのだらうか……？

いや——遠う、人を疑い、人を信じるのは、つまり自分を疑うこと、自分を信じることだ。僕は、黒雪姫が好きだと言ってくれた自分を信じる。

タカムを信じるに決めた自分を信じるんだ。

これで、いいんですよね……。

心の声で、そう呼びかけた——その直後だった。

背後で、エレベーターの扉が開く、重々しい金属音が響いた。

はっ、と全身を強張りさせ、素早く振り向くまでの刹那に、ハルユキは、自分がこれから目にするであろう姿を推測し、また確信していた。

新たな敵では有り得ない。このステージで攻撃し、きれることができるのはハルユキとタカムだけのだから。

そして見知らぬデュエルアバターということもない。病院内から無関係な観戦者が現れる理由がない。

しかし、実際におのが視覚で確かめたその瞬間、ハルユキの呼吸は停まり、胸が熱いものでいっぱいになって、両眼からは涙が溢れた。

闇のエアセンスを凝縮したかのような、純粹なる黒。そのエッジを彩る青らかな銀。吹き過ぎる冷たい風が、ロールした長い髪とスカートの裾を揺らし、日傘を飾る鈴を小さく

鳴らした。

「ぜん……ば……」

押り出した声は、小さな子供のようによく震えた。

砕けた脚を引き揃り、一歩、二歩前に出たハルユキを見て――、

黒雪姫は、大きく顔を赤め、同時ににつこりと微笑んだ。

「先輩!!」

ようやくまともな声で呼びかけ、ハルユキは不規則な食卓を響かせながら最大限の速さで走り寄った。

黒雪姫も、かつとハイヒールを鳴らして駆け寄ってくる。

両の腕をまっすぐ伸ばし、広げられた相手の腕のなかに飛び込むことに、一切の躊躇も気後れもなかった。

甘く柔らかな香りのする体を力いっぱい抱きしめ、ハルユキは嘔吐感じりに叫んだ。

「意識が……意識が戻ったんですねー まかった……信じて……信じてました、絶対助かるって……よかった……ほんとうに……」

ハルユキを包み込むように抱きとめた黒雪姫は、しばらく無言のまま頬を指り寄せていた。やがて耳元で響いた囁き声は、同じように離れていた。

「……天も地もない暗闇のなかで……キミの声だけが聞こえた。私を……守ってくれたんだな。

こんなに傷ついて……」

右手が、シルバー・タロウのひび割れたらけのボディを優しく抱<sup>か</sup>てる。

「こんなに、ぼろぼろになって……。ありがとう……。有難う、ハルユキ君」

「いえ……。僕を守ってくれたのは先輩のはうです。あなたが、言ってくれたから……。自分を信じあつて、だから……。飛べたんです」

黒雪姫は、無言で何度か頷くと、伸ばした手でハルユキの背中から伸びる薄い羽のふちをそつと抱<sup>か</sup>てた。

「綺麗だ……。これがキミの力、シルバー・タロウの秘められたボディンシャルだったんだな。」

未だかつて……。純粹な飛行アビリティを實現し得たデュエルアバターはひとつもない。やはり、私の手感に間違っていないかったよ。キミこそが、この世界を変えていく者なのだ」

黒雪姫はそつと、両手でシルバー・タロウの小さな体を床面に降ろした。

首を傾け、微笑みながらハルユキを見下ろして、伸びるシルエットの妖精は少しだけ力を込めた口調で言つた。

「時が来たようだ……。私も、安穩とした處から出て、再び空を目指すときが」

ちらり、と視線を後ろに向ける。離れた場所に座り込むシアン・バイルは、うなだれたまま僅かに目線だけを上げて二人を見ていた。

「貴様にも……。消まないことをしたな、シアン・バイル」

黒雪姫が発した言葉は意外なものだった。

「私は貴様との名譽あるべき（対峙）を幾度も汚した。今こそ見せよう、私の真の姿を。そして貴様が望むならば、全力で相手をしよう」

さっ、と右手を上げ、仮想コンソールを素早く操作する。

ばもっ、ばもばもっ!!

突然、進った黒い輪廻が、幾重にも妖精姫のアバターを包みこんだ。

進んで数歩下がったハルエキの目の前で、青紫の光に包まれたシルエクトが、少しずつ、少しずつそのフォルムを変えていく。床ちかくまであったスカートが一気に短くなり、鋭いぎざぎざに分割される。両手足がびしっと完全な直線を作り、先端が針のように鋭くなる。

長い髪は光に落けて消え、かわりに翼を後ろに伸ばした猛禽のようなかたちのマスクが出現し――最後に一瞬、雷閃が屹立して、全てのエフエクトが消滅した。

その場に立っていたのは、黒水晶を削りだしたかのような、美しい、途方もなく美しいひとつのデムエルアバターだった。

全体のフォルムはシルバー・タロウにどこか似ている。

しかし身長は遥かに高く、百七十センチ以上あるだろう。直線を主体にしながら流麗な、透明感のある黒い装甲に包まれたボディは人形のように細く、腰回りを取り囲む黒薔薇の花に似たアーマースカートに繋がっている。

そして何よりも特徴的なのはその四肢だった。両腕も、両脚も、ぞくぞくとするほど長く、鋭い剣なのだ。触れるものは即座に切断されそうな、びえびえとした鋼を揃えたエッジがステージの微風にかすかに震え、渾と鳴っている。

Vの字を後ろに傾けた形の頭部の、前面は漆黒の鏡のようなゴーグルになっていた。その内部に、グイーン、という震動音とともにふたつの青紫色の眼が輝いた。

ハルユキはしばし、魂を抜かれたように立ち尽くした。離れた場所で、シアン・バイルも同じように絶句する気配が伝わった。両名ともに、凄絶なまでに美しいその姿と——それ以上に、華奢な漆黒の全身から発せられる底なしのポテンシャルに圧倒されたのだ。

仮に《対戦》すれば、自分は数秒と持たずに切り刻まれ、ばらばらの細片となって消滅するだろうとハルユキは確信した。

やがて、ハルユキはどうにかため息にも似た声を胸から押し出した。

「綺麗……です。すごく……綺麗だ……。先輩はまさに、醜態だなんて言ってたけど……とんでもないです……」

「ン……、そうかな……」

発せられた声だけは、もとの黒雪姫のままだった。

「誰かと繋ぐための手すらないのに……」

その言葉は、最後まで続くことはなかった。

ど お お お お っ！

突然周囲の建物から、凄まじい音量の驚声（おどろきごえ）が一度に湧き起こったのだ。

「う、うおおー！ おおおおおお——っ!?」

「あれは……あのデュエルアバターは……!!」

「フラッタ・ロータス」!! 《黒の王》だ!! 健在だったんだ——「タリ」

ギヤラリ—たちの叫び声は、飛翔（とせう）するシルバー・クロウを見たときのそれよりも明らかに倍以上のボタユミムだった。

黒雪姫はちらりと周囲を見渡し、軽く肩をすくめると言った。

「さてと……シルバー・クロウ、私を連れて飛べるかな？」

「えっ、は……はい」

いかにボテンシャルが高かろうとも、実際の重量がシアン・パイル以上ということはあるまい。しかし、連れて、と言ってもどうすれば……

遠惑（とく）うハルユキの目の前まで、かすかな震動音とともにホバー移動してきた黒雪姫は、何気ない仕草で体の右側面を向けると両腕を持ち上げ、腰を落とした。

まるで、所謂（いわゆる）《お格様抱っこ》を促すかのよう。

えーっ、と思うが、現（あら）れなんでもここで走って逃げることはできない。銀ヘルメットの表面にたらたらと汗が——伝（つ）う錯覚（さくさく）に見舞われながら、ハルユキはさこもなく両腕を差し出し、



黒雪姫の背中と腰にあてがつた。

「よろしく頼む」

そこが楽しそうな口調で言うと、黒雪姫はすくとハルユキの両腕に体を預けてきた。庫り込むタタムの、気のせいかかすかに押揺するような視線を浴びながら、意を決して黒水晶のアバターを抱え上げる。幸い、やはり黒雪姫はさほどでもなく、ハルユキは背中のフィンを強く震動させると片足で床を蹴った。

ぎゅうっ！ と、少し控えめに加速し空を目指す。

腕のなかの黒雪姫は、背と首を伸ばすように眼下の街並みを見渡しながら、囁き声で叫んだ。  
「これは……凄いな！ 納みつきになりそうだ……こんと直結対戦して、三十分たつぷり飛んではしないな……おっと、このへんでいい」

「はい」

細き、ハルユキはホバリングに移行した。

高度はさほどでもない。下方には、建物の屋上で向もきわめきながらこちらを見上げている無数のデュエルアバターたちがはつきり見て取れる。

黒雪姫は大きく一度息を吸うと――

地平線の彼方まで届きそうな、渾と張った声で叫んだ。

「聞け!!」

途端、しんつ、とステージ中が沈黙した。

「聞け、六王のレギオンに連なるバーストリンカーたちよ！ 我が名はブラッタ・ロータス！ 僧王の支配に抗う者だ！！」

うねる黒雲は身を締め、吹き過ぎる風さえも息を潜めた。視界内で動くものは、残り十秒となったタイムカウントだけだった。静寂のなか、高らかな宣言がどこまでも鳴り響いた。

「我と、我がレギオン（ネガ・ネビュラス）、今こそ隠伏の網より出て偽りの平穏を破らん！！ 網を取れ！！ 炎を掲げよ！！ 戦いの時——来たれり！！」

小水日記

っていうのは、何月からだっけ。

そんなことを考えながら、ハルユキはすっかり通いなれた病院までの道を歩いていた。

靴底が舗装を叩くリズムがいついっせいに早まってしまふ。これじや向こうについたときは汗だくだ、と思うがどうしても抑えられない。

今日は、ついに黒雪姫がICUから一般病棟へと移れる日なのだ。

ICUはもちろん直接面会禁止だったので、実際に顔と顔を合わせるのは実に三週間ぶりだ。となれば、多少足取りが軽くなってしまうのも仕方ない。

授業が終わったその瞬間、ダッシュで学校を出てきたのでまだ日も高く、十一月にしては暖かな陽光が背中を押してくる。校門では、どこで情報を聞きつけたのかあの新婦部の次巻取材班が待ち構えていたが、このところ錆びつきつつある（走って逃げるスキル）を発動させてどうにかローカルネット圏外への離脱に成功した。

気持ちが良いのは、昨日の日曜、ものすごく久しぶりに幼馴染二人で遊びにいったからと

いうこともある。

新東京タワーに登ったとき、ハルユキがうっかり観光ガイド用のネットに接触して（対峙）をふっかけられてしまったことを除けば（超高度という地の利で辛くも勝った）、トラブルもなくとても楽しい休日だった。

三週間前のあの決戦の日、ハルユキとタタムは二人揃ってチユリの家を訪ね、チユリの秘蔵で本当に全てを、何もかも打ち明けたのだ。

二年前タタムがチユリに告白した理由、それ以降タタムがどんどん追い詰められていった理由、そして何故いまになってハルユキとタタムが内心をぶつけ合う対決に及んだのか、その理由を。

〈ブレイン・バースト〉の存在を、チユリはなかなか信じようとしなかった。

最終的にハルユキとタタムが（加速）し、その日チユリに出された宿題を一・八秒で片付けることでようやく認めさせたのだが、さらなる難関はその先だった。

タタムが彼の（親）、報道部主将を務める青のバーストリンカーから手に入れてチユリに仕掛けたバツタドアウィルスのことを打ち明けたとき、チユリはハルユキの予想を数倍上回る爆発を見せ、二人とも大驚い、絶交、と喚きながら家から叩き出したのだ。

その後一週間チユリは口をきいてくれなかったが、時間をかけて彼女なりにタタムの気持ちに理解し、またタタムにそうさせた理由の一端は自分にもあると思ったのか、最高級パフェ食

べ放題という条件で二人を救した。

実のところ、今でもまだチユリとタタムはそこかきこちない。

しかし、それは時間が解決してくれるとハルユキは信じている。

なぜなら、ハルユキとタタムは、十年かかってついにチユリの望んだ関係——ほんとうの親友どうしになれたのだから。

いや、おそらくはそれ以上のものだろう。

今、シルバー・タロウとシアン・バイルは、黒雪姫のレギオンで肩を並べて戦うタッグチームなのだ。

すっかり顔なじみになったあの女性看護婦さんに笑顔で挨拶しながら院内ネットにサインインしたハルユキは、許される限界の速度で入院病棟最上階を目指した。

対戦のとき使ったエレベーターから出て、メールで伝えられた部屋番号の病室まで続くナビゲートラインを辿る。

右手の花束はピンクのカスミソウと、熱帯スイレンのなかで最も黒に近い品種のつばみだ、シーズンではないので予想以上に値が張って、新作ゲームソフトのためのささやかな貯金を全て遣ってしまったが、どうせもう買うつもりは失せていた。(「フレイン・バースト」以上に刺激的なソフトがこの世に存在するはずはないからだ。

はんの数分歩いただけで、ナビラインは呆気なく視界から消滅した。

目の前には、最上階南東の角の個室のスライドドアがある。

「ええ……と」

ハルユキはごくつと唾を飲みこみ、言うべき言葉を脳内でリハミサルした。

おめでとうございます……でいいのかな。いやまだ退院したわけじゃないんだからちよつと変か。おつかれるまです……は勿論違ひし。おひさしぶり……も何だか、ネットでは毎日会ってるしなあ。えーと、ああ、どうしよう。

しゅっ。

突然目の前のドアが滑るように開き、ハルユキは抱を食って飛びのいた。

途端、中から吃るような声。

「あのなあキミ、何分待たせる気なんだ！ 早く入りたまえ！」

「はっ……はびっ！」

惜けない声で一声叫び、ハルユキは腰界まで肩を締めながらかくかくした足取りで敷居を跨いだ。

背後でドアが閉まる音を聞いてから、おそろおそろ顔を上げる。

その瞬間——視界から、広い病室も、窓の向こうの景色も、大きなベッドさえ排除された。ハルユキの眼がとらえたのは、可愛らしいピンクのパジャマを着て、黒いカーディガンを羽

感った、三週間ふりに見るその人の姿だった。

少し瘦せたであろうか、もとより白かった肌が、さらに透き通るように色澤を失っている。常にさらさらと流れていた髪はきつちりと固まろうな三つ編みにまとめられ、左胸は全体が大きなギブスに覆われている。

でも。

あの顔——内側に星型を封じたような、大きな襟黒の双眸だけは、以前と何ら変わらないうちでハルユキを迎えた。

黒雪姫は、審がほころぶような笑顔を浮かべ、少し掠れた声で言った。

「や……久しぶり、ハルユキ君」

「は……はい」

考えていた台詞など全て吹っ飛び、ハルユキはただ両眼を何度もしばたきながらこくりと頷いた。

そのまま十秒近くも見詰め合ったあと、ようやく我に返り、ハルユキは数歩進み出るとささやかな花束を差し出した。

「あ……あの、これ、ちっちゃいでしょ」

「ありがとう」

黒雪姫はにつこりと笑い、受け取った。顔を寄せて、香りを嗅い込む仕草。

「フッフ・フ・フ・フ」だね。味の楽しみだ。そこに花柄があるから、すまないが水を汲んで溶けてくれるかな？」

「はい！」

ハルユキはサイドボードの小さな花瓶に、部屋の片隅の洗面台から水を注ぎ、受け取った花束を挿して戻した。

再びの沈黙。

触れ合う視線をほどいたのは、黒雪姫のほうだった。不意に表情が厳しくなり、軽い嘆息とともに硬さを増した声が発せられる。

「では……例の件の報告を聞こうか。その椅子に掛けてくれ」

「あ……は、はい」

そうだ、はしゃいでいる場合じゃないんだ。

そう思いつつも、一瞬の寂しさを感じながらハルユキは来客用の椅子にそっと体を収めた。

仮想デスクトップを操作し、まとめてきた報告書を黒雪姫に増らせる。

「まあと……例の、タタの〈魂〉が配下数人に秘蔵に試用させてたバッドア・プログラムですけど、先週マッシングサーバーにバッチが当たって完全に使えなくなりました。その〈魂〉は青のレギオン内で〈処刑〉……つまりポイント全損処分になったみたいです。ただ、プログラムの製作者が誰なのかまでは、ついに口を割らなかったらしいですね……」



「ア、なるほどな」

黒雪姫は短く息を吐き、細んだ両手にどきっと頭を載せた。

「おそらくは、格め手専門の黄色あたりが出所だろう。自分ではなく、敵対レギオンの幹部にテストさせるあたりがいかにもだ。ま、いつかこの手で黒幕を活し上げてやるさ」

剣を横した右手の指先を動かしながら物語な台詞を咬いた黒雪姫は、表情を改め、ハルユキを見た。

「で、どうだい、我々のレギオンは」

「はい……そのお、ボチボチと言いますが、（杉並第二轄区） および （第四轄区） はなんとか制圧中です」

「ふふふ、ささやかな領土だな、だが立派なものだ、構成人員三名のレギオンにはちよいどいい」

黒雪姫は、小さく肩を揺らして笑った。

黒のレギオン、（ネガ・ネビュラス）、かつては六王のレギオンと伍する巨大集団だったが、二年前の事件とともに解散、消滅の道を辿ったと言う。その復活を華々しく宣言した——までは良かったが、何せメンバーは今のところ黒雪姫とハルユキ、タタムの三人きりで、しかも最強の反逆者たる「フラッタ・ロータス」は当分実権に出られない。梅郷中園辺のフィールドを守るだけでも精一杯なのだ。

そんなハルユキの内心を察したか、黒雪姫は微笑みながら言った。

「そうしよんぼりするな。焦る必要はないさ……少しずつ仲間を増やし、エリアを広げていけばいい」

「は……はい」

ハルユキは頷き、久々の対面のせいで少しだけ滲んだ汗を拭こうと、制服のポケットに手を入れた。すると、ハンカチのかわりに指先に触れるものがあつた。

すっかり忘れていたそれを引き出す。青い表紙の、いまや本来の用途では使われることのない生徒手帳。黒雪姫のものだ。

「あ……そうだ、これ、預かってました、お返しします」

よく考えもせずそう口にしながら差し出した手帳を見て――。

黒雪姫は、ばちくりと瞬きし、小さく口を開き、そしていきなり頬に血の色を走らせた。ばしっ！ とひったくるように手帳を奪うと、それを胸に抱いてまた俯いてしまう。

「……………中、見たかう」

消え入るような声で発せられた問いに。

ハルユキは、ようやく黒雪姫の反応の理由を悟った。

「はっ！ いえっ、はひっ、いえその、はい、そのか……、み……見ました……」



突如、超高温で凍りついた空気を、短いひと言が切り裂いた。

「忘れろ」

「……は？」

「記憶を完全消去し、二度と触れるな。今後もしコレのことを口にしたら、キミは私のレベル9 必殺技をその身をもって知ることになる」

ひいっ！

という悲鳴を吞み込み、ハルユキはぶんぶん首を振った。

「言いません、思い出しません！ あっ、おれた、今忘れました完全に！」

びしっ！と背筋を伸ばし、だらだらと汗を流すハルユキを横目で睨み。

黒雪姫は、やれやれ、というふうに変みを浮かべた。

「まったく……、今や加速世界にその名の知れ渡る『白銀の罰』だというのに、キミはいつでもキミのままだな、ハルユキ君」

わずかに肩の力を抜きながら、ハルユキも言葉を返した。

「そ、そういう黒雪姫先輩だって、そのコワイとこせんぜん変わらないうすよ……（黒き瞳で）さん」

「心外だなあ。私はいつだって優しくしてるぞ……というか、あのな、ハルユキ君」  
こはん、と吹払いし、黒雪姫は姿勢を改めると、穏やかな微笑みとともに言った。

「いいかげん、あだ名だけではなく名前で呼んでくれないかな」

「あっ……は……はい」

こつくりと頷いてから、

ハルユキは――

戦慄すべき、ひとつの途轍もない事実<sup>事実</sup>に気がついた。

「あ……………」あ、あの」

「……………」

「ば……、僕……、先輩の、本名…………しりま……せん……」

びしっ。

まるで（加速）したとき、いやそれ以上の硬度と密度で再び世界が凍った。

しかし、それをすぐに、黒雪姫のため息混じりの笑いが溶かした。

「キミなあ…………。私の生徒手帳、見たんじやなかったのか？」

「あっ…………その、最初にいちど、ちらりと中を見ただけで……」

「ふふ。やつぱり、キミはキミだな、ハルユキ君。じゃあ、改めて自己紹介しよう。と言って

も、あだ名と大差ないんだ、けどね」

少し聞いた意から、穏やかな風が吹き込んで、黒雪のつばみの香りをそっと広げた。

細い体をびんと伸ばし、両手を胸の前で組み合わせて、美観<sup>ミカミ</sup>の上級生にして反逆の黒き王は

思<sup>す</sup>んだ声<sup>こゑ</sup>を響<sup>ひび</sup>かせた。

「私の名刺は……」

（終わり）

## あとがき

いつの頃からかは判りませんが、私はなにか物事に臨むとき、失望と落胆の準備だけをするようになっていました。

常に最悪を予想しそれに備える、なんていう格好のいいものではありません。最初から諦めておけば、いざ本当に諦めるはめになったとき、要求されるエネルギーが少なくてすむからというだけの理由です。

二〇〇七年十月にこのお話を書き始めたときも、どうせ完結なんかできるわけないと思っていましたし、完結したらしたで電撃大賞の要綱に合わせて削除修正する作業が終わらないと確信し、応募したあともまた当然のように、何段階にもわたる審査を通過し続けるなんて有り得ないと自分に言い聞かせ続けました。

ゆえに、受賞し出版された時には後書きでこんなことを書くだろう、などという準備をしていたはずもなく、今現在ここらの底から途方に暮れています。センスが光り含蓄に富み、機微なユーモアの中にも切ないペーソス漂う文章が書きたいのですがそのどれ一つ浮かんでこないのて現時点で悩んでいることをそのまま書きます。

私にとっては、このお話を書き上げられたのが既に奇跡でした。

だから、その延長線上で今こうして文庫のための後書きを書いているという状況が、じれはと極小の確率を帯り抜けて現実になったのかを推し量ることはまったくできません。

『アクセル・ワールド』の主人公ハルユキもまた、頑なに期待というものをしようとしないう人聞てです。でも、彼が私と決定的に違うのは、ハルユキは過期し続けるためにあらん限りのエネルギーを振り絞っている点です。物凄く一所懸命に後み向きなのです。

思うのですが、たとえどんなバクトルであろうとも、そこにエネルギーが存在すればいつかきつと何かが起こるのかもしれない。ハルユキの懸命さとは比べ物になりませんが、もし私が受賞できたことに奇跡と幸運以外の理由があるのなら、それは後みを向きながら極き集めたささやかなエネルギーだったのかなと思います。

僅断りな応募原稿がこうして一冊の本になるまでには、本当に沢山の方々に多大なご助力を賜りました。

ご多忙を察して解説を快諾頂いたのみならず、アクションシーンの要諦に関して惜しみなく数々の示唆を下さった川上稔さん、その為に書き下ろして頂いた（一）『アクセル・ワールド・カワカミエディション』は一生の宝物です。

ビジュアル化が難航極まる予想された主人公を、見事に描き出して下さったHMMさん、他のキャラクター達も、まるで最初からその姿で存在したようにすら思えるほど生きいきと、



私のイメージ内を動き回っております。

右も左も判らないニュービーのくせに到底素直とは言えない私を、辛抱強く懇切丁寧に指導下さった担当編集者の三木一馬さん、そのほとばしる編集パワーに付いて行けるように、私も精一杯キーパードを叩き続ける所存です。

また、これまで七年間の長きにわたってグローバルネット上で応援して下さいました多くの方々、皆様の応援があったからこそ、私は今この場所に居ます。

そして最後に、この本をここまで読んで下さったあなたに、最大の感謝を。

ありがとうございます。

二〇〇八年十一月二十八日

川原 礫



であっても遊びではない

天才プログラマー・茅場晶彦

# オンライン

電撃文庫にて、2009年4月より刊行開始——！

# 「これは、ゲーム」

クリアするまで脱出不可関。  
ゲームオーバーはプレイヤーの“死”を意味する。  
このヴァーチャルリアリティMMOは、  
ゲームであっても遊びではない。  
その矛盾した真実を受け入れたものだけが生き残る――

ゲーム内の“死”がプレイヤー自身の  
“死”も意味するゲーム  
「ソードアート・オンライン」に  
陥った主人公・キリト。強制された  
デスバトルに巻き込まれたユーザーは  
約一万人。その一人となったキリトは、  
ゲームの舞台である巨大浮遊城  
「アインクラッド」で、パーティを結成ない  
ソロプレイヤーの剣士として  
脱出をあらわしていく。  
クリア条件である最上層脱出を目標に、  
過酷で長い冒険(クエスト)を  
続けていたキリトだが、  
レイピアの天才・女剣士アスナや  
血闘剣士団団長「十字屋のヒースクリフ」との  
出会いが、彼の運命を大きく変える。  
果たして、キリトはこのゲームから  
抜け出すことができるのか――

個人ウェブサイトをもち、  
総閲覧850万PVオーバーを記録した  
伝説のオリジナル小説が電撃文庫に登場!

電撃文庫 第15回電撃小説大賞(大賞)受賞作  
川原 礫が贈る最新作!!!

# ソードアート・

新連載の注目イラストレーター  
abeoがビジュアルを担当!!

「アクセル・ワールド2」は  
▶▶2009年夏頃発売予定!!!



# COMMENTARY

commentary

## 解説

※読者へ

以下、加筆として自分（ひと）の「ハイパー」のアドベンチャーと解説が交じります。  
アフィシャルのネタでは悪くはないのですがそこら辺には手をつけず、  
アフィシャルはアフィシャルとアフィシャルとどうこうで、以下詳しく説明したいと思います。

そんなわけでどもどもです。本作解説役の川上恭です。  
まあ、解説をしようかと思ったんですが  
どうしようかやっぱいいのがないな  
ところが要領感めませんで、

なのでここは、

「読んでるとき、こんなことを想像したメモ」  
みたいなものを、加筆と加筆キャラ紹介という感じで  
まとめてみました的な。

まだ加筆さんの絵など全く見ていないので、

自分の加筆想像なんですけど、

本編を読まれた皆さんとの共通項や差異など、

それらを発掘出来たらなば、

そのこと自体を解説したいと思います。

あ、川上さんとは本作加筆三木さんとは

これから肝要とする方針で一つ、

では少々お待ちを。

やあ諸君、俺の名前はカワカミ。(ホワイト・タリーニツプ)というデュエルアバターを持つ中学二年生だ。フケ顔で三十過ぎに見られることもあり、電車では前に座っていた女の子(妹友)が「まあ、ひとこあしー」とかキツツイ発言をすることもあるが中学生だ。

俺も諸君等と同じバーストリンカーのはしくれだが、別に諸君等のような戦国キチガイじゃあない。あんなものは子供のすることだ。——ひいすいません言い過ぎました。ええと、では俺は何かと言えば、バーストリンク用の改造MODの製作を行うプログラマーだ。

ブレイン・バーストの世界に対し、俺のようなプログラマーのスタイルは懸隔の種を手えるか、懸隔の種を手えるかのどちらかしかない。が、後者の類を組まなかったり、組んでいてもリンクさえされなければ、基本的にプログラマーはブレイン・バースト世界の貴族者として各派から保護される。つまりは対戦の対象として除外されたり、不当な対戦から守られるようになるわけだ。そして各派の闘いになれば、処罰者のバーストポイントを得てレベルアップも早い。俺もある派の闘いで働いているが、作るのは金バーストリンカー共用のプログラムだ。俺が作ったプログラムは、まず所属派がバーストポイントで買い取り、それを所属派のブローカーが対戦やヤラリ流にバーストポイントで売って戦の財力にするわけだ。こういふ、俺のようなプログラマーの争奪戦や暗闘騒ぎもあり、インドア職といってもなかなか賑やかな生活だ。

そして今、俺が作っているのは、これよりも俺の専門と言ってもいい。リアル側の情報をバーストリンク世界のアドバイザーに転送するフォワードだ。

このフォワードを使えば、一千倍速で加圧されているブレイン・バースト世界にいながら、リアル側の自分が何を五感しているかを知ることが出来るわけだ。

……別にそんなのはいらない？ 自分の体がどうなっているかなど、一千倍速なのだから、確認をもし要らなくてもリアルではたった二秒間のことだし？

それはどうだろう。一つ、まずは男連中にだけ解る話でしょう。

いいか？

——貴様の母親が背後のドアを開けて部屋に進入するのには、〇・二秒もあればいい。解るか？

もし、エロ動画を見ていたり、エロゲをブルウエイしている最中に、あっ、刺激が足りぬ！ だばだばだぜ！ とバーストリンクしたくなったとき、わずかな複層タイムラグが貴様の少年時代の思い出に汚点を残すことになるかもしれないと、そう考えると、俺の作るフォワード。お母さんにひつしょう（略称。おかひつし）。のアラーム機能は必須だろえ。

あ、女性には知りません。ええ、そっちは未知なる応用編ということで一つ。

しかし現在、バーストリンクを越え、アラブデイトだけでバーストポイントが入ってくる生活だが、やはりこれも先祖代々続いたプロダクター家系のセンスだろう。祖父は8ビット時代か



らのエロゲ専門プログラマーで、死ぬときも合詞通りの連打を虚空に空打ちしていたそうだが、誠にも男の器である。何て結婚してきたのか不思議だが。

そしてそんな怪物の孫である俺も師十三にして十八禁ゲームを嗜むようになり、リアルでは友人のニューロリンカーをハードプロタクト解除でリジョンフリーにして小銃を振っている毎日だ。フーフ貴様ら、貴様らが今ブレイしているエロゲのテキストはうちのジジイが六十年前に打った讀えテキストのリメイクだぞ。だけど爺さん感、属性かよ。血は争えんな。ああ、でも爺さん、今の時代に生き延びていたらどんな感想抱くだろうか。いや虚目か、だって爺さんボリゴン駄目な二次元派だったしな。一度、その件を流して風呂場で殴り合ったしな。ジジイが子供に偏執執着しつづけたやいけねえ。遺伝で我慢しとけ。

ともあれ今プログラムのバージョン8はテスト中なのだが、どうも深い領域に飛び込みつつあるようだ。ブレイン・パーストのシステムが解ってきたこともあり、遂にリアル側の情報をアラームではなく、実体的にフォワード出来るようになったのだ。

つまり、一千倍の引き延ばし状態だが、現実側の五感をこちらに持ち込めるのだ。

これは、意味がないことのように思えるだろう。吾も何れ、一千倍に引き延ばされてしまえば単なるのびのびストレッチだからだ。

しかし、今、実はリアル側の俺は食事中だ。更にはバージョン8のテスト中だ。

意味が解るか？

そう、今、リアルの他の口の中にあるのは、スプーンに乗ったカレーだ。

そう、解るな？

既に口は閉じられており、上顎に押しつぶされたカレーの熱いどろつきと寒の澄れており、鼻に抜ける辛みと甘みがつまりパイモントだ。すなわち中学生からのこれが一千倍引き延ばしてあるため、口の中や歯裏に、これから三十分間、カレーと寒の熱さが継続する。今後三十分、歩こうが、上を見ようが下を見ようが、ギガが対峙しようが裏てようがつまりずつとカレー――

どうだ？

もし対戦に負けたとしても、三十分ずつとカレーだったら、このパイスト世界に良かったと思えないだろうか？

し・か・も、リアルに戻れば、その暖きを食べる！一千倍十一のカレーがそこかしこ、しかしこんなものでは済まないぞ、人間にはもつと隙がある。

そう、リアル側でタイムマシンを合わせれば、あらゆる快感がパイスト世界で一わけだ。

おっと。

いいか？　ここで簡単にエロ方面に行こうというのは、それは中学生レベルのあ、彼は中学生なので既にやった。いや、ナ、テストですよ？　試験！　試験！！

まっとう家の中でエロゲ相手に中間考査してみたのだが、向こうの世界の處で五分くらいビタンビタン音を立てのたうってたら生身の方にフイーッパタあったらしくてリアル俺が心臓麻痺で死にかけた。バーストの方も男のサゲで完全破綻不能になるために無防備極まりない。

しかし危ないところだった。死んでしまつて、現場を確認した娘に認知があつては困る。父上、母上、貴方の息子は妹系エロゲで死ぬような男ではありませぬ。それは一千倍だったからこそに御座います。食糧巨乳系だったら五倍で死ぬがな。

だがあのとき、何やら封戦仕掛けてきた最前線の「翼付き」がこつちを探して外をうろろろしていたらしいが、まさか俺が家の中のけぞつてガッタンガッタンして「ひあああ——」

カワカミ汁出ちやうのはおおおおお——とか人生とカースト捨てたようなこと宣つてるとは夢にも思ふまい。俺も思いたくないが、しかし最大の被害は、命と将来生産予定の子孫繁栄の問題もだが、視覚側のフォワードだな。運悪く窓に映つたあの瞬間の自分の顔を三十分見ることになる。精神に傷を負つて誠に遺憾である。今度やるときはカータン締めぬこともだが、何もかも嫌になつて死ぬときにもしよう。なかなか難しいものである。

だけど、それじゃあ使えぬえだろうという諸兄どもよく聴いて下さい。この一千倍アワー、別にエロ以外にだつて使い道はあるのだ。

——そう、放尿だ。

先日、学校のトイレで立ち解尿しているとときにふと思いついてバーストリンクしてみたのだ

が、三十分間出しっぱなしというのは正直堪えられん。更には感覚操作で開放度を調整（調整）して、単にすると重（オモシ）い。これはあれだ、ベクトルボムを何本分だ一体。ええと、言葉にするなら。あの俺の全てが抜け出ていく………！という感じだな。思わず内服（うちふく）になってガタガタと三十分間バースト開放している間、最近の。枝打ち（えだうち）がこもらを抜いて腐下（くさ）を駆け回っていたようだが、まさか俺の主戦場がトインだとは夢にも思わまい。俺も思いたくなかったが。

ともあれ、この破壊力が高くなったページジョンはおそらくブレイン・バースト世界に飛躍（とつとつ）的な革新を多分もたらすと思われろのだが、早速かぎつけてきた連中がうるさくてかなわん。俺はもうちょっとコレを調整。ええと、テ、テストですよう。テスト、つてまあさうしたいのだが、うちの派の上層（じやう）を悩（なや）めている連中が、他派に売（う）る気が。と懸念（けんねん）をつけてとりあげようとしてくるわけだ。全く、どいつもこいつもエロ中学生だから困りものだな。たまに道端（みちぎは）にエロ本が捨ててあったときバーストリンクすると、通り過ぎる振りして一千倍観察しようとしていた連中がバースト世界でも付近をうろちろとお互（たがひ）に牽制（けんせい）しあっている貴様ら大丈夫か頭。可笑（おか）いなので俺はリアルを割（わ）って拾（ひろ）って、バースト陣（じん）にいてもあろう連中に全ページ商標（しょうはく）をめぐって見せてやることにしている。この二重世界を意識した神の行いにはよく御札（ごふだ）のメールが来るが、やはり善行（ぜんぎょう）はするものだ。途中で本を閉じて持って帰ると対象（たいしょう）申し込み予約（よやく）が四倍（よっぴ）超えるが。話がずれたが、ともあれこのフォワード！、上司に狙（ねら）われているのが厄介（やくがい）だ。

先日なども、俺が主戦場でデカいのを射出した際の。座（ま）上、座（ま）されたあ！を一千倍の喜び

でテストしていたところ、あの馬鹿、そこに乗り込んできやがつて、いや、上司だから馬鹿とか  
いっちゃいかん馬鹿とか。しかしあの馬鹿、いやいやいや上司だから（略）。ともあれあのと  
きは、以前にデーカストツタしていた。鼻に指を突っ込んだ瞬間の感想。情報を一千倍引き  
延ばしてヤツの尻にフォワードして病院送りにせしめたが、次も切り抜けられるとは限らんな。  
そろそろ涙を腫れて行動するべきだと思ひ、そのツナギを今日はつけにいく予定だ。

そのためにこのフォワードを売るのが、だがまあ、売る場所は決めている。少なくとも、  
拷問の痛みを一千倍引き延ばしさせるようなことには使わせるわけにはいかないだろう。

ペーストリンカー達だつてリアルで怪我や病気をするときもある。病気でペーストリンカーで  
きても、病院の生活は退屈なものだ。しかしこれがあれば、ちよつとした見舞いの菓子が一千  
倍の味わいになりもする。味覚、嗅覚、視覚、聴覚にすれば、味だけではなく、花や、季節の一時を  
留めることも出来るだろう。最近には病院関連を管理し、守護しているペーストリンカーの族も  
あるから、彼らが高額で買い取るに違いない。

だが俺も事情な男だ、やはり両売としてやらせてもらう。支払いは、そうだが、——俺の気が  
向いたときに言い値で、だ。快楽を得た後、莫大な額をいつ脅佐されるか震えているがいい。

さて、じゃあ飯食つたら、見当をつけてる連中に会いに行くか。あ、でも、その前にトイレ  
に行かねば。変なことではないぞ諸君。——期末試験である。

……という感じで。

実はこの短編、解説の仕事を引き受けて  
本編読んだ直後に本作担当の三木さんと  
タベってる内にアイデアが固まり、

ネタとして即座に書いて

送ったりしたものだったりします。

しかしそれを解説の一助に使おうという話が  
まとまるのですから気が抜けませんこの仕事。

ともあれ、

本編を読まれた方は、少なからず、

読み終えた後に、

「外の風景を見て、その向こうに誰かが  
一千倍速度で戦い続けている」

のを感じるんじゃないでしょうか。

いろいろと読み手の想像力を刺激する  
ツールの魅力を持った小説だと思います。

……いや別に刺激されてカフカミ汁かよとか、  
そういうことではなくてですね。

もっとスケールの大きな、こう（略）。

次ページからは自分的に想像した  
キャラクターやアバターの想像図と  
キャラ雑感という感じで。

絵師さんの絵が正式なもので、

ちょっとした遊びネタですが、

刺激の切っ掛けになれば幸いです。

ary

個別的なユニットと  
シルバークロウの  
駆動系や機体の  
プログラムや  
データなどが  
部品のように  
表現されるのは  
どうかな的な。  
強化については  
シアンのような  
肉体型は安定した  
外付けパーツ系。  
クロウのような  
機械型は内部の  
改造も楽だが  
安定が難しいとか。  
そんなことを想像したり。

シルバークロウ/ハルユキ

# HARUYUKI

そして少年は  
空を見上げるにつれ  
憶える



## commentary

首が上を向くんだろうか。  
ハルユキについては母親との距離がどうなるのか  
気になっていたり。

文中で示される家の構造を考えると  
母親はちゃんとハルユキに窓のある部屋を  
与えて自分は内部屋なんですよね。

そういう親子の関係をハルユキが  
どう気付いてどう思っていくのかなあ、とか。  
いろいろ楽しみな主人公ですな。



commentary

黑雪姫／先輩

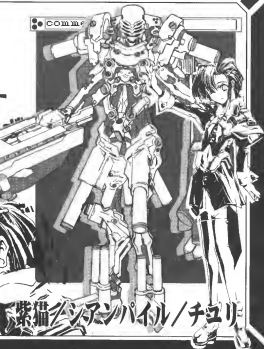
# KUROYUKIHIME

鱗背な彼女は  
己知らずの刃傷持ち  
惚れる男は燦銀



## commentary

自分の先輩と黒雪……、邪魔だよ先輩！  
何げに人生一番楽しんでる人。  
黒雪姫は偽装状態だとスカートから何から  
全部が刃をカバーリングした刀剣で、  
傘は構成する刃を重ねて大剣化可能とか。  
下腕も膝下もバイスアームで挟んでいるだけで  
本体はダルマ状態。胸上から生える剣は白戒の  
現れですが、気を許す相手の前だと前方に  
抜け落ちるときめきブレードとか如何かと。



紫猫プロジェクト/チェリ

# ANOTHER

## commentary


お、お前ら全員邪魔だあー……！  
ツァンバイルは川原さんのアイデアで  
精悍だけどゴリラ型に出来ればなおめなのが  
あったので、増強パーツで体格シルエットを  
つけてみたらどうかな、とか。  
鎖は目のどのラインを見ても隠りな  
るように、とか。  
チュリの紫猫は人型アバターを  
猫的にしてみる感じで。

ツンデレ？  
違う  
パイルデレだ

## commentary

では解説（ア）もこれにて終了。  
背景は（えらく詳しくはくいますが）高円寺の  
氷川神社をモデルという感じで。  
ポンカー達もブツに登校する学生達で、  
しかし戦いも何も自分達主導で開始する。  
しないときは日常、というのは、  
強制されない戦いで自身を投じる、  
つまり読書やゲームに没入のと同じですね。  
自ら必死になることを望む。  
そういう焦燥前提の趣味が一つ増えた。  
この世界は常に加速を欲していると思います。  
何を思ふべきか、どうすべきか。  
自ら望む焦燥と必死が世界を動かすならば、  
王達の加速は望まれ結果が呼ばれていく。  
しかしそこに飛び込む少年がいます。  
これは、いつも必死な彼が加速する物語。  
いつもいつも必死で加速していく少年。  
必死な少年です。

自分は、  
必死な人を支持したいと思います。  
貴方はどんなちんでしょうか。

多田 幸平  Thanks!

# ENDING



本書に對する感想、感想をお寄せください。



おて光

〒160-8326 東京都新宿区西新宿4-34-7  
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「川原 礫先生」係  
「HIMA先生」係







## 電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。古今東西の名書を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新機軸で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times, Changing Publishing) 時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日  
角川歴彦



## アクセル・ワールド―黒雪姫の帰還―

川原礫

イラスト／H・M・A

ISBN 978-4-04-867517-8

「黒雪姫」と呼ばれる少女との出会いが、デブでいじめられっ子の未来を変える。ウエブ上でオリスアゲ的な人気を誇る作家が、ついに電撃文庫（文庫）登場。

K-16-1 1716

## パラレバ―Parallel lovers―

神月護文

イラスト／藤原ぼん

ISBN 978-4-04-867518-5

思いを寄せていた一族の荘にうらみひがれる縁の悪縁が通った。その電話は一族からで「死んだのはお前なんだ」と告げられる……。珠玉の学園ものミステリー。

L-13-1 1717

## 東京ヴァンパイア・ファイナンス

黒銀博士

イラスト／佐々木幸年

ISBN 978-4-04-867519-2

異世界中に出現した吸血鬼種と人間社会をする。090の黒銀。ヴァンパイア・ファイナンス。今度も怪物と闘争を求めて動く。新敵や設定が満載。狂気の野望が描く。

L-14-1 1718

## ロウきゅーぶー！

高田裕介

イラスト／こころる

ISBN 978-4-04-867520-8

ロリコン騒動で名声を失ったのに、なぜか気づけば小中学校女子バスケットボール部。今更にもっと活躍されるも縁はついに……。第1回電撃小説大賞（銀賞）受賞作。

あ-28-1 1719

## 雪姫姫

紅土いづき

イラスト／高橋祐樹

ISBN 978-4-04-867521-5

涙地の戦うその山脈で雪姫姫の女が起つ。この戦いに永遠の呪いを……。悪い人を喰らうというフェルビエルの世代を築いた物語。極寒の地に舞う雪の行方は……。

C-10-3 1722



## 電撃文庫

## 灼眼のシャナ

高橋弥七郎

イラスト／じやうびるごう

ISBN4-8401-1118-5

平凡な生活を送る高校生・悠二の許に少女は突然やってきた。炎を纏う彼女は悠二を「赤日霊」へいざなう。「いずれ存命が満ちる者」であった悠二の運命は？

た-14-3 0733

## 灼眼のシャナⅡ

高橋弥七郎

イラスト／じやうびるごう

ISBN4-8401-1111-1

「すでに存在なき者」悠二は、自分の消失を知りながらも書院通り日常を送っていた。悠二を導く灼眼の少女・シャナはそんな彼を見て……。

た-14-4 0782

## 灼眼のシャナⅢ

高橋弥七郎

イラスト／じやうびるごう

ISBN4-8401-1110-2

学園一帯は決壊する。最強の敵に立ち向かうことも、シャナは初めて気づく。この感情の正体。炎を纏め、悲しめる。紅世の使。そして、魂井悠二は……。

た-14-5 0814

## 灼眼のシャナⅣ

高橋弥七郎

イラスト／じやうびるごう

ISBN4-8401-1119-0

敵の自在な「無りかこの国」に挑みつたシャナと悠二。シャナは敵を倒したと山吹色の空へと帰還する。悠二は、友達を学校で、学園一帯を導くため、ただ定る。

た-14-6 0831

## 灼眼のシャナⅤ

高橋弥七郎

イラスト／じやうびるごう

ISBN4-8401-1117-1

アランストール、ヴァイルヘルミナ、謎の白骨。彼らが取り巻く謎い少女こそ、「炎撃灼眼の討ち手」シャナ。彼女が生まれ大敵を倒すに結ばれる……。

た-14-7 0868



## 灼眼のシャナVI

高橋孝十郎

イラスト／いたのりお

ISBN4-06-8402-16-08-3

今までの自分には無かった、とある感情が芽生えたシャナ。今までの自分には無かった、小さな勇気を覚悟告白。二人の想いの裏には、一人の少年の姿が……

た-14-0 0961

## 灼眼のシャナVII

高橋孝十郎

イラスト／ちたのりお

ISBN4-06-8402-27-25-X

国神院二はすでに死んでいた。真実を知ってしまった吉田一虎は絶望していた。絶望して、そして国二から逃げ出した。空には、凄んだ花火が上がっていた――

た-14-10 0967

## 灼眼のシャナVIII

高橋孝十郎

イラスト／いたのりお

ISBN4-06-8402-28-03-7

「時限」をどうノが定めた。「真実」を逃げた国二とシャナ。次は何らを持ち受けていたのは「闇夜脱獄」という。日常、だった。シャナは女子学生に思われようとするが……

た-14-11 1001

## 灼眼のシャナIX

高橋孝十郎

イラスト／ちたのりお

ISBN4-06-8402-29-88-1

「アスナス」を破壊するのではありません。ヴァルヘルとその外敵を正面に、シャナは張りつき、そして迎撃する。国二を救う二人は対峙した―― 激戦の第3幕――

た-14-12 1050

## 灼眼のシャナX

高橋孝十郎

イラスト／ちたのりお

ISBN4-06-8402-30-42-7

一つの大きな戦があった。去して人が知ることをない。「紅蓮の獄」とラレイルヘイズの、戦われた戦い。それは、もともとりの「灼眼のシャナ」の物語だった。

た-14-14 1140



## 電撃文庫

## 灼眼のシャナⅪ

高橋孝七郎

イラスト／いとうのいぢ

ISBN 4-8402-1104-0

坂井堅二の許に、日野が帰ってきた。御城高校には学園祭の準備が迫り、シャナもそれを支えようとするが、古田一美と仲良くする堅二を見て、気持ちが不安定に……

た-44-15 1165

## 灼眼のシャナⅫ

高橋孝七郎

イラスト／いとうのいぢ

ISBN 4-8402-1304-7

日常の中の非日常、御城高校学園祭の学園祭「運動祭」を満ちむ堅二たち。そこに何処からか嵐が流れてきた。「紅世の壁」の自在流を破った、新しい嵐だった……

た-44-16 1217

## 灼眼のシャナⅬⅢ

高橋孝七郎

イラスト／いとうのいぢ

ISBN 4-8402-1549-X

「零時道子」を巡り、<sup>（リミット）</sup>「時間」ファイレスの隠密を受けた堅二。『壁』の出現も相俟って、事態はさらなる変化を遂げて。それは、あの「使」・蘭境の再来……

た-14-18 1313

## 灼眼のシャナⅬⅣ

高橋孝七郎

イラスト／いとうのいぢ

ISBN 978-4-8402-1719-2

クリスマスを迎えた御城市では、二人の少女に逢瀬の時が訪れていた。一人の少年――坂井堅二を巡る、シャナと古田一美の決断の時が。

た-44-19 1386

## 灼眼のシャナⅬⅤ

高橋孝七郎

イラスト／いとうのいぢ

ISBN 978-4-8402-1920-5

「時流」と呼ばれる「紅世の王」が最も恐ろしく存在……「成功の秘けき」マール。東海大学チームへの入試の準備を始めた彼が向かう先は、時流の王の隠れた居た……

た-44-20 1464



## 灼眼のシャナ XVI

高橋客十郎

イラスト／いとうめいぢ

ISBN 978-4-04-867541-1

タリスマン。シャナと吉田一美は、東井悠二を介抱も兼ねた「紅世の正・邪れの戦」となった。悠二は「魔物殿」へと舞臺、「大命」に向ひ大団円に動き出す――

た-4621 1506

## 灼眼のシャナ XVII

高橋客十郎

イラスト／いとうめいぢ

ISBN 978-4-04-867541-9

「魔物殿」に封印されたシャナ。フレイム・ヘイズとしての力を奪われた今の彼女に立ちすくへばならぬ。命を懸かう。彼、が、すぐそこまで迫っていることを……

た-44-23 1675

## 灼眼のシャナ XVIII

高橋客十郎

イラスト／いとうめいぢ

ISBN 978-4-04-867521-5

悠二は「天座」脱却のため、「天座の陥穽」に陥立った。ついに「紅世の正」とフレイム・ヘイズは「大団円」に向かう。その時で、ウィルヘルムとシャナ無差別闘争を繰り出し……

た-14-24 1720

## 灼眼のシャナ O

高橋客十郎

イラスト／いとうめいぢ

ISBN 4-04-02-3050-1

その少女に名前がなかった。ただ「暫（しばらく）前」の「フレイム・ヘイズ」と呼ばれていた。少女の使命は、「紅世の正」の討滅。いまはまた、その闘いに……。はい、なかな……

た-44-13 1101

## 灼眼のシャナ S

高橋客十郎

イラスト／いとうめいぢ

ISBN 4-04-02-3042-6

「焼肉の盛り手」「マイジョリィ・ドール」「戦闘狂」と懸賞される少女の過去が、今結解される。吉田一美の姿を聞いた「灼眼のシャナセージ」も登場――

た-14-17 1209



## 灼眼のシャナⅡ

高瀬智七郎 イラスト／いんぎんいんぎん  
コミック／角川書店

ISBN 4 04 71 60 6 7 (C) 2007

続刊した第二巻シャナ。二人がまた通い合  
うていた頃の物語「ドミセイユル」、ヴィルベ  
ルとナとソレイスの物語「ヤーニング」は  
今、新編第一巻「シリウス夢夜編」

た-14-22 1600

## ウエストディアの双星 真逆の英雄登場の章

小宮正樹  
イラスト／渡瀬

ISBN 4 04 71 60 7 4 (C) 2007

敵国大艦隊突撃。国家の元首の危機に  
至った脅は逃げ出した。残ったのは不  
思議人の青年とまだあどけないが明るき  
少女だった。二人は二人が英雄になる

お-10-5 1545

## ウエストディアの双星 幸運の女神(?)降臨の章

小宮正樹  
イラスト／渡瀬

ISBN 4 04 71 60 8 1 (C) 2007

ウエストディアを襲ったウミダム太  
公国の侵略。だが交戦状態は不可能とし  
か思えない船だった。しかも悪魔を持  
ち来けるのは防戦の相手ユリテスです

お-10-6 1597

## ウエストディアの双星 世を忍ぶ將軍避敵の章

小宮正樹  
イラスト／渡瀬

ISBN 4 04 71 60 9 8 (C) 2007

凶悪の星が降り注ぐ危機。バドエルは  
アルファ二を奪取込み退治に乗り出す。  
自分を明かせぬ事情があり、無名の一士  
官として指揮をとる。二になるのだが

お-10-7 1654

## ウエストディアの双星 4 うるきき王騒乱に立つの章

小宮正樹  
イラスト／渡瀬

ISBN 4 04 71 60 0 5 (C) 2007

王子ユルネリオが突然の惨劇の 王位を  
求める王争のせいで、ウエストディア王  
國は二つに割れる事態に陥る。ついに  
隣国連合軍と国家の交戦にまで発展しや

お-10-8 1724



## ほうかご百物語

読みひらきます

イラスト／原種しん

ISBN978-4-04-87927-7

真一が夜の美術室で出会った少女は顔色に暗く瞳を持っていて……。ピュア可愛いイタチさんと真一の、不思議な読後感を持つ、純白恋愛小説大賞（大賞）受賞作！

み-12-1 1546

## ほうかご百物語2

読みひらきます

イラスト／原種しん

ISBN978-4-04-87927-7

美術部の一員として学校生活に奮起中イタチさん。しかし、そんな彼女を追う怪しい影が……。ピュア可愛いイタチさんと真一の読後感不気味物語。第二巻！

み-12-2 1606

## ほうかご百物語3

読みひらきます

イラスト／原種しん

ISBN978-4-04-87927-7

照澤いづみ家客に現れた真一に出かけることになった真一とイタチさん。と、その他の人々……。シリーズ第3巻は、学校を飛び出してイタチさんたちが主役ですっ！

み-12-3 1668

## ほうかご百物語4

読みひらきます

イラスト／原種しん

ISBN978-4-04-87927-7

3学期が始まり、平穏に……。読後感絶妙の目々を語っていた美術部。でも、そんな彼らの読後感を恐ろしがる真一が現れての。読後感いいのシリーズ第4巻！

み-12-4 1723

## ラブンツェルの翼

小説家二種

イラスト／福田浩

ISBN978-4-04-87927-7

へんにとつて危険な武器が入っています。トランクに入っていたのは一糸まとわぬ裸の少女……。彼女を武器として、生き残るための「戦闘」のゲームが始まる！

と-8-7 1726



# 電撃小説大賞

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、  
高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、有川 浩(『図書館戦争』)、  
支倉凍砂(『狼と香辛料』)など  
時代の一線を疾る作家を送り出してきた「電撃小説大賞」。  
今年も新時代を切り拓く書き手を募集中心！  
超弩級のエンターテイナーを目指せ！

- 大賞**.....正賞+副賞 100万円  
**金賞**.....正賞+副賞 50万円  
**銀賞**.....正賞+副賞 30万円  
**電撃文庫MAGAZINE賞**...正賞+副賞 20万円

## 新設！ メディアワークス文庫賞

.....正賞+副賞 50万円

「メディアワークス文庫」はアスキー・メディアワークスが著者を  
待たせ続ける、大人向けのエンタテインメント系文庫レーベル。第  
16回電撃小説大賞より新部門として上記メディアワークス文庫  
賞を設立し、2009年をより地盤を定めます。既存の枠組みを果  
然と越え、新しいメディアを創造していただきます。ご期待ください。

## 選評をお送りします！

1次選考以上を通過した方全員に選評を送付します！ また最終選考  
まで残った作者には、必ず担当編集がついてアドバイスをします！